

(目次)

1. はじめに(必ずお読みください)
2. 全体像の理解
3. 今後の計画(ロードマップ)
4. 陰陽五行波動論とは？
5. "米"を巡る物語に至った経緯 前編
6. "米"を巡る物語に至った経緯 中編
7. "米"を巡る物語に至った経緯 後編
8. "血"を巡る物語に至った経緯(神話の読み解きと考察)
9. これからの具体的なミッション
10. 最後に

01.はじめに(必ずお読みください)

当書は二部構成で作られています。

前編ではた、Kの人生での出会いと出来事を元にして、“米”を巡る物語に繋がるそれまでの経緯を、後編では、各所に記された文献とKの知見を元にして、“血”を巡る物語に繋がる背景を描いています。

前半の“米”を巡る物語では自身の出会いと出来事を通して、後半における“血”を巡る物語では自身の知識と経験を元に歴史を読み解いています。**前半の物語で会得した”五行(木火土金水)の悟り”を用いて後半の物語は読み解いていきますので、順番にご覧頂く事を強くお勧めします。**

また、当書はあくまで私の偏見を元に作成された資料であって真実ではありません。

ボクは専門家ではなく、その道に関しても無知同然です。

あくまでここで描かれている事は、自分の経験を元に辿り着いた独自の見解の領域を出ません。なんとでも言えるところは、時に当てずっぽうな見解を仮置きしたりもしてます。

これまではその間違いとそれに対する批判が怖くて、このようにまとめて公開する事は考えていませんでした。しかし時が満ちた今、そこは重要ではありません。当時も今も基づく原理原則、則るべき摂理は共通しており、全ての物語はその上で展開されています。

また、神話には相対的に読み解ける技法が用いられているため、複数階層の読み解き方ができたりします。それ故に、一つの歴史の解釈を間違えても成り立つ節があり、その捉え違いで、ここに描かれる物語に大きな違いが生まれたりします。

故に、当書には無いもの、足りないもの、間違いが多く含まれている事を予めご了承ください。この道に詳しい人が見たらダメ出しだらけになると思います。

これをきっかけに気になった部分を、それぞれの目で直接確かめていただけると幸いです。

また、今後の活動として、当書に記載した内容の真実を、リクエストに基づいて共に確かめる探検企画を持って、直接確かめていきます。その確かめるべき叩き台として文献にまとめたものもあります。

一緒に真実を確かめていけたら楽しくないですか？

当書を手にとって頂いた方の中から興味ある人たちと共に、ここにある見解と真実をすり合わせしながら、それらの見解の訂正による物語の見え方の変化も楽しみながら、時に打ち立てた見解を丸ごとひっくり返してしまうような間違いも受け入れながら、共に真実に近づけていけると幸いです。

02.全体像の理解

(Needs)

■ 当書を発行した目的

- 1.日本で起こっている問題に目を向けてもらうため
- 2.「意識改革に伴うメッセージ」を通して「意識改革」の必要性を伝えるため
- 3.血の繋がりを辿る事で「個の意識」から「集の意識」へのパラダイムシフトを起こすため
- 4.この世の中に点在する同志の魂を目覚めさせ、その仲間をここに呼び起こすため
- 5.夢や目標を持っている人の存在を明らかにし、周りを光で満たすため

■ 手段としての具体的な取り組み

- 1.赤道直下エクアドルの農家との連携による米作り
→ “米”を巡る物語として、「冒険」と題して現実世界で展開
- 2.三重県志摩市で開催される「潮かけ祭り」に対するクラウドファンディングの立ち上げ
→ “血”を巡る物語として、「探検」と題して現実世界で展開

【赤道直下エクアドルの農家との連携による米作り】

■ なぜエクアドルなのか？

- ・地球上最も天に近い所にあって水、空気、土壌が綺麗だから
- ・日本の文化にエクアドルと重ねてみられる要素が見受けられるから
- ・農耕民族繁栄の過程でその文化合流を果たした可能性のある場所だから

■ なぜエクアドルの米作りで世界が平和になるのか？

- ・比較対象となるお米を生み出すことで本質的な問題に目を向けるきっかけになるから
- ・「意識改革に伴うメッセージ」を伝える事で「意識改革」が起こるきっかけになるから
- ・夢実現、目標達成に向けて取り組む過程を共有する事で次の世代にバトンが渡るから

【三重県志摩市で開催される「潮かけ祭り」に対するクラウドファンディングの立ち上げ】

■ なぜ三重県志摩市の祭りに対するクラウドファンディングを行うのか？

地元の人々が支えてくれている日本人全員に関連性のあるお祭りだから

■ 提供するもの

- ・ミッションリスト
- ・特別観覧席の設置(オープン)
- ・魂の声を呼び起こすプラットフォーム(クローズ)

■ 今後のあゆみ

- ・当書「陰陽五行波動論ガイドブック」初版発行
- ・リクエストに基づいた探検の実施

(WANTS)

1. ワンネスによるヒトツナギの世界、アカシックレコードの存在、縄文土器にみられるイメージをそのまま描写させるであろう文字伝達技術の存在など、現代の科学では解明できない神秘的とされるものに触れていきたいし、神秘的な出来事を経験していきたい
2. 周りの夢実現、目標達成に付随する曲作り

(補足)

当書は世の中に点在する仲間の魂を目醒めさせる事と、その仲間をここに呼び起こす事を目的として作成しています。ご覧頂くとわかると思いますが、この物語の続きを見るにしても、この物語の続きを共に歩むにしても、そこに見返りは生まれません。

物語の続きが気になる人には実際の活動を追いかけてもらえたらいいし、周りに伝えたくなくなったから伝えてもらったらいいいし。物語の続きを共にしたい人には実際の活動に関わってもらえたらいいし、強制はありません。

また、当書を手にとり共感いただけた人の中で、夢を持っている人、目標を持っている人は合流できたら良いですね。

当書をきっかけに、一人でも多くの方が原点に立ち還れる事を願っています。

当書を読み終えた時、共感共鳴頂けるようであれば、ぜひ我々のこれからの活動に関わっていただき、ここから続く物語を共にしていけると幸いです。

03.今後の計画(ロードマップ)

1.赤道直下エクアドルの農家との連携による米作り
→ ”米”を巡る物語として、「冒険」と題して現実世界で展開

- ☑持ち込むお米(種子)を選定する
- ☑提携する農家さんを選定する
- ☑お米作りを始める
- ☑できたお米を日本に運ぶ
- ☑パッケージにして周りに配る

以下、繰り返し。

2.三重県志摩市で開催される「潮かけ祭り」に対するクラウドファンディングの立ち上げ
→ ”血”を巡る物語として、「探検」と題して現実世界で展開

- ☑神宮に布石を打つ
- ☑エクアドルでお米作りを始める
- ☑神宮に経過を報告する
- ☑潮かけ祭りクラウドファンディングの実施
- ☑集まったお金を潮かけ祭り奉賛会に寄付する
- ☑神宮に経過を報告する
- ☑エクアドルでのお米ができる
- ☑神宮にお米を奉納しに行く

以下、神宮と連携できるまでも、連携できてからも経過報告をする、の繰り返し。

04.陰陽五行波動論とは？

1. はじめに

- 陰陽五行波動論の紹介
- Kによる取り組みとその理論の基礎
- ガイドブックの目的と重要性

2. 陰陽五行波動論の基本概念

- 理論の成立背景
- Kの学びと実践
- 内在する共通性への気づき
- 陰陽と五行の教え
- 理論の要素とその相互関係
- 実践における目的と手段

3. 陰陽五行波動論の具体的な要素

- 陰陽の概念
- 陰と陽の区別とその例
- 物質と半物質の関係性
- 五行の流れ
- 木、火、土、金、水の順序とその意味
- 人類の歴史と五行

4. 陰陽五行波動論の実践と応用

- 目的と手段の関係
- 「コタエ」の概念
- 大いなる目的の発動
- 脳の構造からのアプローチ
- 大脳辺縁系と経験の蓄積
- 理論に基づく生き方の重要性

5. まとめと展望

- 理論の現状と未来
- 実践による証明とその限界
- 理論の発展と個人の役割

1. はじめに

・陰陽五行波動論の紹介

当ガイドブックは、Kの実際の取り組みの延長線上で、自身が思い描いていた仕組みの機能をもってリリースしたもので、その活動の全ては「陰陽五行波動論」という理論に基づいて展開している。

・Kによる取り組みとその理論の基礎

必要性はないが、ガイドブックを何かしら活かせる形で読み解いて頂くためにもその理論をここで共有する。

・ガイドブックの目的と重要性

陰陽五行波動論とは、Kがかつての師匠から教えを受け、その実践を繰り返す中で落とし込まれて形成された、全ての言動と行動を司るもの。

2. 陰陽五行波動論の基本概念

・理論の成立背景

自身にとって全てを照らし合わせる根源となっており、ある時を境に、内在する共通した何かに基づいてその言動と行動が打ち出されている事に気づき、その基づくものを総称して、陰陽と五行の教えに基づくことからシンプルに、「陰陽五行波動論」と呼び始めた。

・Kの学びと実践

今なお実践者であり、発展途上である事を事前にご理解いただきたい。

・内在する共通性への気づき

陰陽五行波動論はそれをヒトツナギとして発動させるが、それは元より、陰・陽、そして、木・火・土・金・水、それぞれに対する理解をまた、それぞれ単体で扱うこともできる。

・陰陽と五行の教え

また、陰陽五行波動論を発動させるためにはそれ単体では機能しない様子で、それを機能させるためには基づく目的と、実践する手段が必要となる。

・理論の要素とその相互関係

目的と手段がマッチして発動する。

またここでは、目的と手段がマッチしたものを「コタエ」と呼ぶ。

(コタエを解き明かすヒント)

なんのために何をやるのか？

そのコタエ無くして人生の一步も進めない

目的＝(なんのために)があって、手段(何をやるのか)がある。

目的無くして手段が生きることはなく、手段無くして目的は果たされない。

- ・実践における目的と手段

実践する事はもちろんそうだが、それ以前に、なぜ実践するのか？の明確な目的無しには有効に機能しない様子だ。その目的が己の領域を超えたもの＝大いなる目的なのであれば、己の可能性を超えた経験を手に入れることができる、とも云える。

時代の変わり目、物事の節目、など、世の中が必要としている時に、その大いなる目的(自分の領域を超えた、やらなければならない理由)たる大義は発動する。大いなる目的が発動する時、それに相対する手段を用いることで、その実践の過程で世代を超えた着想と発想が得られるものとみられる。

3. 陰陽五行波動論の具体的な要素

- ・陰陽の概念

目に見えないものなので、例えを通して理解を促すものとする。

半物質≡陰／物質≡陽として捉える。

半物質はアシンメトリー(左右非対称、相対的な存在)の事であり、物質はシンメトリー(左右対象、相反的な存在≡共通して認識できる＝絶対的≡相反的な存在)のことである。

- ・陰と陽の区別とその例

「目に見えないけど眼に映るもの」を半物質≡陰とする。
それをもとにできた形あるものを物質≡陽とする。

- ・物質と半物質の関係性

半物質の状態におけるものはぶつからないが、物質はぶつかる
物質を捉えて意見が分かれ、時に議論になったりもする

物事にはアクションがあつてリアクションがある
このアクションもまた、何かしらのアクションを受けたリアクションである
起源を辿ると、内在するものがあつて、それに対するリアクションしてアクションが起こる

わかりやすい半物質の例として、興味関心、やる気などが挙げられる。
これらは目に見えないけど、外側からその言動、行動を見て眼に映る。

町の発展で例えると、人々に必要とされて、必要なものが形になる。

例えば、町に水を貯水する溜池がない、それを求める人の心の声が生まれる、その結果、森羅万象の力が働き、町に溜池ができる。これは原理原則に基づいた流れ。これに対して、声は生まれてないけど、お金儲けを目的とした人が、町の人をその気にさせて溜池を作ったとする。これは原理原則に基づいていない流れとなる。

原理原則に基づいていないものはやがて消えてなくなる。
興味関心、やる気のない取り組みはやがて消えてなくなる。

このように陰陽を捉えることで、陰陽が相対的に成立して目に見える形になったものと、そうでないものと一線を画して別として捉える事ができるようになる。

ちなみにエジプトのピラミッドは左右対称＝シンメトリー＝陽に見えるが、実際のところそれはずれており(あるピラミッドでは3cmズレている)、人も同じである。云わんとする提示になってしまうが、人は「目に見えるけど眼に映るもの」である。問題が起こった時はリバランスが必要となる。

捉われてしまう状況でも、本質を捉える事ができるのが動物の中でもとりわけ人である。人はその性質から、世の中で問題が起こった時、その問題を解決する方向に導くことのできる存在とも云える。

絶対的な問題に対して必要な形に適正化することが必要で、このように合わせることのできる存在からも、その存在は、世の中の生き物に対しては、半物質的≡陰の位置付け、とも云える。

ちなみに神社を参拝する時は、手をずらして合わせるが、これは左右非対称である我々が、その手の合わせ方によってバランスをとって左右対称である事をそこで表明している。人が左右対称である事は、意識して左右を繋げないとそうはならない。つまり、この手の合わせ方は、ここに、一つの意識が存在している事を示すものであると云える。これはもしかしたら、左右対象≡物質≡絶対的な存在となってそこにある願いを通じさせるための作法なのかもしれない。(信じるか信じないかはあなた次第です)

陰陽を理解する上で、もう一つの物差し、宇宙の法則に基づいた物差しから解く
※この物差しもセットで受け取っている

(物差し)

一うむ二

二うむに三

三せい万物

(解釈)

一＝目に見えないけど眼に映るもの(半物質。興味、関心、やる気、など)

一うむ二＝目に見えるもの(物質)

直線的に読み解くと、目に見えないけど眼に映るものがあって、形になった物質だから、万物となる。この数え方には三番目までしかない。三番目で完結しているし、二番目の成立で事実上完結している。つまり、目に見える形になった段階で万物に繋がっている。

別で置き換えてみると、

映画をみて感動した(一うむ二)

感動を人に話した(二うむに三)

感動が口コミした(万物。末広がり)

このような感じになる。

・五行の流れ

目に見えるものの中で、陰陽の原理原則に基づいて形になったものとそうでないものを見極め、物事の判断材料に用いることが多い。その上で五行の流れがある。

- ・木、火、土、金、水の順序とその意味

木→火→土→金→水。

五行を理解するために、人類のあゆみを当てはめて解釈すると下記となる。

- ・人類の歴史と五行

(木の時代)

木の時代は億年続き、人類は火を発明した

(火の時代)

火の時代は万年続き、人類は土地に価値を見出した

(土の時代)

土の時代は千年続き、近年の金融時代に突入していく

(金の時代)

金の時代は百年続き、

(水の時代)

洗って流される

水の時代は一瞬で過ぎ去るといわれている

これは物事の展開や過程など、生まれてから無くなるまでの一連の過程を5つに分類したもの。

4. 陰陽五行波動論の実践と応用

- ・目的と手段の関係

陰陽五行波動論に当てはめて物事を実践することで、原理原則に基づく≡本能を刺激することから、大脳辺縁系を介してそこに経験が蓄積するのではないかと考えている。これによって、他にもその経験が活かせるように成るのではないかと。

- ・「コタエ」の概念

人の脳は大きく分けて3つにわけられ、脳幹部、大脳辺縁系、大脳新皮質の3つに分けられる。脳幹部は基本機能(呼吸、心拍、覚醒など)を司り、その外側に情動や本能を司る大脳辺縁系があり、その外側に理性を司る大脳新皮質がある。

- ・大いなる目的の発動

大脳新皮質は人間の進化の過程でできたもので、ここが機能することでそれよりも奥まで震動が届かなくなる≡機能しなくなる。原理原則は世の中にある本能的な存在だとも云える。

- ・脳の構造からのアプローチ

本質を突いていなければ、経験が本質的に蓄積するとは考えにくい。

また、なんの理論も持たずに世の中を生きると感情に流され、本能的な成長を遂げる事は難しい。

- ・大脳辺縁系と経験の蓄積

原理原則に基づき、摂理に則って生きること、大脳辺縁系に対してアクセスした状態で物事の経験を蓄積することに繋がると考えている。

- ・理論に基づく生き方の重要性

ボクが陰陽五行波動論を実践する中で、ここではそれぞれの関係よりも、木→火→土→金→水として一直線に繋げた流れの上で、それぞれを当てはめて使うことが多い。

原理原則に基づいて、五行に当たるものが揃い、それが一連として順序立てて流れる事によって物事が成立していく。

5. まとめと展望

- ・理論の現状と未来

陰陽成るものに基づいて展開された五行の行く末、水の時代の到来によって洗って流され、原点に立ち還る。陰陽成らぬものに基づいて展開された五行の行く末は、水の時代の到来によって洗って流されて消えて無くなる。これは世の中の摂理である。これらを実践に落とし込んだものが「陰陽五行波動論」である。

- ・実践による証明とその限界

陰陽五行波動論は口伝であり、相伝である、というようなニュアンスで聞いたが、実際に実践した者として、その実践による証明と対にして理解に及ぶものであり、理論だけではどうにもならないと感じているのがそういうことか？

- ・理論の発展と個人の役割

※ボク自身、未完成のまま師と別れた後、残りを独自に発展させて今に至るので、本流とは程遠い。

05.”米”を巡る物語に至った経緯 前編

(幼少期～前世の記憶を取り戻すまで)

幼少期に至るまで物語が繋がっているため、前編としてその幼少期から前世の記憶を取り戻すまでも掲載するが、自己紹介に近い内容なので、不要であれば中編から読んで欲しい。

(幼少期から小学生時代)

ボクは三重県の志摩という海の町に生まれ、大自然の中で育った。

幼稚園児の時は、他と違う大人らしさに恋をして、担任の先生にプロポーズするようなマセガキだった。

昔からきっかけを作るのが使命だったかのように、休みの日には友達に連絡を回して人を集める役割を買っていたように思う。

性格的なものもあって、たくさんの友達に恵まれた。

小学2年生の時に剣道を習い始めた。

所属した武道館は、免許皆伝といわれる階位の、現存する唯一の先生のいる所で、たまたまそこに入った。

その先生はボクが大人になってから亡くなって、剣道の世界では免許皆伝位がいなくなり9段が最高段位となった。
(2000年に9段、10段の審査が廃止されたため、現在の最高位は8段)

生きた伝説が志摩にいた事、その背景に目を向けると感慨深いものがある。

剣道に通い始めてからは毎月、県内の至るところの大会に出ていた。遠いところになると、明るくならないうちから準備して会場に向かう。

家族はボクのやりたい事とことんサポートしてくれた。

そのお陰で小学5年生から二年連続で団体戦で全国大会に出場することができた。

当時恥ずかしくて言えなかったが、剣道を始めた理由は好きな子が通っていたから。

恋心がボクを全国大会まで導いてくれた。
自分の歴史の中で物語が動く時そこには愛の力が働いているように思う。
良い所を見せたいのではなくてやる気がみなぎってくる。

愛は地球を救う。

（中学生時代）

順風満帆に見える小学生時代だが、
中学生になってイジメを受けた事を原因に不登校気味になった。

その時に心を救ってくれたのが音楽だった。

中学時代は暗黒時代だった。
思い出しても歴史が無いに等しい。

高校生になって人生やり直せることに期待していた。

またこの時は臆げながらも
大工である父の仕事の跡を継ぐ事を考えていたが、
工業高校がヤンキー校と聞いて億劫になっていた。

最後まで本音を言えずに工業高校への希望を出し続けたが、
最後本音を打ち明けて進路変更して商業高校に入った。

担任の先生に、最終の進路決定の時にそれを打ち明けた。
工業高校の仲良い先生に根回ししてくれていた事をそこで知った。

担任の先生と親父の期待を裏切る形になってしまって反省している。

当時恥ずかしくて言えなかったが、
進路変更先の商業高校に行く事を決めた理由は好きな子が希望していたから。

そこで学んだ簿記と専門的なプログラミングの知識は今のボクを支えている。
恋心がボクの進路を導いてくれた。

愛は地球を救う。

（高校時代）

その後、商業高校へ入学する事になるが、
暗黒の中学時代を過ごしてきたボクは心に穴が空いたようになっていた。

同じ道場に通っていた先輩からの誘いを受けて剣道部に入部したが、
学年が上がって自分がキャプテンになる可能性が出てきた時に部活を辞めた。

自分にとってトップは荷が重かったんだろう。
また、切磋琢磨できる仲間がいて伸びるタイプだと思う。

高校2年生も終わりに近づくと、
進学か就職かの話が持ち出されるようになった。

同級生との就職争いが嫌で就職しない宣言をした。
進学する考えのなかったボクは正直この時から路頭に迷っていた。

ボクは卒業後に音楽活動を始めるが、それに至った起源は、学生時代の就職争いにある。
通っていた学校は商業高校だったので卒業生の半数以上が就職する事になる。

ボクは学生の頃、成績は良かった。

高校3年生の時、就職先を選ぼうとしたら休み時間に行列ができていた。
各就職先が採用する人数は決まっている。大体の場合、成績上位の人が選ばれる。

誰が希望したかは事前にわからないので、
運悪く成績上位者とバッティングした場合落ちる事になる。
高校時代、どれだけ頑張っているか。

休み時間に友達が訪れる度につらくなった。
特に、共に頑張ってきたクラスメイトを蹴落とす自分になるのは許せなかった。

まずはじめに、クラスの友達から希望の就職先を聞いて、そこを譲る事から始めた。
ただ、連鎖的にキリがない事に気がついて、就職しない事を公言した。

この仕組みのあり方のお陰で、
運次第でこれまでの努力が蹴り飛ばされ、
これからが決まるのはおかしい。

この頃から、世の中の仕組みに目が向くようになっていた。

そんな中で、かつてイジメから自分の心を救ってくれた音楽に恩返しをしたくて、音楽活動を始める事にした。仕事としては両親から説得を受けたこともあって、地方公務員を目指す事にした。これなら友達とバッティングする事もない。

就職競争を降りたことで心配をかけていた両親を安心させたかったのが本音だった。

こうして先生に最終進路の決定の時に、公務員を目指す事を伝えた。

その時、普通高校の事を勉強してないのに
公務員試験を受けるのは無茶だと先生に止められた。

むしろ先生から反対されたことでボクの気持ちは固まった。
中学時代に尻込みしてしまった自分への挑戦でもあった。

こうして公務員試験を受けることにした。
その結果、苦しくも地方公務員試験に合格することができた。

挑戦せずに公務員にならないのと、
挑戦して公務員になれない未来は違う。
先生には目標への挑戦を否定するのではなくて応援して欲しかった。

ならなかった人生となれなかった人生は違う。

夢や目標に対して挑戦する子どもたちを支援する先生でいて欲しいと伝えた。

この意識改革に伴うメッセージを先生に伝えるための挑戦だったようにも思う。
あの時は偉そうにして少し反省してる。

(バンド時代の思い出)

高校卒業後、地方公務員として、三重県は志摩市にある役所に勤めながら、仲間を集めてバンドを結成した。

そんな中で広島美容師の専門学校に通う友達から死にたいって相談を受けた。
心配だったが、友達との人間関係に悩んでいた彼女が、その相談をしてくれたのが嬉しかった。
彼女とは高校生の時に掲示板で知り合い、友達に言えない相談を言い合ってきた仲だった。

その時、ボクの想いを綴った手紙を送った。
そしたら、もう一度頑張ってみる、って言ってくれた。

それからその子は専門学校を卒業してから、無事美容師になった。

しばらく連絡をとっていなかったが、それから時を経たある時、結婚したという手紙が実家に届いた。当時、掲示板で知り合い、一度も会ったことはないし、その時以降連絡はとってない。

彼女に送った手紙は後に楽曲となって、ボクたちバンドメンバーとファンをヒトツナギにしてくれた。リナ、今も元気してるかな。

(人生初めての挫折を経験)

ボクは高校を卒業する頃にドラムスクールに入った。
先生の手腕あって後発のボクはぐんぐんとその腕を上げていった。

そんなある時、先生がふと遠くを見ながら、
「もっと早く出会っていたかったな」と言葉を呟いた。

認めてくれた事は本当に嬉しかった。
それと同時に、人生初めての挫折を経験した。

「俺、手遅れだったんだ。」
すぐわかった。

それからというもの、現実逃避するように、
許される時間はがむしゃらにドラムを叩き続けた。

その結果、両手が腱鞘炎でブラブラになり、
まともにドラムを叩くことができなくなった。

(アルバムのリリース、そして)

先にドラマーとしての挫折までを描いたが、高校を卒業してからのバンド活動は順風満帆で、当時全国ツアーを決定していた人気のインディーズバンドのリーダーに気に入られたり、大好きだったバンドとの対バンが決まったりしていった。

そんな中で制作した楽曲もある程度の数になり、自主制作でアルバムを作ろう、という話になった。中学時代から仲の良かった先輩の協力もあって、自分たちで一つのものを形にすることができた。

19歳の時の事だった。

また、この過程で、自分たちが作った形ない音楽が、形を持ってファンの元に届く事に感動を覚えた。当時、中学生時代のボクが音楽で心救われた背景には、こうして、楽曲を形にしてくれる裏方がいることを実感した。

この仕事にとっても価値を感じて、バンドをプロデュースし、楽曲を形にする制作会社を立ち上げたいと思うようになっていた。

アルバムを自分たちで制作する最中、周りの人にその想いを伝えて、詳しい人を紹介して欲しいと言って回った。そしたら、高校生の時の先輩のご縁で大阪の社長さんを紹介してもらえることになった。

初めて自分の意思で向かった大阪は大都市で、
田舎者のボクはただただ上を見上げてばかりだった。

そこで教えられたマンションの最上階に向かう。
マンションの入り口には4桁の暗証番号があって金庫の中に入るような感覚だった。

ボクの住む町は大体みんな知ってる人なので犯罪も起こりにくい。
実家では家の鍵は開けっぱなしだったので新鮮だった。

最上階に行った時にまず飛び込んできた景色に感動した。
聞いたところによるとこのフロアを所有しているとの事。

インターホンを鳴らすと、
その人が「おいっす！」と言って迎えてくれた。

社長、という生き物に初めて会った瞬間だった。

当時、19歳のボクにとって衝撃の出会いだった。

とにかくキラキラしていた。
初めて聞く話ばかりで胸がときめいた。

住む世界が違う。
この人の眼に映る世界をこの眼で観てみたい。

そう思ったボクは、
「どうやったらあなたのようになれますか？」
と質問した。

そしたらその人は、報酬と代償の原理を教えてくれた。
報酬と代償は比例するとのこと。

「あなたにその代償を捧げる覚悟はありますか？」
と問われた。

ボクは
「音楽を辞めます」
と伝えた。

ボクはドラムで挫折を味わっていた事もあって、
大好きだった音楽が嫌いになりそうになっていた所だった。

音楽を愛し続けるために音楽を辞める。
ボクにとっては当然とも云える選択だったのかもしれない。

ただし、切腹する気持ちでそう答えたのは今も覚えている。

そしたら、その人は時計をみて、
ものの数秒で自殺する人、初めてみた、と言ってくれた。
君なら胸に秘めたその想いを形にできるかもね、と言ってくれた。

ボクにとって音楽が命の代償であった事を
汲み取ってくれているのが素直に嬉しかった。

これは生涯、読んで字の如く、
「音」を「楽」しめる人生を歩んで生きたかった。
純粋に音楽を愛し続けていきたいかった。

その日を境にやると決めた。

だけど音楽の時のトラウマがある。
ここにおいても手遅れで後発組なのはわかる。

そこで**ボクはここから10年間は「JUST DO IT」の精神で、**

とにかくやりこんだ先にみえる景色を観に行こうと決めた。

この時、何から始めたらいいかを尋ねたところ、
その人が持っている会社の飲食店のフリーペーパーの営業権利を与えてくれた。

コミュニケーションスキルは唯一無二のスキル、と教えてくれた。

この頃から公務員をしながらビジネスの世界に足を突っ込むことになる。

当時は経験する事を目的に、
仕事が休みの日に飲食店に営業しに行ったりしていた。

そしたら見つかって上司に呼び出されたこともある。
お金もらって無かったら良いと思っていた若気のいたりだ。

ここではビジネスの経験はまだほどほどに、
アルバムリリースに向けて動いている最中だった。

(公務員時代、バンド解散、そしてー)
20歳を目前にCDをリリースしたのだが、
最初で最後の1stアルバム、という事で、そのリリースを機にバンドは解散した。
メンバーそれぞれに次の人生が見え始めていた為だ。

それまでの人生で語れる事を10曲にまとめた。
これをもって出せるものが何もなくなった。

ビジネスの師との約束もあって、

バンドを解散してからは、音楽を辞める、
ドラムを辞める、生活から音を無くす。

とにかく音楽を遠ざけた。

それ以降、ポツカリ心に穴が空いたような状態になった。

非日常の中に生きてきたボクにとって、
公務員の仕事もまた退屈でつまらなかったし、
仕事に向かうのが毎日苦痛になっていた。

というのも、そもそもボクは課長に無視される形で仕事をしていた。
バンド活動をメインにしている耳と口にピアスの穴が空いていればそれも当然か。

仕事に必要な印鑑をもらいにいっても空気同然の扱いで完全に無視。

愛知万博があった時には、ここぞというばかりに皆現地に向かったが、ボクは居残りで、課の電話対応役に選ばれた。

他の課の人たちからの同情は嬉しかったが、情けなくてつらかった。

課長は、そもそもボクの事を気に入らなかったと思うが、定時に帰ったり、意見を言うボクがそれを加速させていたのだろう。

ある時、きくち正太さんという、ドラマにもなった「おせん」という漫画の作家さんと行きつけの飲み屋さんで知り合った。志摩にロケにきているところだった。



ボクは受け入れて欲しいのもあって「おせん」の誘致を頑張った。志摩の魅力を伝えたい気持ちもあって、地元の海の写真を撮って回り、彼に提供した。その甲斐あってか、第91話に「御食(みけ)つ国・志摩」に取り上げてもらえた。

当時観光課に所属していたボクは、予算をかけずに地元を宣伝できたと意気揚々として仕事に向かった。

これきっかけで、今のわだかまりがなくなればいいな、と思っていた。

朝礼の報告の時、手を挙げて本を取り出し、発表した。それに対して、「他に何かある人は？」と、そのまま流された。これを受けて公務員の仕事を辞める事を決意した。

ここには自分はダメになると思った。

地方公務員の仕事は地域に密着するため、普通に暮らしていたら目が向かないような志摩の歴史に触れることもできた。

そういったこともあって公務員時代にも感謝してるし、この仕事を通じて故郷への貢献心が芽生えた。

内側ではなく、外側から、やれる事をやろうと、そう思った。

「宣伝広告事業を立ち上げて外側から地元をPRできる自分になって帰ってきます」

狙った訳では無いが、今やろうとしている
地元のお祭り「潮かけ祭り」に対するクラウドファンディングは、
巡り巡ってそれに当たる取り組みだ。

志摩町にある八雲神社のつづらの中に市杵島姫命(イチキシマヒメ)の魂が眠っていたり、
日本の海女さんの半数が志摩にいたり、志摩の持つその知られざる歴史に
自分自身、魅力を感じていたのは確かだった。

こうして、高校卒業してから3年間奉職した仕事を後にした。
20歳の時だった。最年少で入って、最年少で辞める形になった。

実際のところ、公務員を辞めてからは
ずっと生きる意味を探してきたように思う。

(自殺未遂、そして。)

「俺ってなんの為に生まれてきたんだろう？」
この思考はこの時に生まれたものなのかもしれない。

ドラムも挫折して、音楽も辞めて、
経験値を得るためとはいえガムシャラにビジネスを勉強する中で、
このまま年をとって、おじいちゃんになって死んでいくようなビジョンが頭に浮かんた。

当たり前の話なのだが当時のボクにはこれが、
何か映画や漫画の物語のオチを先に見てしまったような感覚になって、
「消えたい」という気持ちが芽生えるようになっていた。

その延長線上で、死後の世界に興味をもつようになっていた。
その想いは日増しに強くなり、いよいよ決心の時を迎える。

怖かったので前夜祭を開催した。
そういいながら、前夜祭で目的を果たすことができた、ということ。

結果、痛くて死ねなかった。
両親に対する罪の意識で涙が止まらなくなった。

これまでの心境に、
「親不孝もの」「弱い人間」という決定的なレッテルが加わり、
生きるしかない、という状況になった。

こうして生きる屍となったボクの元をただただ日々が過ぎ去っていった。
そんなある日、久しぶりの友人の誘いをきっかけに、人生を取り戻す事になる。

(親友の夢に活路を見出す)

そんな日々を過ごす中で誘いを受けて、中学時代の親友と飲み屋さんに飲みに行った。

集まった友達との飲みの場では、お酒が入ったこともあって久しぶりに良い気分になっていた。

親友は酔っ払いながら昔話を始めた。

「昔、日本武道館でライブしたいって、話してたよな」

「昔、こういう飲み屋さんしたいって、話してたよな」

「昔、、、」

夢の全てが過去形になっているのに気づいた。

そしてそれと同時に雷が落ちたような感覚になった。

友達の夢を叶える一助を担えたらどんなに素晴らしいだろう。

その夢が叶ったとき、

酔っ払いながらも涙ながらにありがとうの言葉が聞けたら、

どんなに幸せなことなのだろう？

その延長線上で、それまでの過程を曲にできたらいいな、と思った。

同時に、自分じゃない人の夢は面白いと思った。

自分の夢は己の中では理解していると思い込んでしまう。

それ故に、飽き性のボクは自分の中で完結して実践に至らないことがほとんど。

それに対して人の夢は自分の受け取り方でもその姿をかえてくるし、

本人が成長することでまた違った形で示されたりする。

「人が胸に秘めた想い」に眼が向いた瞬間だった。

その時を境に目標ができた。

夢実現、目標達成のサポートができる自分になりたいと思うようになった。

これによって、今経験値を積んでいる先に繋がるものもみえた気がした。

当時、バンドのプロデュース会社を作りたい、と思った精神に通ずるものがある。

ここから自分の活動に力が入るようになっていった。

己を高めていく過程で、高い志をもった切磋琢磨できる仲間を作る、と言う目標も生まれた。そして

最たるものとして両親に対する親孝行の内容も具体的にみえた。

不思議なもので、今回、自分の目的みたいなものがみえたら、辺りが一気に照らされたような感覚になった。

(第0章～始まりに向けて～)

それからというもの、物販の立ち上げから始まって、そこで得たサイトデザイン制作の技術を転用した請負事業、経験を元にした同業他社への助言とアフィリエイトの展開、国の補助金を活かした社員教育事業の立ち上げとその幅を広げていった。

地元で、安くて長居できるバーを立ち上げて若者の居場所を作り、過疎化を防ぐきっかけになる取り組みもしたし、年1回開催する地元の大型の音楽祭のお手伝いをして、町を出た若者たちを呼び寄せ、改めて地元の魅力に目を向けてもらう取り組みにも参加したりもした。

実績はともかく、とにかく経験を積みたかった。

この過程で世の中の在り方にも触れていく事になる。

世の中には作られた現実と基づく真実がある事にも気づいていく事になる。

公務員の時に感じた違和感も相極まって、自身の経験を活かして、世の中を変えるきっかけを与えたい、とまで思うようになった。

これらが理由となって経験を繰り返す延長線上で、世界でトップクラスの日本人にプレゼンテーションを果たすことが大きな目標になっていった。

最後、あなたにとっての一番の人を紹介してください、という形で、リーチしていった結果、その目標を達成する事ができた。

その時は取り巻きの方々がいる所で自分が構築した事業をプレゼンテーションしたが、改めて個人的に時間をとってくれた。時間をとってくれた、というより、取り巻きにとめられる中、「また会ってくれませんか？」と問いかけたら、「おいで」と言ってくれた。

それを間に受けて、その人のいる地球の裏側まで行ってから共通の友人に連絡を入れてもらった。そこで**「リレーションシップ能力は唯一無二のスキル」**の元に、40分ほどレクチャーを受けた。ここで受けた教養は今も尚実践しているし、これからも実践していく。

「報酬と代償」の約束をしてから9年目の事だった。

こんなボクを、その次へ、その次へ、と繋いでくれていった方々には心から感謝してる。

(第0章を展開する最中に陥った心の闇)

ここまで格好つけて書いてきたが、実際の所はそんなに良いものじゃない。

物事の理解を深める毎に、こんな事してる場合じゃないような、何か世の中の為になる事をしないと地獄に落ちるような、何かを成さなきゃいけないような衝動に駆られていたのが事実。楽しい事をやろうとしても、こんなことしていいのか？という自問自答から抜け出せなくなり、生きることが苦しくなっていた。

あれこれやってるけど結局、その全ては独りよがり、ニュートラルな所を行ったり来たりしている気がして、結局何の役にも立ってないどころか、自分の存在に嫌気がさしてきて、その心苦しさは加速していた。

そんな中で今に至る物語の始まりは突然訪れた。

2012年12月の出来事だった。
公務員を辞めてからおおよそ10年後の出来事だった。

そもそもここに至った明確な始まりは、
前世の記憶を取り戻したところだったように思う。

NLPという神経言語プログラミングを試したところ、実際にそれが起こった。

過去に立ち返って突き当たるトラウマを探していく仮定でそのまま今世を通り越す人もいるらしい。興味ある人は試してみて欲しい。

それまでもそれからも、ここでは語り尽くせない数の出会いと出来事を経験してきた。

その翌年の2013年、次の人生へと駒を進める為に、
これまでの節目として全国で自身の経験を詰め込んだ無料セミナーを開催していく。

「世界トップクラスの日本人」との出会いも、このセミナーの延長線上で果たされたものだった。

ここでの出会いがそれ以降の人生を決定付ける出会いとなる。
ここからは、そんな中で、今の活動に至った直接的な出会いと出来事を共有していく。

06.”米”を巡る物語に至った経緯 中編

（前世の記憶を取り戻した以降～母の死まで）

前世の記憶によると、神々による審判が行われる時代にボクは生まれ落ちてきている事になる。地球人の存続をかけて、神々による審判が行われようとしている。

俗にいう、「ラグナロク」というやつだ。
神々が我々を見放せば、極端な話、ポールシフトが起こる。
人類は今、原点に立ち返る必要があるというのだ。

何をやらなければいけないのか？を突き詰めて進むのではなく、
武器を置いて、議論しなければいけない時がやってきている。

我々地球人は、原点に立ち返らなければいけない時がやってきている。
ボクができることは、その原点に立ち返るきっかけを世の中に示すことだと受け取った。

今この文献を作成しながら思ったが、
前世の記憶が戻ったというよりも、

降臨したものに一連の映像をみせられた、
といえばそちらの方が近いのかもしれない。

ぶっちゃけた話、この時に受けた意識改革に伴うメッセージに突き動かされる時がしばしばあるので、それは自分もよくわかっていない。具体的な行動が描かされ、その行動を取らなければいけない衝動にかられて動かされている感じ。

だけど前後して、不思議と自分の人生に必要な理解として落とし込まれてくる。

記憶が戻った当初は一つとして感じてその存在をもって理解しているに近い状態だったが、この後の出会いと出来事を通してそれが理解に落とし込まれていく事になる。

(師との出会い)

前世の記憶を取り戻した1年後の2013年12月8日、後輩の紹介で「陰陽五行波動論」の教えを受けた師と出会い、今に繋がる着想と発想を得ていく事になる。

※「世界トップクラスの日本人」に会いに行ってから2ヶ月後の出来事。

師からは多くのことを学んだ。

彼は日本人として生まれた事に誇りをもっており、彼がブレたところをこれまでに一度もみたことがない。今のボクに基礎があるのであれば、それは彼の教えだ。

彼からはこの世の中の仕組みと構造を学び、そして、自身最大の気づきである『世界樹の成り立ち』を紐解く鍵を彼から受け取る事になる。

消費社会によってもたらされる地球環境破壊問題、繰り返される侵略と略奪の歴史、虐げられる日本の実情。こういった現実問題と真実について、時間をかけて、実践を交えながら、語り合いながら約6年間その行動を共にした。

そして、自分の中で五行が繋がっていく決定打となる事実として、金は埋まっているものではなく、地中で生成されて、マグマが噴き上がるように、地中から宇宙へと向かって噴き上がる、この時に地表を突き抜いて金山ができる事を教えてもらった。

金が地中から噴き上がる過程で温度が下がり、途中で割れながら地表を目指す過程でそこできるのがゴールドラッシュとの事。

金が地球から宇宙に突き抜ける！？

これが本当なら地球は金を生み出す星という事になる。

この事から、「金は世の中に2100万トン埋蔵されている」という常識は吹き飛び、「金は地中深くで生成されている」という常識に切り替わった。冷静に考えてみたら、地球の大半を理解できてない地球人が、埋蔵されている量を断言している時点でおかしな話である。

この知識が最終結論を打ち出す決定的な手がかりとなっていく。

「目に見えないけど眼に映るもの」以前に、目に見えるものに嘘が混ざっている以上、真実に眼を向けざるを得なくなる。

この時から、常識と非常識がまともに逆転し始める。

師は、『今の延長線上にコタエはない』、と言った。

この世の中の仕組みと構造に改革を起こそうとする彼の意思に賛同し、主には、それに付随する仕組みが公開されるまでの旅路を共にする事になる。その仕組みの公開直前に母を亡くす事になるが、この期間で、大衆に向けて、強いては、日本人に向けて仕向けられた数々の仕掛けを知

る事になり、それが後の、「地球上で最も綺麗な水が降り注ぐ場所での農作物作り」に繋がって
いく事になる。

(志半ば、恩師、母を亡くす)

2018年6月4日に母を亡くした。母は幼稚園の保母さんだった。

60歳最後の年、2017年の〇月にガンが発覚して入院、その延長線上で母は亡くなった。
園長先生になって最後、錦を飾ろうとしている最中での出来事だった。

母は、**愛と平和に溢れた世の中、笑顔溢れるその周り、仲睦まじさがいつまでも続く家族**、のこれらを絵に書いて体現し続けたような人だった。

最後その日を迎えるまで近くにいてあげることはできなかった。
弱っていく中でボクに遺言を残した。

「あなたは一人では生きていけない」

これに続く言葉はなかった。

この言葉を当時、伴侶を見つけなさい、と捉えていたが、
これは母親の奥深く魂から出てきた言葉だったんだろう。

母親が無くなってしばらくしてから、
母親が母であると同時に、**かけがえのないバディであった事に気づいた**。

それ以降、孤独と刹那の中に生きるようになった。
大好きだった母親を無くしてから生きた心地がしない。

母親の遺言はバディを見つけなさい、
という意識改革に伴うメッセージだったのかもしれない。

本当の意味での物語はまたそこから始まるのだろう。

母親が亡くなった後、ボクは一人で霊安室に母に会いに行った。
そこで母は微かに息を吹き返して、口を動かしてボクに何かを伝えようとした。

最後に何を伝えたかったのか？

この世の中で母親と対話できる場所を探す旅もまたここから同時に始まった。

自分の人生の向かう方向が、
導かれるように不思議と一つの方向に一致していく事になる。

(事実を知って目覚めよ)

母の死を境にするように、

それまでは世の中の構造と仕組みを学んだ事に対して、
それ以降はそれに対する手段を探し求める展開となっていく。

意図して切り替えた訳では無いが、
今振り返ってまとめているとそのような構成になっていた。

この時のボクは、師とともに、政治を川上とした現代の社会構造から、経済を川上とした社会構造へと改革を起こすべく、仲間たちとその仕組みの公開に向けて準備を進めている最中だった。

現在の政治を川上とした社会構造を示し、消費社会がもたらした地球環境破壊を例に上げて、現在起こっている社会問題の原因に目を向けてもらう形で意識改革を起こし、そこに自分たちが突き詰めた経済を川上とした社ゆ会構造を提案したものだ。

ここに至るまでの学びによって自分にとって最たる基盤が構築された。

地球は一部の人間によって支配されている。
その中で、日本人を絶滅させる計画が動いている事を知った。

これが真実かどうかはわからない。
だが、日本で、空気、水、食べ物の三点が毒される流れになっているのは間違い無い。

その中でも、特に我々日本人は、狙われているかのようにその命を脅かされている。

人は必要として、

- ・空気をもらう
- ・水をもらう
- ・食べ物をもらう

この3つはもらわずには生きられない。

この3つが日本では危険に脅かされている。

しかもその全てが意図的なものだ。

まずは空気の問題。

日本では1940年頃(正確には不明)から、
先進国各国の政府と軍と製薬企業の共同プロジェクトとして、
飛行機を使って空中にケムトレイルが散布されていると言われている。

これを事実として話を進めると、
文献によるとケムトレイルには様々な細菌やウイルスが含まれる。

軍は空からバリウム、アルミニウム、インフルエンザウイルス等を散布、
バリウムはうつ病、アルミニウムはアルツハイマー病の原因となる。

このどちらも目に見えないもの、
士気を司る起源たる部分に影響している。

人々が行動を起こす源が攻撃されている事に直結している。

これと直接的に関連性があるかわからないが、
英国では2002年に、国防相が1940年～1970年の40年間にわたり
国民を標的にした細菌散布実験を行ってきたことを認める声明を出している。

これが本当であれば、
日本は半ば強制的に細菌やウイルスを吸引し続ける事になる。

ケムトレイル問題は当時陰謀論として取り扱われていた。

しかし、次の水の問題が表面化する事によって、
現実味が生まれ、陰謀論で済まされなくなり始める。

次に水の問題。

日本では、2018年12月に水道法が改正され、民間事業者でも参入できるようになった。

民間事業者は利潤を追求するため、コストダウンのために、水の浄化に消毒剤を使う。水道水の消毒液には臭素酸カリウムが含まれる。これは発がん性物質として世界で、その使用と食品への混入が厳しく規制されている。これによって、民間事業者が採択された地域の水道からは、水道からは水の姿をした薬剤が流れ出る事になった。これには多くの人が気づいており、有識者たちを中心に民間事業者参入の反対の声が各地で相次いでいる。

これによって、水道水を使ったお茶や料理を通して口から薬剤を取り入れる事になり、お風呂を通してお肌の角層から薬剤を取り入れるようになる(経皮吸収)。しかも温度が高いほど、経皮吸収されやすい。

最後に食べ物の問題。

日本の食料品には多くの化学物質が使われている。
とあるメーカーのパンには先に述べた発がん物質である臭素酸カリウムが含まれている。

メーカーによると食味の追求のため安全の範囲としている。

これはパン発酵の過程で目に見えての数値は落ちるという事だが、
そもそも生地を練り込む段階での投薬に眼を向けると恐ろしい事が行われている。

実際に成分は転換してその形を変えている。

陰陽五行波動論を軸に、陰陽の教えに基づいて読み解いてほしい。

陽が転換して、別の陽を支える陰となって潜在している状態になる。

民間水道事業者が企業利潤を追求するために浄化剤を使うのと同じで、民間事業者に関してこの選択はどこでも日常茶飯事的に行われている。

企業は、安全面を表出しするが、実際の所、その多くの企業が追求しているのは「利益幅」である。

この事からわかるように、表面的に良しとされれば企業は善悪ではなく、その企業利潤の追求のために劇薬を使ったりするのは宿命である。

これをわかった上で製薬会社は薬剤を開発する。
使用可能な成分の前提に関しては政府が打ち出している。
製薬会社は莫大な儲けを手にして政治家に賄賂を渡す構図が出来上がる。

政府が川上となって経済と連携するこの構図は、真実はともかく、人の欲望の暴走としてなるべくしてなるのは想像に容易い。

これは以前から挙げられている問題だったが、
今、**日本の農作物そもそもが脅かされる危機に面している。**

これまでも一部品種に対する自家増殖制限の動きはあったが、2021年4月から順次施行されている改正種苗法では、
「自家増殖(自家採取を含む)の原則禁止」の方向性が示された。

現段階ではまだ、その領域には至っていないが、これは事実上、種子か苗を購入しなくてはならない状況に向かっている。

見た目が良くなったりコストが下がれば人は喜ぶがそれは表面的なものであり、本質的には遺伝子組み換えによってそれを実現していく。

遺伝子構造が組み替えられた農作物は同じ形をした別物である。

また、遺伝子を組み換えること自体も問題視されているが、その結果人体に及ぼす影響は計り知れない状態が続いている。

ちなみに現在の種苗法は日本が独自に決めたことではなく、1991年に改正された植物の新品種の保護に関する国際条約を踏まえて、旧種苗法が全部改正されたものである。

つまり、日本の独自の判断によるものではなく、日本国外の意図が計られたものになっている事は明らかである。

水の問題も、空気の問題も、食べ物の問題も、
もしかしたらその代では目に見えて問題化しないかもしれないが、
代を超えてその子孫、末裔に直接的に影響を与える可能性が高い。

将棋で例えると、各駒が一コマ動く動きを一代として、
その次の代、その次の代を見据えて戦略を打つのが大衆を率いる者達の思考である。

これまでの歴史を見ても、
ここに至るまでに数々のその伏線が敷き詰められてきている様子が伺える。

コロナに代表する世界的なパンデミックの流行は、
その集大成というかこれまでの伏線を回収し始める合図だったようにも感じる。

総合的に分析して見ると、

「日本人の命が危険にさらされる環境が意図的に作られている」

事は間違いない。

なぜこのように、日本人が、集中的に狙われる事になっているのか？

それを解き明かす鍵は日本人が持つ遺伝子にあると考えられる。

直近では、スウェーデン出身のスバンテ・ペーボ博士が、
約30,000年前(40,000年前とも言われている)に絶滅した
”別の”人類・ネアンデルタール人のゲノム解析に成功し、
我々人類の種、ホモ・サピエンスとも交わりを持っていたことを明らかにした。

現在人類の共通祖先にDNA変異が起こり、
これがYAPと呼ばれるDE系統を生み出し、
その後6万年程前に更に2つの集団として、“D”と“E”に分岐したとされている。

※神話の読み解きの中では直接YAP遺伝子には触れないが、
「遺伝子の覚醒」として表現しているのは陰にYAP遺伝子の覚醒を示している

”Dの意思”とどこかの漫画で見た記憶があるが、
それもおそらくはここからきているのだろう。

この **YAP遺伝子はネアンデルタール人の遺伝子**と言われており、
日本人のうち40%は、この遺伝子を持っている。

これらを事実として捉え、総合的に分析すると、

ネアンデルタール人≡日本人
ホモ・サピエンス...それ以外
↓
交配

↓
現代の人類に派生

という構図になる。

こうなると、日本人が我々人類の祖である、という結論がついてしまい、新約聖書に書かれている事を真っ向から否定してしまう。

こうなると世界の常識が覆ってしまう。

このまま日本人が繁栄していく事で、
いつかその事実が世界に広まる事は止められない状況にまできている。

この行き着く先の未来に対して手を打つのであれば、
日本人を絶滅させてしまうしか他に選択肢は無いと考えている。

そんな残酷な事をする訳ないと思うかもしれないが、
欧州による略奪と侵略の歴史をよく見てほしい。

このガイドブックでは極力避けてる言葉を敢えてここで使うが、
欧州人は侵略する際、気力を無くさせるために、子どもと女を生贄に差し出させて、殺す。
こうして生きる気力の根源を打ち砕く。

残酷に思うかもしれないが、
同民族以外を人として捉えていない民族がいる事もまた事実なのだ。

YAP遺伝子はまた、その起源を辿ると宇宙人の遺伝子とも考えられている。
ここに多大なる興味が掻き立てられるが、今はそれどころではない。

話のみならず、人類が原点に立ち返ることのできる
形あるきっかけ作りの必要性を感じた。

やらなければいけない理由は明らかになった。

陰陽五行波動論でいうのであれば陽に繋がる陰の成立である。

先にその辿り着いた陽としての結論を伝えるが、

これが最終的にはエクアドルでの米作り、
「地球上で最も綺麗な水が降り注ぐ場所での農作物作り」としての
陽の道の取り組み＝具体的な手段へと繋がっていく。

日本人が、日本で採れる農作物を、

なぜわざわざ赤道直下に持ち込んでまで作るのか？

そのコタエは足元に広がる現実問題に目を向けてもらい、
改めて自分の意思でその全てを選択していく原点に立ってもらうためであり、
それをまたその周りへと広がる流れを打ち立てるため。

そこから先の選択と決断はそれぞれの自由であり、
それによって実現する人生もまたその人の人生であることは間違いないが。

母を無くしてからの出会いと出来事を通して、
五行の悟りを得ていく事になり、その結果、上記の手段に辿り着いていく運びとなる。

ここからは各五行の悟りに辿り着いた出来事を通じてその内容に触れながら、
2023年2月10日現在に合流していく。

補足：)

日本がぐるぐる巻きに包囲されつつあるととれる状況から、
この内容を知ってしまう事で恐怖を感じてしまうかもしれないが安心できる話がある。

本来日本は、海外でのコロナによる重症化を当てはめると、
経済状況含めて壊滅状態になる可能性が指摘されていた。

しかし、日本では治療の影響などをおいておいて、
コロナによる重症化が極めて少なかったのはこのYAP遺伝子のお陰と言われている。
陰なき陽(作られた虚実)は、陰陽を打ち砕く事はできない事の実例か？

これが事実であるにしろそうでないにしろ、
世界中でコロナが猛威を振るう中で実際の所は、
日本人の多くはマスクをただけで何も変わらなかった。

そうであるならこれは日本人に生まれた事を感謝できる話だ。

07.”米”を巡る物語に至った経緯 後編

(母の死～天国へ続く階段)

(木の悟り)

アメリカのウォール・ストリートで金融を学んだ後独立し、
その業界のコンサルタントとして活躍している知り合いがいる。

2019年12月にその知り合いの元を訪れたのだが、
そこで、その周りの成功談を聞いて鳥肌が立った。

母の死後、1年と半年が経過した時だった。

この頃には、十分なデータベースが構築されていたからか、
情報に触れるとある程度の仮説はすぐに打ち立つようになっていた。

以下はその会話の一コマ。

Sさん

「ずっと成功目指して頑張ってた友達がいて。
その友人がシンガポールの国策事業を請け負って大成功したんだよ。」

K

「よかったじゃないですか！！それはどのような事業なのですか？」

Sさん

「それは森林伐採事業でね。
樹齢100年を超えて大きくなった木は酸素を吸って二酸化炭素を吐き出すことがわかってきて。
そういった木は人にとって有害だから、それを駆除する事業なんだよ。」

K

「(！！！！！！動揺、、、)」

この短いやり取りを通してブレイクスルーした。
自分の中の知識と経験が繋がった瞬間だった。

木による大気形成の原理がみえた瞬間だった。

酸素を吸って二酸化炭素を吐くようになった気を「老木」という。

木はその成長過程で根を張り巡らせていき、根と根が繋がってヒトツナギになっていく。

この根と根が繋がった木々の事を「集合林」、

酸素を吸って二酸化炭素を吐き出すようになるために必要な
経過歳月の事を「100年輪」と勝手に呼んでいるが、
(おおよそ100年の意。根と根が繋がる過程でタイムラグが生まれる)

老木は、ヒトツナギになって機能した集合林の一般的な呼び名である。
(吸い込む気が酸素なのか二酸化炭素なのかで判断がつく)

そうなってくると、

木≡こども
集合林≡親

この構図が成立する。

そうなってくると、

木≡こども≡二酸化炭素を吸って酸素を吹き出す
集合林≡親≡酸素を吸って二酸化炭素を吐き出す

親の吐き出した二酸化炭素を、
子どもが吸い込んでまた親に還している循環構図が成り立つ。

動物界でいう「乳」の位置付けにあたる。

地球は宇宙空間に重ねて存在している。

陰陽五行波動論に基づいて考えていくと、
宇宙のエネルギー(気)があって地球のエネルギー(気)がある、
と云うレイヤー構造になる。

つまり、地球上にある成分には、
宇宙エネルギーに基づくものと地球エネルギーに転換されたものがある
と考えることもできる。

この考えを元にして整理すると以下となる。

※準純正酸素、純正酸素、準純正二酸化炭素、純正二酸化炭素は便宜上勝手にそう呼んで
使っている

(宇宙エネルギーの流れ)

1.宇宙エネルギーである準二酸化炭素を地球エネルギーの酸素に転換する
集合林化されていない木々の役割。

地球のいきものにとって意味のあるエネルギーに転換される

(準純正酸素の生成)

2.準純正酸素を地球エネルギーの二酸化炭素に転換する
集合林の役割。

地球の生き物にとって意味のある二酸化炭素が生まれる

(純正二酸化炭素の生成)

3.純正二酸化炭素を純正酸素に転換する。

木々の役割。

地球の生き物にとって意味のある酸素が生まれる

(純正酸素の生成)

※以降、木と集合林間での循環が始まる

木を内巻く構造としては純正酸素を生成する過程で、
純正二酸化炭素を生み出して宇宙に循環させている様子。

木を取り巻く構造としては、
木の循環の中で生まれた酸素を動物がもらっている様子。

これらが伺える。

そして木たちは集合林の近くを目指すのではないか？

集合林を取り巻く形で木が生えて森林となる。

また、集合林はあるべくしてそこに姿を表す。

森林は地球上のあるべき場所にできるものである。

その根源たる場所に向かって、木々たちは根を張って目指していく。

かつての人々は森林を目印に、

エネルギーが循環するところ⇨集合林の中庸を探し出し、

その目印に社を建てていったのでは無いか？

そしてその集合林の中庸に神を見出し、

神卸しの場として神社が建立されていったのでは無いだろうか？

日本のその最たるはおそらく神宮の置かれた場所。

(今の伊勢神宮のある場所とは限らない)

そこには日本最高峰ともいえる集合林が存在するのでは無いか？

目に見えての1本1本の木々の年輪もそうだが、
素晴らしい環境だからそうなれる。

つまり、神宮の置かれた場所は、
日本最高峰とも言える集合林が育まれる場所といえるはず。

そして高みを目指して集まった木々が、
その周りを取り囲む形で陣営を成している。

集合林から二酸化炭素が吐き出されると陣営がそれを吸収して、
またそこで吐き出された酸素が、その周りに存在する集合林へと流れる。

木と集合林を介した循環を通して、
エネルギーはヒトツナギになって大気を形成している。

神社は目に見えないけど眼に映る気が循環する場所を示す目印であり、
その神社を繋いだものが大気の循環構造を視覚的に示すものである。

社のある位置をマップに落とし込んで俯瞰してみれば、
潮の流れを読むが如く、気の流れを読むためにも使えるはず。
マクロにおける風水学のようなもの。

この大気形成に関わる見解を、「木の悟り」とここでは呼ぶ。

(土の悟り)

同年2013年、セミナー会場で出会った方で、その後の人生における節目節目でボクの事を導いてくれた女性がいる。

彼女がスリランカでアーシングをした所、足の裏が焦げたように真っ黒になって、洗ってもとれなくなったとの事。一緒に現地に行ったほかの人は、あの人は言ってるだけ、と言っていたが、わざわざその事を教えてくれたくらいだったからボクにはそうは思えなかった。

ひよんなきっかけだが、土と我々の関係について深く考える機会になった。

我々、地球上の全てのいきものは、地球から生まれ、地球に戻っていく。

人は土に還り、また土から生まれてくる。

人は死んだら土に還って、今度は(取り込まれて)有機質になって、木が取り込んで、木の実になって、人が取り込んで、そして精子と卵子になって、また人が生まれてくる。

ここで直接的に繋げて考えたら、人は土とも云えるし、木から生まれてくるとも云える。これはそのまま言葉で繋がる。

他の生き物も同じ。

人は、土に還り、人ではない何かになって、また転生している。
これを繰り返している。

地球上すべての生き物は繋がっている。
即ち、地球と地球人もまた一つとして繋がっている。

そう考えると土に還った人と、土から生まれてきた人。

どちらも同じ人同士が共鳴して一つになろうとして、
土と肉体を境にぶつかってそれで足の裏が焦げる事態になったのではないか？
そもそも一つだから、それが共鳴し、反応した証なのではないか？

また、その中に、転生せずに、
この循環のど真ん中にあり続ける存在が在るのではないか？
と考えるようになった。

その循環の起源のような場所に、全ての生き物が、生前に得た知識
と経験を置いてまた出発するような、全てが一つとなった大いなる意思のような。

それが、肉体≡媒体を別としてそちら側にアクセスした時に、
霊媒師、シャーマン、巫女たちがその世界で、対話する何か共通した存在。

おそらく、ヤーウェ(英語四文字でYHWH、と表記する。それ以上も以下も、詳しいことは文献にも残っていない)、と言われる、唯一神、として扱われる存在がそれではないのか？と思う。

大いなる意思は大気がある以上、形成される。
大気を形成しているものにそれは宿る。

何か要件が揃った時に限って、この世の中に転生してくるのではないか？
かつての五大預言者（ノア、アブラハム、モーセ、イエス、ムハンマド）はヤーウェが転生したものではないか？と思う。

また、YHWHを通じて他の星のYHWHとまた繋がっているように感じる。

YHWHは還った先にあるその存在である以上、我々の意識とも繋がっているといえるし、YHWHを通じて我々は繋がっているとも云える。また、YHWHは意識の集合体とも云える、とみている。

アーシングには詳しくないが、信頼できる人からの体験談を通して、命の循環について深く考える機会となったし、転生をまともに真正面から受け入れられるようになるきっかけとなった。

これを「土の悟り」とここでは呼ぶ事にする。

(水の悟り)

命の循環、転生を理解するきっかけをくれた女性から、
またある時、連絡が入った。

今回の見解を得て、物語はクライマックス、
エクアドルを目指すようになる。

「ねえ、聞いて。沖縄で珊瑚が復活してきてるよ！！
神の水(?)を作ることに成功した先生がいるらしく、
その先生の開発した水が本当に波動が高いものかどうかを実験してみたいなんだけど。

沖縄のある地域でそのお水を地域の人が飲んで、汗流して、おしっこして、海に流したら、
絶滅しかけた珊瑚が蘇ってきんだって！！！」

これを聞いて、**ボクは泣き崩れた**。

ここで本当の意味で、
背負ってきた計り知れないものから開放されたような気持ちになった。

実際の地球環境問題に触れる中で責任を感じて自己嫌悪に陥っていた所に、
「地球人がいなくなったら地球は大自然を取り戻す」
みたいな事を突きつけられて正直ボクは鬱々としていた。

それが、**人という媒体を通すことで、水はその性質をかえて生命の水になる**って...。
それなら、生きてるだけで価値があるって事じゃないか！！

人として生まれてきた事で、
そこに普遍的な価値があるという事を知ったら、
生きているだけで価値があると思ったら自信を持つことができた。

これを知ってからというもの、

水いっぱい飲むようにして、
トイレいっぱい行くようにして、
いっぱいシャワー浴びるようにした。

ただそれだけでも地球の役に立っているということが嬉しかった。

昔から汗かきで手がいつも濡れてるのがコンプレックスだった。
長年のコンプレックスすら吹き飛んだ。

地球は選択と決断の星とも言われている。

ボクはこの無数にある選択肢のどれもを選ばずに「罪滅ぼし」を選択してきた。

当時のボクと似た心境で、生きている人はこの世の中にいると思う。

あなたは生きているだけで価値がある。

あなたは最高だ。

あなたは素晴らしい。

こう言われているような気がして生が祝福されたような喜びを感じた。

自分にも価値があることを認識できたことで、

本当の足元に目を向けることができるようになったように思う。

自分には価値が無いと思い込んでしまうと足元が見えなくなるんじゃないか？
その価値を認められるからこそその足元が見えるのでは無いか？

「人は生まれながらに罪」という常識が植え付けられていたのだろう。
その罪を償う何かを今世でやらなければ地獄に落ちるとすら思っていた。

罪を背負わされてる意識って実は植え付けで、
それを償うために働かせたり布教させたり。

このように世の中を動かすための動機づけでは無いのか？
そのように思うようになった。

人は生まれながらにして罪なのではなく、

人は生まれながらにして祝福されるべきである。

やってもいいし、やらなくてもいい。
誰にでも等しく、「やる事」と「やらない事」を選ぶ権利がある。

もらって、もらって、もらって、生きていることは事実。
だから還すことから始めることは重要。

だけど、何を通して世の中に還元するかは人それぞれ。
それを見つけるのもまた、足元が見えてるからこそできる事では無いのか？

自身の開放に繋がった今回の体験を”水の悟り”と題して、
「生きているだけで祝福されるべき価値がある」ことを、
この世の中に伝えるべきだと心から思った。

今回の出来事は、ボクに「意識改革」を起こすきっかけを与えてくれた。

ボクの使命は、自身の体験と共に「意識改革」のきっかけを与えることだと確信した。

強いては「原点に立ち返るきっかけを世の中に与える」こと。

この知見を手に入れたところから連想されるように気づきが繋がっていった。

高いところほど綺麗な水が降り注ぐ。
間違いなくその答えは「山」にある。

地球で一番高い所に登って、この知見と共に「意識改革に伴うメッセージ」を伝える。

(波動の高い水を求めて)

地球上で高いところほど水は綺麗なはず。
それならば高い山ほど大気汚染されていない。

波動が高いかどうかはわからないが、
水が綺麗なことは間違い無い。

ということで、世界一の高さを誇るといわれる
エベレスト山を調べた所でまた一つの事実を知った。

エベレスト山が世界で一番高くなるのは、地図測量局のトリック。

高さは「0」がある事で明確に計れる。

逆にいうと、球体においては、
その0地点をどこに置くかで高さの主張はコントロールできる。

地球の表面上で最も地球の中心から離れていることがわかっているなら、
ここから逆算的に高さの基準を打ち出すこともできるはず。

海拔高度を規定したのは、「英国インド測量局」。

ヨーロッパの会社でありながら、「インド」の名前がついている。
この名称で別と見せかけるトリックはこれまで何度も見てきた。

「エベレスト」のその名称は通称(あだ名のようなもの)で、
本当の名称は「チョモランマ」というらしい。

地図の測量局が勝手に名前を変えようとしている、と。
現在もその名称を巡る争いは続いている。

そのこの係争を通して、「チョモランマ」というのは、「世界の母なる女神」。

揉め事に囲まれてまでこのようにしたのは、
今の「海拔0」を規定する事に、何か深い意味合いがあるのだろう。

また、ここでまたハッとした。
「おかみさん」の語源はここからきているのではないか？

人は水が綺麗なところに住んだ方が何かと良いはず。

当然だが、平地に比べて山は限られている。

偉大な功績を残した人の嫁さんとか、はたまた何か特別な女性か…。
その地域の山には、その周囲から選ばれし女性が住むのではないか？

チヨモランマ、はそんな偉大な先祖の名前であり、
その山はその御神体そのものなんだろうと思う。

その人が土に還る＝その人と同化する。
そう考えるとこの係争は、急に來た外国人が
勝手に先祖の名前を変えた事になる。

長い年月をかけても今なお争っているのは、
譲れぬものがそこにある証である。

「おかみさん」の語源、ここにあり。

それはともかく、
そうなるとう世で一番高い山ってどこなんだろう？

(科学者との宇宙の話から最大のヒントを得る)

先に述べた社会構造改革を目指す中で
最先端の技術開発に携わる事になり、
ヨーロッパの科学者と関わる機会に恵まれた。

彼から宇宙の事を色々と聞いている中で、

彗星は流れる時に尾を引くが、
あれは宇宙の陰にあるモノが彗星と摩擦を起こして
マテリアルになって吹き出したものである事を知った。

要は、宇宙にある半物質が、
星との摩擦によって物質化しているということ。

摩擦？マテリアル！？

その際、星の内側で生まれるマテリアルって...
バクテリア！？

太陽との摩擦、太陽と直線的な位置関係、。
その場所は...。

赤道直下！！！！

そこにあるのはエクアドルで、調べていくと、かつて野口英世さんが、
ロスチャイルド財団の支援を受けてワクチンの開発を行ったのがここだった。

エクアドルには綺麗な水が降り注ぐのみならず、
人類生誕に関わるような、我々の遺伝子に関わる
何か隠された秘密がありそうだと。

「我々はどこからやってきたのか？」

これはボク個人の興味関心の範囲だが、
この解を紐解く鍵はここにありそうだと。

この事に幼い時から
興味を持っていたボクは胸が高鳴った。

(自然を重んじる民族が集結した場所？)
赤道直下≡天に最も近い
エクアドル≡天に最も近い国≡天国。

この世の中に天国が実在する。

この一行が頭によぎった。

完全に灯台下暗しだった。

太陽が真上に登るという事は、
太陽が最も近くなる場所という事になる。

地球を球体としてではなく、

山として捉えたら最も標高が高い場所となる。

どこよりも高いということは、
そこに降り注ぐ雨は何にも触れずそのまま届く。

農耕民族である我々は太陽、雨など、自然と密接な関係にある。
長い年月の間で農耕民族は、その最上ともいえる環境を目指すはず。

かつての賢人たちは水の悟りを含む世の中の真実を知っていたはず。

人という媒体を通すことで、水はその性質をかえて生命の水になる

これを知っていたら、ボクと同じように、波動の高い水を求めて世界に目を向けたはず。

レッドライン(赤道の通る道)を辿ればそこに辿り着ける。
太陽が真上に登るところを集合地点にもできる。

目に見えないものを言い出すとここでは計り知れないが、
目に見えるものとしては赤道直下が集合地点としては唯一の場所である。

同じ思考にたどり着いた視座の民族は同じくここを目指すはず。

この見解を元に合流した民族と集結して、
持ち寄ったその叡智を元にして文化統合を図ったのでは無いだろうか？

そして人類は世界に広がりを見せていったのでは無いだろうか？

我々がそこを目指したのか、我々がそこへやってきたのか、
或いはその行き来するような歴史があったのでは無いのか？

(全てが繋がった瞬間)
GoogleEarthを開けて赤道直下にあるエクアドルを開く。

そしてその付近で最も高くに位置する
山々を調べていった所で震えが止まらなくなった。

天に最も近い山、チンボラソの発見。
天に二番目に近い山である「コトパクシ」は活火山だということ。

つまり、天に最も近い活火山、
活きた山は「コトパクシ」ということになる。

Wikipediaで調べてみると、
別名「第二の富士山と呼ばれている」とのこと！！

太陽が真上に上がるということは北は真下になる。
日本の死んだ人の頭を向ける方角は北。

すぐに「北枕」が頭に浮かんだ。
ここまでくると日本とエクアドルには何か深い繋がりがあるはず。

今日本で起こっている、水の問題、空気の問題、食の問題。

これらの問題に目が向いた結果、
辿り着いたのがエクアドルの環境だった。

ここで農作物を作って日本に持ち帰る事で疑問を生み出す事ができる。

「なぜわざわざエクアドルまで行って農作物を作ってるの？」

それは問題に目を向けてもらうためであり、
原点に立ち返ってもらうため。

選択させられてしまっている事に気づいてもらうため。
閉じてしまっている眼を開いてもらうため。

地球は選択と決断の星。

この原点に立ち返って選択肢に目を向け、
改めて自らの意思でその選択と決断を行ってもらうため。

また、エクアドルの米作りには約1万年近い歴史がある。
もしかしたらそのお米が日本に持ち込まれた経緯が遥か昔にあるのでは無いか？

エクアドルで生み出されたお米を日本に持ち込む。
日本で完成したお米とその栽培技術をエクアドルに持ち帰る。

これは勝手に言ってる話だが、浪漫があって良いじゃないか。
的外れでなければ日本で完成したお米を原点に回帰させる事になる。

たとえ外れていたとしてもこの原点に目を向ける姿勢が、
やがて真実を明らかにしてくれる。

「原点回帰」をテーマにその活動を集約していくことで、
自ずと関わる人たちの目線は同じ方向に向かっていくはず。

「世界の頂きで意識改革に伴うメッセージを伝える」

何より、このテーマに基づいて出来た農作物を周りに分け与える事を通じて
「意識改革に伴うメッセージ」を伝えるのは最高な手段ではないか！！

天に最も近い活火山に行けば母親と対話することもできるはず。
少なくとも、ボクの声は届くはず。

調べていくと、エクアドルは緑豊かで色鮮やかに見えた。
綺麗な水を受けて土壌は肥えている。

それを受けて植物は生まれながらに成功している。
その植物を口にしている草食動物も生まれながらに成功している。
その草食動物を口にしている肉食動物も生まれながらに成功している。
それらを口にしている人も生まれながらに成功している。
成功している人は心優しく譲る心を持ちあわせているはず。

ここでいう”成功”とは物質的な話ではなく精神的な話。
士気、強いてはやる気に当たる部分を指している。

やる気が無くならなければ、諦めなければ、
どんな事があっても最後には必ず蘇る。

エクアドルには”諦める”という言葉が存在しないはず。

今回、水の悟りを得た事で、五行全てが繋がったように感じた。後は時が満ちるのを待つのみ。

...のはずだったが、ここでまた社会的な大問題に直面する。

エクアドル、野口英世、からの流れを引いたか？
運命とはイタズラなものだ。

(世界で蔓延するコロナ、空白の3年間。)

目的地と手段が見えたところで後は実行の時を待つ状態になったが、世界的にコロナが蔓延した事で経営状況は悪化してそれどころでは無くなってしまった。

この状況、心境では、当然、時が満ちたとは言えない。

当時の流れだけを見ると、日本はその歴史に、一旦の終止符を打たれようとしているようにも見えた。

こと自分においては特殊な運営体制をとっていた事もあり、この期に解散して個人に立ち返ったのだが、傾いた会社の清算と切り盛りを一手に引き受けたので首が回らなくなってしまった。

また、先代たちが積み上げてきたものがガラガラと崩れていくのを見て、悲痛な心の叫びが止まらなくなって気が狂っていた。

振り返って考えてみれば、

かつての大將軍、徳川家康公の願いである「国民全員の生活を向上させる」というその目的の延長線上で日本人の大半はその大將軍以上の暮らしを送れるようになった。

当時、テレビは家になかった。
エアコンがあることで夏は涼しく冬は暖かい。

食文化に関しても日本食のみならず、町に出れば世界中の食べものを口にすることができる。

徳川家康公が祀られている神社日光東照宮を訪れた時、かつての云われに基づいて、現代の人々によってその建物が建て替えられている最中だった。

これだけの人がいわゆるお墓参りにくるって、とてつもないことだと思ったし、

その遺言のようなものが、時を超えて受け取られて実施されていく姿を目の当たりにして、その見え隠れする功績の大きさに震えが止まらなかった。

大將軍と言われる所以、ここにあり。

今ある平和は大將軍を筆頭に、かつての先人たちが手を取り合って築き上げてきたものだ。

「積み上げてきたものが崩壊していく心苦しさ」

は、こういった尊敬する先代たちの、
かつての壮大な物語までを受けてのものだった。

「もしかしたらラグナロクは始まろうとしているのか？」

審判の時に向けて世の中が動き出したようにも感じていた。

ボクに関しては背景として、
20歳そこそこからずっと組織に関わってきたが、
このタイミングで一人になった。

実質一人になるのは下手するとバンドを始めた時ぶりの事だった。

**数百年続いた金融時代は限界を迎えて水の時代にさしかかり、
原点へ立ち返るか、そのまま洗って流されるかのどちらかの瀬戸際だと思った。**

逆に言えば、その金融は完成を迎え、
世の中ではお金による実現の幅が最大化を迎えていた。

昔は外食は食べに行かないといけなかったが、
今ではお金さえ支払えば無数のメニューから食べたいものを選び、
手元のデバイスで注文すれば家まで届く。

クレジットカードを登録しておけば現金を見ることも無いし、
そのまま待っているだけで家の玄関先に置いて行ってくれる。

タクシーを呼びたければすぐ目の前まで配車してもらえるし、
空港まで行けば世界中どこにだって行ける。

世の中は生産時代は限界を迎え、
ありとあらゆる欲求を解決できる商品とサービスで溢れかえっている。

コロナ禍、社会情勢を鑑みて動けなくなったのもあって、
その選択の幅を最大化してから本番に望もうと、
2020年5月14日を皮切りにFXトレーディングの勉強を始めた。

トレードはお金がニュートラルに動くだけだが、
目的を持っているものにとって
トレーディングによるメイクマネーの恩恵は大きい。

実は昔FXがまだ日本で流行し始めの頃に目を向けて、
その業界人たちにアポイントをとってその業界を覗きに行ったことがある。

しかしその時は早熟で前提が無く、
ことトレーディングにおいて右に習う者を見つけることができなかった。

一時期は自分の組織でトレーディングチームを作って、
その基礎を構築しようとしたこともあったが時代の到来を待つ形で断念していた。

今回一人になって、辺りを見渡してみたら、
そこには情報が溢れかえっていた。

自分の足を使って直接その環境を見に行ったりして
自分が身を置く環境を整えて行った。

その延長線上で一際輝く同志を見つけた。
良し悪しの話ではなく、その言葉の端々から、共通した何かを感じた。
この人とその周りは愛と光で満ち溢れていた。

また、世界共和実現のための取り組みには、
誰がそれを実現したのかを公知のものにするべきでは無いという考えを持っているが、
同志はその考えにも沿う形で展開しているようにも見えた。

偶像崇拜に近い形で、人の下に人ができてしまうからだ。
ボクが目を見せないのはその為だ。

失業者の求人对策や会社の切り盛りをしながら、
その同志の言動と行動をそばで追う形でしばらく時が流れた。

そして2021年12月19日に、
同志が初めて忘年会の映像としてそこに姿を見せたところから、
今ここに記している全てを本人に伝える必要性を肌で感じた。

2022年1月3日に他の情報をとるのを止め、
人との関わりを極力無くし、人生彼一本に絞って焦点を合わせた。

ここで、自分の還す対象として彼に注力する事を決めた。
自分にできる最大の還元をここに送る事に注力した。

意思が継承されれば幸い、
そうでなかったとしてもここから始まるはず。

その取り組みの一貫が「文字起こし」だった。

中学生の頃、好きな人に振り向いて欲しくて、
ひたすらタイピングの練習をしていた事がある。

ここにも原点回帰を感じて、
同志の動画発信を文字起こしして送り続ける事を決めた。

その延長線上の1年後の2022年12月の忘年会の時、
運命のようにボクは彼の隣にいた。

この1年間の間にある程度会社の事業の整理はついて、
エクアドルへの道も再度見え隠れするようになっていた。

2022年5月にはエクアドルへと繋がる
本質的な精神活動は息を吹き返していた。

感覚として、まもなく時が満ちるのを感じていた。

X-DAYは2023年5月14日。

天に最も近い活火山に向かい、
時を超えて母と対話する事を目指して動き出した。

その夏にはプログラミングの勉強をして、
自動で売り買いしてくれるシステムを幾つか自分で構築した。

その知識のお陰もあり、同年10月を迎える頃には、
手を加えずに利益を生むシステムができたことから
最低限の身動きが取れる見立てが立つようになった。

世界的なパンデミックの流行の始まりから約3年。
止まっていた時が流れ始めるのを感じた。

時を同じくして、

長編動画の文字起こしを完了させ、
それを巻物として捉えて直接渡しに行く事を持って、
同志との合流を果たすことができた。

**一周回って雨降って地固まるじゃないけど、
己以外にこの見解を伝える事が初めて実現した。**

また、その経緯に至って、
涙流してくれた同志には感謝が尽きない。

ここから次の物語が一気に動き出す。

(火の悟り)

同志と合流後、母のお墓参りに訪れた。

いつもは頭と心は限界で破裂しそうだったが、
この時はニュートラルな気持ちでお墓を洗っていた。

ボクは普段、美味しいものを食べたり、
新しい景色をみたりすると母の意思を感じたりする。

これは母に対する自分の想いなのか、
母が伝えてくれる母からの意識的なものなのか、
それがどちらなのかの判断はつかない。

ただ、このようにいつもそばにいるからか、
母親の墓参りをするとき、
そこに動けない母の存在を感じるようになった。

お墓を手で洗うようになったのも、
手洗いしてあげることで温もりが伝わると思ったからだ。

母親が亡くなってからというもの、
お墓参りの際はいつもそうしてきたがその日は違った。

いつもと同じようにお墓を洗っていたとき、
ふと母と地球が重なってみえてきた。

地球は動けない。

受け入れがたい事があっても、
瞬きせずにその現実を直視して受け入れなければならない。

我々の在り方一つで地球は笑うが地球は悲しむ。
身体も自分で洗えない。

まるでここにいる母親のようだと思った時に、
母の背中を洗い流していた手は止まった。

1年間やり続けた”文字起こし”の経験がその着想を呼び起こした。

いわば、文字起こしは火起こしそのもの。
目に見えないものを目に見えるものに転換する気力の必要な仕事。

農業における「耕起」と重なって見えたのだ。

人と同じように地球は自分の身体を洗う事ができない。

その時、犬がおしっこをした時に地面を蹴る姿が頭をよぎり、
人が土地を耕す姿が眼に浮かんだ。

ハッとした。

木は腐って落ちて腐葉土となる。
腐葉土は震動が与えられる事で転換を起こし土に還る。

調べてみたらこの地面ひっかきという行動は
犬特有のものではなく他の哺乳動物でも見られるとのこと。

哺乳動物は本能で土地を耕している。

確かに微生物から始まる全ての生き物から生まれる
震動によって時間をかけて腐葉土が土に転換されていくのは分かる。

哺乳動物の地面ひっかきは、
それ以外に比べて圧倒的な速度で転換される事になる。

木(腐葉土)に熱を起こして土に転換する。

動物は本能的に土を耕す。
人は能動的に土を耕す事ができる。

五行を改めて記載すると、木→火→土→金→水の順。

木と土の間を人が熱(火)を起こして繋ぐことで、
その後続く金≡実りに芯が入るのでは無いか？

その結果、実りに含まれる水分は、
まさしくその芯の部分の影響を受けたものになるはず。

「腐葉土に熱を与えて土に転換する」

この見解は他の五行の悟りがあるからこそ、
パズルをはめるように着想した事ではあったが、
五行の流れに当てはめて考えても理に叶っている。

人が土地を耕す事を辞める≡農業を辞めたのであれば、
地球はどうなっていくのだろう？

土が踏まれる事がなくなったらどうなるのだろう？

農家さんに対する

農作物を作る事から地球を耕す仕事への転換の提案。

地球を耕すためのアイテムとして農作物を用いる。

こうする事で地球を耕す事によって
地球からもらえる報酬が農作物という位置付けになる。

農家さんは良いものを探求するのに対して、
業者はそれを叩いて値下げさせようとする。

業者が買い取ってくれなくなると
一次産業従事者は困るので従わざるを得ない部分がある。

三重県伊勢志摩にある真珠養殖場においてももれなくこの状況が続き、
建物が老朽化してまた建替が必要になったタイミングで手のひらを返していった。
アホらしくなって廃業の道を選んでいった経緯がある。

利益相反するのでこれは仕方ない部分とも言える。

ただ、エクアドルの米農家さんたちは、
この叩きにあって、一家当たり500ドルの収入での
暮らしを余儀なくされている。

買取を辞める、と言われてしまえば
後がない状態だから従わざるを得ない。

この農家さんと契約してあげることで、
この不安から開放できる可能性が生まれる。

何より、

「農作物を作って売る」仕事から、

「地球を耕す」仕事にその目的を切り替える事による影響は計り知れない。

ただ一家だけでいいからその取り組みを実現する。
この取り組みを世の中に示す。

これを押さえる事が、
ボク個人が一人でできる最大の取り組みだと思った。

空気、水、土の環境ともに、
エクアドルには最高の環境が揃っている。

先に示した、空気の問題、水の問題、食の問題の
全てに思慮を張り巡らせてたどり着いたコタエ。

「なぜエクアドルで農作物づくり？」

生まれるこの問いに対するコタエがここにある。

我々と密接な関係にある「米」をその対象として仮置きしながら、
具体的な手段がここで揃った事で、ボクの心は完全にエクアドルへ向かい出した。

時は2023年を迎えようとしていた。
X-DAYまでもなく。

(三合会局、そして)

エクアドルへの準備を進める中、2023年2月22日に、
ある国における最大の銀行一族に入り込んでいる人との出会いがあった。

ボクのエクアドル行きを知っている友人からの紹介だったが、
それが呼び寄せたのか、本当にとんでもない人物だった。

お互いのこれまでの事とこれからの事を語り合った。

事前に友人から耳にはしていたが、
ここで改めて「三合会局」なるものを教えてもらった。

三合会局とは、円状の十二支が正三角形で結びつく
干支(3つ)の組み合わせが該当するもの。

今の時代に当てはめて具体的に言うと、
神宮、白山、箱根の順のルートで運ぶ(お参りする)と道が開かれるとの事。

運(うん)はこのように
後天的にもたらすことができる事を知った。

また、自分の出身が三重県であり、
白山のある石川県には同志がいて頻繁に通っていた事からここでも導きを感じた。

三合会局として神宮、白山、箱根を巡り、
運びを開かせた上でエクアドルへ行く事を決めた。

(三合会局～神宮編～)

2023年5月のエクアドル行きを控えて三合会局を回るべく、
実家へ帰り、お墓参りを済ませてから伊勢神宮へ向かった。

三合会局の話をすると、
それはそれで莫大な文量になるなので、
ここでは割愛する。

簡単に話せるものではないのでまた機会があれば話そう。

また、各神社に祀られている神様に関しては、
別の章を参照してもらう事として話を進めていく。

神宮へ向かう途中、不思議な体験をした。

「何をしにきたんだ？」

この問いを今回は感じなかった。
実は神宮に一人で参拝に行くのは今回が初めてだった。

これまで何度か行こうとした事はある。
だけど、その度に不思議な力によって立ち入れなかったのだ。

今回はそのお示しを受けなかった。
これは自分にとってとても大きな体験だった。

実は、きちんと自分の意思で
まともに神社に立ち入ったのは初めての体験だった。

そこで作法なども調べながら、
勉強しながら進んでいった。

その中でも、神社で手を合わせる時は
手をずらして合わせる事を知った。

これは陰陽五行波動論の解説編でも触れたが、
左右非対称≡陰なる存在の人が
それによって意図的に陽なる存在と化する為だと解いている。

初めて一人で神宮に来たのもあり、
また自身の中に木の悟りを手にしていたのもあり、
みえるものがたくさんあった。

樹齢800年を超えるといわれる老木の足元では、

その根が土から突き上がるほどに発達しており、
見るからに周りの根と繋がっている上、
コンクリートを飲み込んでいた。

改めて集合林を目の当たりにし、
そのスケールの大きさに圧倒された。

また、これによって、根と根が繋がる、という事が、
強いインパクトをもって自分の中に飛び込んできた。

地球人も本音の部分で繋がって一つとなり、
足元の地球に目が向くようになって欲しいと思った。

そういった願いも込めて、

神宮では初めて祈祷をお願いして、
その中で感謝とその祈りを伝えた。

また、改めて触れる神社は新鮮で、
ここで日本の天皇家の歴史に目が向いた。

伊勢神宮といえば、天照大御神様。

イザナギとイザナミの間の子どもが天照大御神というのも、
この時に調べて初めてまともに知った。

当ガイドブックに記した見解に至るは、
この時、神話に興味を持つようになったところから、
三合会局を回った延長線上で辿り着いて行ったものだ。

また、地元民として言うと、
正確には天照大御神は別の所に祀られている。

このことから、
三合会局の本当の巡り方はまた違うのであろう。

今回は表面的な形になってしまうかもしれないが、
その運びに従って動く事を重要視して回るものとする。

きっと何か新たな発見に繋がるのだろう。

(三合開局～白山編～)

白山と言えば、白山比咩神社(はくさんひめじんじゃ)。

イザナギとイザナミが離婚騒動になった時に

その揉め事を止めたのが、祀られている菊理媛神(くくりひめ)。

つまり、菊理媛神がいなければ、天照大御神は存在しておらず、
我々の存在を肯定する重要な存在、という事になる。

イザナギとイザナミがいて、菊理媛神がいて、天照大御神がいる。
この構図には何か感慨深いものがあった。

それもあって、菊理媛神は縁結びの神様と言われている。
ここでも祈禱を行い、同じく感謝と祈りを伝えた。

神社を参拝しにいく時、
神社の拝殿の屋根に絵札がびっしりと張り出してあった。

それを調べてみたら「ヨゲンノトリ」だった。



ここにはこう記載されている。

「来年の8月・9月のころ、世の中の人が9割方死ぬという難が起こる。

それについて、我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであらう」

これは、江戸時代に、コレラの流行を予言したとされるものとされるヨゲンノカラスに啓示が添えられたものであり、ボクは、2023年3月に白山神社をお参りした時にそれが張り出されているのを知った。

これは江戸時代のコレラ流行当時に張り出されたものが再度張り出される形となったものであり、これに関する詳しい情報は記載されておらず「加賀國白山」と記載されているのみ。

これはおそらく、白山の霊媒師と審神者によって打ち出された啓示、だろう。

「我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであろう」

これを実践するには毎日2回通う必要性が出るため、必然的にそれが啓示されている場所の近くにいないといけない。白山比咩神社の近くにいるとなれば、大津波がやってきたとしても、その災害を結果的に免れることができる。

地震や津波がくるのを伝えて事前に避難させるのではなく、結果的に助かる方法を合理的に編み出したのだろう。おそらくこれは、ノアの時代の大洪水の時から採用されている方法ではないだろうか？

地球規模の大洪水がやってくる事を啓示した。

かつての人類の知恵として、場所を指定して朝晩お参りに訪れてもらう事でその場所に移動させ、大災害を免れたのではないか？このように考えると筋が通る。

今一度、その白山比咩神社に張り出された啓示内容を転記する。

「来年の8月・9月のころ、世の中の人が9割方死ぬという難が起こる。
それについて、我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであろう」

信じてノアの方舟に乗ったものは救われた
＝信じて言われた社に毎日祈りに訪れたものは救われた

このように読み解くと筋が通る。

人類存続をかけた大きな物語の節目がみえた気がした。

(三合会局～箱根編～)

箱根神社に続く道中は色々な事があった。

まず前提にこの間に右腕を骨折した中で向かった。
これはなんの因果でもなく、調子に乗って怪我しただけ。

鬼のようなスケジュールの中、
レンタカーを借りて一人で現地向かったのだが、
不運な事に手動の窓だった。

高速道路を使って向かったのだが、
道中料金所の度に窓を開けなければならず、
到着する頃には右腕がブラブラになっていた。

本編に関係ないが、
こんな状態で向かって大丈夫か？と思っている所に、
YouTubeから気になる意識改革に伴うメッセージが流れてきた。

「箱根神社にいく時は部屋を掃除してから行かないとだめですよ」

偶然かわからないけど必然。
思い悩むものがあって道中車を止めて悩んだ。

部屋掃除せずに出てきてしまった…。

準備万端で向かったのかというとそんな事は無く、
後にも先にも今年行かなければいけない、という、
時の満ち引きの感覚でエクアドル行きを強行している所だった。

もしかしたら今回は見送った方が良いのではないかな？
もしかしたら自分にその資格が無いのではないかな？

実は、エクアドルに向かう直近の背景として、
一時は今世で訪れる事を辞退する事も真剣に考えていた。

それを友達に相談したら、
お前が行かなかつたら誰が行くんだと激励を受けていた。

ここでもまた突き返されるような力を感じながら、
過去を振り返り、立ち向かう勇気を取り戻して現地へ向かった。

箱根神社に到着する前の山道は、
そのまま山の内側へ入り込んでいくような不思議な感覚だった。
しばらく走ると視界が広がって箱根神社の元に辿り着いた。

箱根神社の入り口に行くと、そこには「国幣小社」の文字が。

調べていくと、昔、ここを通して発行されたものが国幣とされていたとか。

神社を通して国幣が証明されていたという事実には震えた。

中に入って階段をしばらく登っていくと、
その頂点にその箱根神社は姿を現した。

集合林の見解を持ってここを訪れてみて欲しい。

箱根神社の敷地を、木が包み込むように生えている。
その階段を登った所に見えるのはまさしく美しい球体そのものだった。

また、中を歩いているとふと、
土、也、王、求、という漢字が降りてきた。

これは地球を四文字に分けたものだが、
土に也る、王は求、からインスピレーションを受けてハッとした。

灯台下暗しとはこの事か…。

ここでも祈禱を行ったが、

これまでは、

地球人が一つとして、
地球と向かい合えるようになりますように。

と、祈ってきたのに対してここでは、

地球人が地球と一つで在ることに立ち還れるように。

と祈った。

これは決定的に似て非なる。

また、感謝とその祈りの後に続けて、
その為にはと、誓いも立てた。

その後、ふと気になって、
祈禱では何を心の中で行えば良いのか巫女さんに聞いてみた。

巫女さんは、
「感謝と祈りと誓いです。」
と答えた。

ここまできたらもう慣れてきていたが、
自分が導かれて祈祷で行った事がそのまま該当していて震えた。

また、箱根神社では、
その隣に九頭竜神社というもう一つの神社があった。

祈祷する時も、そのふたつを選べるようになっており、
受付の人に、どういう基準で選べばいいか聞いてみた所、
ご自身の思った通りで大丈夫です、と。

その上でそれを選ぶ基準を聞いても答えが返ってこなかった。

この時、九頭竜神社の歴史を調べてみた所、
昔悪さする九頭竜がいて、頓知(とんち)で追い払った、とあった。

昔、外交勢力による侵略を受けた時、
もう一つ賽銭箱を隣に置くから帰ってくれ、みたいな話だと咄嗟に思った。

どちらかわからなかったら、
人は無難にどちらのお賽銭箱にもお金を入れる。

こうして儲けを分岐させて共存させる事で
バランスを取ったのではないだろうか？

真実はわからないが、そのように思ったら、
神社で複数のお賽銭箱があったりする理由も分かった気がした。

また、箱根神社までを回ってわかったことがあった。

日本が敗戦する以前、
神社は政治的な役割を担っているように感じた。

絵馬等を通してその地域の人々の声が集まる。

そしてその地域の人々の共通した悩みを、
神社に集まった寄付を予算として共通課題から順番に解決していく。

実際にそれを請け負うのは
例えば寄付している企業間で行うこともできる。

神社にはそういった多数決を元にした、
政治の仕組みがそこにあったんじゃないか？と思うようになった。

素晴らしい多数決の仕組み、ここにあり。

ちなみにエクアドルのキトにある国立礼拝堂の名前は「VOTO」。
これは「多数決」という意味である。

インカ(※1)の建物と日本の神社には何か共通したものを感じる。
そのどちらも太陽を祀っている。

もしこの仕組み自体にも共通したものがあるとするなら、
共通した文化があるものとして、
日本とエクアドルの繋がりは一決定的なものになるだろう。

今度現地に行ったら確かめてこよう。

※1

南アメリカのペルー、ボリビア、エクアドルを中心にケチュア族が築いた帝国

(三合会局を終えて)

箱根神社での祈祷を終える頃には日は落ちて暗くなり、
ボク自身も怒涛の三合会局を終えてフラフラになっていた。

駅に向かってキャッチで立っている地元のお兄さんに、
おすすめのご飯屋さんを聞いた所、
鯨(クジラ)が食べられるお店を教えてくれた。

クジラ！？

ふと飛び込んできたその存在が気になって
そのお店に入って鯨について調べていった所、

最近まで日本の捕鯨漁が
IWC(国際捕鯨委員会)によって禁止されていた事を知った。

禁止された理由は
人類による乱獲のためにクジラの生存数が激減したため。

さらに調べていくと、

捕鯨を禁止された日本の捕鯨団は
また別の場所を求めては禁止されてを繰り返し、
いよいよ南極にまで辿り着いていた事を知った。

今回の捕鯨漁の解禁を受けて、
世界から引き上げて戻ってきているらしい。

**解禁になった背景を調べてみたらそれは、
暗殺された安倍晋三さんの功績によるものだった。**

日本人は古来より鯨を貴重な食料として、
平安時代にはすでに食料にしていた歴史があり、
頭の先端から尾まで無駄の無い食材でもあるとの事。

そうなってくると、
捕鯨漁を禁止した理由は日本の自給自足にメスを入れ、
貿易に頼る流れを生み出すための布石と思って仕方ない。

日本の自給自足を復興させるに至らせた安倍晋三さんは、
もしかしたらこういった事が原因で暗殺されたのではないかな？

思わぬ知見が手に入った事でここでも震えた。

食事を終えて、

お世話になっている武道の先生に箱根神社にきた事を報告すると、
なんとその先生が毎朝向かい合っている大神様が
箱根神社の祭神であるというから驚いた。

また、その先生が神様として、生きながらにある神社に祀られている事もそこで初めて教えてもらった。

もうここまでくると全てがフィクションのようだ。
この時から、奇跡が立て続けに起こるようになっていった。

三合会局を終えてエクアドルへ向かう準備は整った。

しかし、三箇所神社を回り終えた時、
それぞれに陰陽の関係にも感じる二つの存在がある事に気づいた。

伊勢神宮は別称「内宮」と呼ばれ、それと別に外宮があり、
白山比咩神社(しらやまひめじんじゃ)には、それと別に剣ヶ峰がある。
箱根神社に対しては、九頭竜神社？

本来はこれらを陰陽成立して
発動させていく必要があるような気がした。

これに関しては有識者からの
聞き込みを頼りにして、今回はそこそこにする事にした。

ただ、気になったので、再度神宮を訪問した。

(三合会局にも陰陽の影を発見、そして。)

ここで再度伊勢神宮を訪れて軽く聞き込みをしたのだが、

伊勢神宮の敷地内には別として子安神社があり、
そこに木花咲耶姫(このはなさくやひめ)とその父親、
大山津見神(おおやまずみのみこと)が祀られている事を知った。

木花咲耶姫は瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)の嫁で、
瓊瓊杵尊は初代天皇、神武天皇の親に当たる。

また、その神社の手前には小さな見張小屋があり、
その神社を訪れる人を絶えず見張っている。

その見張人に尋ねてみると、

「このように神社の手前に見張人がいるというのは
それだけのものがここにあるという事。」

という、云わんとした回答が返ってきた。

どのような経緯でここに辿り着いたのか問うた所、
地元のご縁でここで働くことになったとの事だった。

ここぞとばかりに地元出身である事を明かし、
これまでの経緯とこれからのミッションを伝えた。

思想の世界を巡るような様子をみせた後、
おもしろい角度からのアプローチですね、と答えが返ってきた。

また日本に帰ってきたら再訪する約束をして伊勢神宮を後にした。

また、天照大御神の「御魂」を祭神とするのは、
隣町である磯部町にある「伊雑宮(いぞうぐう)」で、
伊勢神宮とはまた違った場所にある。

このことから、本来伊勢神宮は、

木花咲耶姫(このはなさくやひめ)、瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)、
強いては、その子どもである神武天皇が何か関わるような場所じゃないのか？
と思うようになった。

後に一つの見解に行き着くことになるが、それは別章「血」を巡る物語に辿り着いた経緯にて。

(同志との白山訪問、そして金の悟りを得る)

そして、同志の元に向かった。
エクアドルに持ち込む玄米を用意してくれていた。

この際だから、と、一緒に白山比咩神社に行った。

階段を上がっている途中に、木から木が突き出ているのを発見した。
その足下をみてみたら、隣の木同士の根が繋がっている様子だった。

木の根同士が繋がると、また新たな生命がその内から生まれ、
その木を足場としてさらに芽が出るというのか。

これは確かに人の目に映る現象のみでは辿り着けないだろう。

そしてこの、

「根と根が繋がり新たな生命が生まれる」

という見解が最後、

自身の「世界樹の構造と仕組みに関する見解」を打ち出す決定打となる。

ちなみに、白山比咩神社と同じ呼び名だけど違う場所に、
「白山姫神社」がある。

ここにも訪れてみたのだが、
神社の敷地は線路、道路、住宅などに追いやられて、
申し訳なさそうに佇んでいた。

お参りしてから宮司さんに話を聞くと、
飛鳥時代から続いている家系のようだ。

飛鳥時代と言えは593年から710年まで。

かつての日本の歴史に関する文献は、
敗戦時にすべて没収されて焼き払われている。

ここの宮司さんに頼れば何か、
抹消された日本の歴史を知る手がかりが手に入るかもしれない。

エクアドルに行く目的を伝えて、
再度訪れる事を約束してその神社を後にした。

(いざエクアドルへ)

エクアドルで農業をやるにしても、
まずは現地の人々に受け入れてもらう必要がある。

今回の初回訪問は、現地開拓が主な目的となるため、
まず最初の出だしとして日本から持ち込んだお米を持ち込み、
コトパクス山でエネルギーを込めて持ち帰る試みをする事にした。

地球の頂に登り祈禱を済ませて日本に持ち帰るミッション。
行き帰りの道を繋げると地球一周する事になる道のりだった。

持ち込むお米は同志に選んでもらった。

そのお米は持ち帰ってきてから
同志の手を通してその周りへと配られて行った。

「なぜわざわざエクアドルまで？」

もしあなたの周りに当時のお米を受け取った人がいたら、
このガイドブックをぜひ渡してあげて欲しい。

出発前、そこに至る所までを間近で応援してくれた人を、
専用のLINEグループに招待する形で現地中継する体制を作った。

正直、こうして、
活動中の全てをオープンにして進めていく展開は初めてだったし、
これをする事で手の内が全てわかってしまうような怖さはあった。

だけど、その結果に関わらず、
この活動をガラス張りで届ける事が大切だと思った。

それで、同志を含む周りの仲間に、
エクアドル道中の冒険をそのままリアルタイムでみてもらった。

エクアドルでの冒険は、

2023年5月12日に日本を出発し、
2023年5月27日に日本に帰国する形となった。

現地では5月14日から5月25日までの12日間の物語。

そこでの冒険の詳しい模様は、
同志の元にデータファイルで渡してあるからそこに譲るとする。

ここでは現地に到着してすぐ、
コトパクシ山に登頂する前にホテルで収録した
音声ファイルを共有するに留める。

■ 天国への階段～前夜No.01～

<https://www.youtube.com/watch?v=i1faUsYH5go>
(00:11:47)

■ 天国への階段～前夜No.02～

<https://www.youtube.com/watch?v=x43xNReiZqc&t=2s>
(00:11:47)

■ 天国への階段～前夜No.03～

<https://www.youtube.com/watch?v=rQoXZPCEdAI>
(00:11:47)

まずコトパクシ山に向かい祈禱する事から始めた。

三合開局を通して学んだ礼儀作法を守って行った。
当時も今も、ここを押さえてなければこの願いは叶わなかっただろう。

また現地では母との対話を果たすことができた。
持ち込んだお米に想いを込めてスーツケースに詰め込んだ。
こうして早速念願の想いを果たす事ができた。

そしてその後、町に降りて、出会う人々に、
自分がエクアドルにきた目的を伝えると同時に、
以下の問いを繰り返した。

「あなたの夢はなんですか？」

そこで幾つかの夢の実現の一助を担う事ができ、
彼らから受け入れてもらう形で現地に迎え入れられた。

そんな彼らに紹介してもらう形で農家さんと連携し、
「エクアドルでの米作り」を形にする事を以ってこの物語を完結させたい。

夢を後日談で語る人はたくさんみてきたけど、
夢を叶えるその最中の姿をリアルで示された実例は皆無に等しい。

実現していく姿は今の世の中に勇気を与えると思ったし、
自分がその在り方を自分の背中を持って世の中に伝えることで次の世代に繋がると思った。

総じて、原点に目を向けてもらう為の取り組みとして活動を行ってきたが、
それももう一つ最たる目的があつての事だ。

一度きりの人生、その胸に秘めた想いを果たして欲しい。
夢実現に向かうこの物語を通してあなたに問いかけたい事がある。

「あなたの夢はなんですか？」

夢や目標には無限大の可能性がある。

ボク自身、実に20年間にも及ぶ物語を、
途中投げ出さずに続けてこれたのはその力によるものだ。

夢は魂を呼び起こす。

もし声を大にして言えないなら、
ぜひ我々の元を訪れて欲しい。

夢を叶えてあげる事はできないが、
夢を持つもの同士、互いにその夢を語り合うことはできる。

ボクにはもう一つの夢がある

それは周りの夢が叶った時にその物語を曲にすること
それをもってあのステージに返り咲くこと

かつて断念した夢の続きだ。

今のボクはドラマーとしては下手くそだけど、
たくさんの音色をこの人生の中で手に入れてきた。

バンドの名前はもう決まっている。

人生いつだって始める事ができる。
さあ、一緒に夢の続きを始めよう！！

(後記1:神々からの贈り物～金の悟り～)

エクアドルに行った時、山に生える木が、天に向かっていっているようにみえて、根と根がある一定以上繋がりと、次はいよいよ地表の木は天を目指し出しているかのように感じた。

それと同時に、腐り落ちたらそれが蓄積して腐葉土、そして土となって隆起し、またその上に木ができることを繰り返すことで山になるんだ、ということに気付いた。

そして、山になったものは、水を蓄積する機能を持ちながら、その水を地球の深層部に届ける役割を果たしながら、マグマを形成する。

そして、山と山がマグマを介して繋がっていく。
これはまるで、集合林、ならぬ、集合山のような、そんな光景がみえた。

そこで衝撃が走った。

ということは、木と木が繋がって山を目指し、山となってからはマグマを介してヒトツナギになり、そのエネルギーを地球のコアに届ける。

**地球のコアにそのエネルギーが届いた時、
そこで生成されるのが「金」ではないのか！？**

地球は「金の成る星」。

地球が金を内に蘇らせた時、裏宇宙なる闇の世界にも光が差し込む。

そんな事を思い描きながら、
それを良しとする勢力とそうでない勢力がいることで合点がついた。

地球を愛するすべてのいきものは、
地球の金を蘇らせる為の活動をしているともいえるようだ。

これを「金の悟り」と呼ぼう。

まさかの形だったが、エクアドルでの冒険にて最後、
こうして、木→火→土→金→水の具体的な循環図がみえた。

あとは「火起こし」。

お米を選んで、農家さんを選んで、お米を運ぶ。
これで始まる。

2023年3月10日現在、まもなく最後一局、
この物語のエンディングを共にして行こう。

07.意識改革に伴うメッセージ

当書を発行した目的の一つとして、伝えなかったメッセージをここに掲載します。

ほとんどのコントロールしている人はとるばかり。

つくってきた人、とか、ほとんどの人たちは、かえす、ということが前提にない。
だけど、地球から空気をもらっているし、ご飯ももらっている。もらいっぱなし。それをかえして、はじめてタスキを渡す。循環させる。次につなげる。受け継ぐ。

次に繋げる

循環をつなげてひとは存在しているわけで、それが自然の摂理で、欲は自然の摂理を否定する。要するに、意図的に流れを止める。だから、もらったらかえす。これではじめてバランスがとれる。これではじめて流れができる。

循環する

人類はこの循環を今までつくることができなかった。これを変えた時に世の中と未来が変わる。その流れをつくる、それがこたえ。
だから、何をかえせるか、何を得るかは大事だし、得た分なにかかえして、流れと循環ができて、それが自然の摂理につながってるから、未来が、世界が変わる。
一人一人がその心を一部持ち合わせるだけで世の中が変わる。

世界が変わる

そこには強制もないしすべて自由、ひとは自然の中で生きているから、自然の摂理のベクトルに同じ生き方をすることによって、素晴らしい世の中ができあがる。
今までの人は流れを止めてきてこんな世の中をつくってしまったけど、その流れを止めるのは欲であって、欲が悪いっていいわけではなくて、なんでもバランス。子孫もそう。子孫の次につなげなければたえてしまうわけで、個人がその流れとして、子孫をつくって次につなげるというか、流れをつくっている、連続体をつくっているという行動。

未来に繋がる

これを欲望によって、もらって、かえさなければ、それは、絶える、ということを意味する。だから、些細なことでもなにかを得てなにかをかえす、という、流れをとめる、という、子孫をつくらない、とか。ひとりひとりの受けて返すという作業。これを起こすだけで世界が変わる。それを思い起こすとか、共に気づかせ合う学び語らいの場所がこの取り組みの中にはそれがある。本当に循環する。

未来が変わる

それが試されることとか、それに気付かせるような出来事などが敢えて組み込まれている。世界の未来を変えるために。

万物に則って生きるだけで未来がかわる。それは循環させるだけ。水も自然の摂理で止まったら腐る。循環したら生きる。動いて循環するだけで、すべての死んでいたものがすべて生きかえる。これは自然の摂理で、もらってかえす、ということがそれに値する。些細なことでもそうやって循環を、一人一人が意識して流れをつくるだけ、それを循環させるだけ。

世界が蘇る

何気ない行為を一人一人ができるだけですべてが変わる。死んでるものがすべて蘇る。これが自然の摂理だから。

一言で我々の活動が何なのかと言うと、循環させる、がテーマ。

すべてにおいて流れる、または循環させるものを、生み出す媒体。そこから学べるし、それが必要となる出来事を用意している。それを提供し続けるし、それが必要なんだ、という認識を発信する。その細工もしてある。それがいろんな場面で発動するような仕組みをつくってある。

関わるだけでそれが実現していける、または、気づかせていけるものとして準備した。

その些細な出来事は本当に世界を変える。水は止まって腐って死ぬ。世の中は死んでるものだらけ。これらがすべて蘇るのをその目に証明していく。

媒体の存在意義

個人が関わってきた時に、最初は未熟だったとして、その人が磨かれて、磨かれた存在になっていく媒体。それが寄付だったりする。そこに自由があって、やってもやらなくてもいい。

何のために何をやるのか。そのコタエなくして人生の一步も進めない。

目的の追求と発見みたいなことを今後の活動を通じて実現させたい。それを明確に、鮮明に、描ける人生を実現してほしい。その一助となれば、自分達の存在意義がある。

たとえば、ゴミ拾い一つとっても、拾うひとより捨てる人の方が多いからゴミは増える。捨てる人が拾うひとに変わるだけで、世界からゴミがなくなるだけでなく、捨てる人がいなくなる。

人間の力っていうのは、一人一人は些細なことしかできない。だけど世の中変わったりするわけで。それは些細な事の出来事が連続してつながって流れができた時に、それが過去におきてきている。だから一人一人は些細なことで、大きなことをする必要はない。それがかわるだけ、それが連鎖するだけでかわることを証明したいし、それを皆さんと一緒に証明していきたい。

08.”血”を巡る物語に至った経緯(神話の読み解きと考察)

イザナギ(男側を代表する選ばれた遺伝子の保有者)とイザナミ(女側を代表する選ばれた遺伝子の保有者)が地上に降り立った。

その後に天照大御神が生まれた。

イザナギとイザナミの間のトラブルを、白山比咩大神(しらやまひめのおおかみ＝菊理媛尊(くくりひめ))が仲裁に入って事なきを得た。そして天照大御神が生まれ、孫として瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)が生まれて天皇の祖に繋がり、国が隆起していくこととなる。

国が隆起する過程で共通通貨が必要になる。

箱根神社は戦前、「国幣発行局」だった事から、国の隆起を示す象徴とも云える。

三合会局を回ってから望んだ初めての世界戦、はじまりの地、エクアドル。

そこではイエスキリストを巡る物語に触れる中で、三合会局を周りながら学んだ日本の”血”を巡る物語に共通したものを感じた。

現段階では正直、わかる事はほんの一握り。

確かなものがここにある事だけは間違いない。

我々日本人がここに至るまでの経緯を、

神話を読み解く形で原点から”血”を巡る物語に至る経緯を共有していく。



この章では、ここまで辿り着いた見解を元に、イザナギ・イザナミによる国づくりが始まってから今に至るまでの物語をまとめるべく、世の中の情報に照らし合わせて、その背景を紐解いていく。

この世界に、天と地が初めてあらわれた時、天にある高天原(たかまがはら)という場所に、アメノミナカヌシ神、タカミスヒ神、カミスヒ神の三柱の神々が生まれました。

この三柱の神々はひとり神でしたので、姿を隠してしまいました。

(古事記の神話より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

神々は「一柱、二柱、三柱」と数える。背景には神が巨木に降り立つ、という信仰があると考えられる説がある。この事から、巨木≡老木≡集合林、神が巨木に降り立つ≡集合林には宇宙のエネルギーが循環すると読み解く事ができ、宇宙のエネルギーが循環した巨木を司る土の積み重なり≡山≡集合山。つまり、山≡神、という構図が成り立つ。つまり、ひとり神≡山。直結して読み解くと、天と地が初めてあらわれた時、山が生まれました、となる。また、山は腐葉土が積もったものであることから、それは木≡世界樹が生まれたとも云える。

※集合山に関する見解は「世界樹の構造を理解したきっかけ」参照
URL？

『古事記』では「ひとり神」は性別が記されていない。男女に分かれる前の神と考えられ、男女の対の神が現れる前の神で、婚姻を行うことがなく、姿を隠して現さない神のことだと考える説がある。

この事からも、集合山≡神、と読み解くのが自然である。
唯一神、ヤーウェ(YHWH)か？

ヤハウエ(ヘブライ語: יהוה、フェニキア語: 𐤔𐤕𐤗𐤤、古アラム語(英語版): 𐤕𐤓𐤕𐤔、英語: Yahweh)は、モーセに啓示された神の名である。旧約聖書や新約聖書等における唯一神、万物の創造者の名でもある。

この名はヘブライ語の4つの子音文字で構成され、テトラグラマトン(古代ギリシア語で「4つの文字」の意)または聖四文字と呼ばれる。この名前の正確な発音は分かっていない。日本語ではヤーウェ、ヤーヴェ、エホバ等とも表記されるが、エホバについて現在ではしばしば非歴史的な読み、誤りないし不適切な読み等と位置付けられる。

集合林の見解から読み解けば、人として姿を現す時と、土に還って人以外の形として循環している時がある事が読み取れる。その上で循環しない対象の存在を、YHWH、とするのであれば納得がいく。YHWHが人に転生する時は突き詰めて、それ相応の時である。

それがかつての五大預言者(ノア、アブラハム、モーセ、イエス、ムハンマド)に当たるか？

高天原(たかまがはら)

『古事記』などでは、地上の人間が住む世界である葦原中国(あしはらなかつくに)や、地中にあるとされる根の国・黄泉(よみ)に対し、天上界にあった、と記述された。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E5%A4%A9%E5%8E%9F>



■高天原に関する見解 パート1.

地上の人間が住む世界である葦原中国≡日本

地中にあるとされる根の国・黄泉≡欧州

に対し、天上界にあった≡天に接した国≡赤道直下≡エクアドル

日本は島国で海中≡水に囲まれており、エクアドルは天国で天空中≡水に包まれている

エクアドルでは天候が移ろいやすく、1日の中でも雨が降ったり止んだりする。高山の天候の移ろいと言えばそれまでだが、それとは似て非なるような。感覚としては、2週間の時が1日で流れているような、そんな感覚を覚えた。

人が知覚する形状は別として、地球を球体として捉えるのではなく、山として置き換えて捉えた場合、そこは宇宙空間に接した領域になる。この天候の移ろいは、時計の針が逆回転しているというか、地球上の常識と似て非なるというか、そんな感じ。ここが宇宙空間にあるとしたら、時の流れが他とは別次元なのではないか？

エクアドルの首都であるキトは年中春のような気候だったということに驚いた。

赤道直下＝熱いイメージがあったが、これを植え付けられた先入観とってしまうのは自分だけか？人を寄せ付けないための何か意図を感じる。

また、エクアドルにある「Guayacan(グアヤカン)」という花は、年に一度しか咲かず、満開時は1週間で散る。性質が日本の桜に共通している。



これを桜と同じ媒体としてみた時に、色が違うのは、そこに流れるエネルギー（空”気”の事。酸素や二酸化炭素を含む）が地球上の他と違うからだと予測する。それは地球上からエネルギーが循環して集約した結果か？それとも空間として地球上ではない領域に突き出ている証拠か？

エクアドル＝赤道直下≡エクアドルの中で一番高い山＝天に最も近い山≡チンボラソ

チンボラソ（スペイン語: Volcán Chimborazo）は、エクアドル中央のチンボラソ県にあるアンデス山脈の火山である。首都キトから南南西に150kmの位置にある。エクアドルの最高峰であり、山頂は地球の表面上で最も地球の中心から離れた地域にある。山名は現地語で「青い雪」を意味する。

海拔高度で見た場合世界一高い山はエベレストであるが、赤道地域の方がエベレストのある場所（北緯28度）よりも地球の半径が大きく水面も高い。このため、標高ではチンボラソの6,268mよりエベレストのほうが約2,580m高いが、地球の中心からの距離ではチンボラソが約6,384.4km、エベレストが6,382.3kmとなり、約2.1kmチンボラソの方が離れている。

（Wikipediaより引用）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%B3%E3%83%9C%E3%83%A9%E3%82%BD>



チンボラソは、活火山ではない。人でいうと生きている状態ではない。宇宙風（勝手にそう呼んでる）を受けてその姿もボロボロである。

二番目に天に近い山であり、天に最も近い活火山がコトパクス山である。

コトパクスとは、ケチュア語で「光る巨大な物」を意味する。別名コトパヒ山。富士山に似ていることから、「エクアドルの富士山」と日本人が呼ぶことがある。エクアドル国内ではチンボラソに次いで二番目の高さである。

（Wikipediaより引用）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%88%E3%83%91%E3%82%AF%E3%82%B7%E5%B1%B1>



物事の原理原則として、二番、の位置が形になる番となる。
前例があることでそれに習えるし、前例があることでそれに基づける。

2023年5月にコトパクシに登ったが、そこに緑豊かな草原をみた。
その光景をみて出てきた言葉が「高天原(たかのあまがはら)」だった。

この時点では神話のことがよくわかっておらず、
2023年5月、当時の映像の中で「あまのたかがはら」と言っていた。

高天原の古事記における記述

『古事記』においては、その冒頭に「天地(あめつち)のはじめ」に神々の生まれ出る場所としてその名が登場する。次々に神々が生まれ、国産みの二柱の神が矛を下ろして島を作るくだりがあるから、海の上の雲の中に存在したことが想定されていたと推測される。天照大御神が生まれたときに、高天原を治めるよう命じられた。須佐之男命にまつわる部分では、高天原には多くの神々(天津神)が住み、天之安河や天岩戸、水田、機織の場などもあったことが記述されており、人間世界に近い生活があったとの印象がある。葦原中国が天津神によって平定され、天照大御神の孫の邇邇芸命が天降り(天孫降臨)、以降、天孫の子孫である天皇が葦原中国を治めることになったとしている。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E5%A4%A9%E5%8E%9F>

■高天原に関する見解 パート2.

「天地(あめつち)のはじめ」に神々の生まれ出る場所＝先の見解から、最たる集合山がある場所≡天に最も近い場所≡赤道直下＝エクアドル(絶対的にみるとそうだが、相対的にみると日本である可能性も同時にある)

海の上の雲の中に存在≡赤道直下にあるコトパクス周辺の山々の麓にはコスタという地域が広がり、周りは海で囲まれている。海の上の雲の中に存在したことが想定されていたと推測される≡海の上の雲の中、という比喻は、繋げて読み取るなら日本の上の出雲とも受け取ることができるし、海(日本)の上(天に近い)の雲の中、として読み取ることで赤道直下≡エクアドルともとれる。

天照大御神が生まれたときに、高天原を治めるよう命じられた

↓

高天原＝人類のルーツ、的な位置づけ。そこを治める存在≡特別な存在
天照大御神≡人類のルーツとして特別な存在

↓

現代でそれに当たるのは日本の天皇家である

■イザナギとイザナミに対する見解 Part 1

—————

『古事記』によると、イザナミは夫のイザナギと共に天から地上へ降りて来て結婚し、多くの島や神を生む(コトバンクより引用)

<https://kotobank.jp/word/%E4%BC%8A%E5%A5%98%E5%86%89%E5%B0%8A-1052830>

—————



天≡高天原≡コトパクス周辺、地上≡日本と仮定して読み解く。すると、イザナギとイザナミはエクアドル側から日本へと送り込まれた国起こしの二神となる。

ーイザナギ天原の神々が、イザナギ神とイザナミ神の男女二神に「この漂っている国をつくり固めよ」と命じて、天の沼矛(ぬほこ)を授けて、国づくりをお任せになりました。
イザナギ神とイザナミ神は、天の浮橋という空に浮かんだ橋に立って、その沼矛を指し下ろしてかきまわしました。

潮をかき鳴らして、引き上げた時、その矛からしたたり落ちた潮が積もり重なって島になりました。
この島をオノゴロ島と言います。

このオノゴロ島にイザナギ神とイザナミ神が天の高天原より降って、そこに天の御柱(みはしら)と八尋殿(やひろどの)を見つけました。

(編纂1300年古事記の神話より抜粋)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-2/index.html>

潮をかき鳴らして引き上げる(音を立てて水面よりも上に)、その矛から滴り落ちた湖(矛≡水面より上に一本で成り立つ何か、それが落ちてくる)というこの2つを総合すると、海底噴火(マグマ)の事を示しているようにみえる。

「このオノゴロ島にイザナギ神とイザナミ神が天の高天原より降って、」の表現から、オノゴロ島ができた後に上陸している

&

「天の浮橋という空に浮かんだ橋に立って、その沼矛を指し下ろしてかきまわしました。」という表現から、現地には降り立たず、どこか遠くからみているような視点を感じる

後者は、霊媒師と審神者(さにわ)によって海底噴火が起こる事実を予め知っていたのではないか？

その場所から国づくりを始めなさい、というようなお告げが降りたのではないか？

このオノゴロ島にイザナギ神とイザナミ神が天の高天原より降って、そこに天の御柱(みはしら)と八尋殿(やひろどの)を見つけました。

(編纂1300年古事記の神話より抜粋)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-2/index.html>



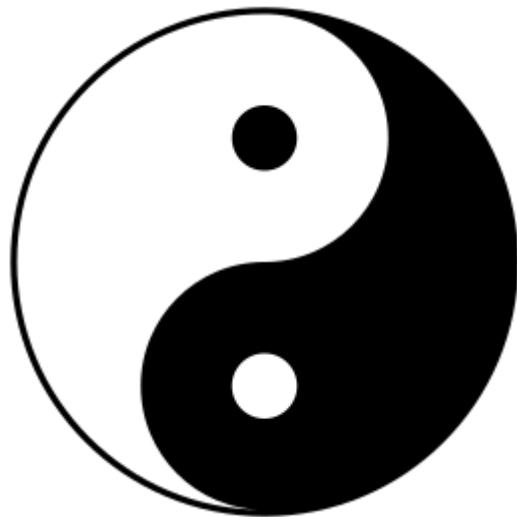
高天原(たかまがはら)から降り立った時に発見した「天の御柱(あめのみはしら)」は自然による造形物だと思われる。また、「八尋殿(やひろどの)」は人がいて成り立つものであろうことから、イザナギ、イザナミが降り立ったのは海底噴火が落ち着いてしばらくしてのことだと想定される。現地には人が既に暮らしていて、そこに入植したような絵図になる。普通に考えたら入植争いが起こるはずだが、そういった文献が無いところをみるとそもそも交流があった可能性もある。

※イザナギ、イザナミの国起こしの前に、その国起こしに近い何かがあった可能性≡アマミキヨによる琉球開闢(りゅうきゅうかいびやく)がそれに当たるか？

そこでイザナギ神は、「それでしたら、私とあなたで、この天の御柱で廻り逢ってから、寝所で交わりを行いましょう。あなたは右からお廻りください。私は左から廻ってあなたにお逢いしましょう。」と、イザナミ神と国を生むお約束をなさいました。

(編纂1300年古事記の神話より抜粋)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-2/index.html>



”左”は陽≡生≡奥、”右”は陰≡死≡辺、といって左の方が尊く扱われるが、中国における軍では”右”≡死を示す方を優先することが、勝つことを意味すると言われている。ただし、中国の場合、時の支配者によって右と左のどちらを重要視するかが変わっている事実がある。

右廻りと左廻りは互いに交わらない事、つまり互いに別で子孫を作る事を示唆している。

「天の御柱で廻り逢ってから」は、一呼吸おいてから、一つ間を開けて、のように読み解ける。国づくりをするのであれば子孫繁栄に眼を向け、より良い遺伝子から始めるのはもちろんの事、その遺伝子を覚醒させる事を考えるのは自明。

イザナギとイザナミは兄弟だったと言われている。
近親相姦は血を濃くし、隔世遺伝によってその遺伝子を覚醒させる。

これを前提にすると、イザナギ、イザナミそれぞれで子どもをつくり、同じエリアで生活することで、孫以降は隔世遺伝する構図となり、それぞれの子ども同士は近親相姦になる。

直接的に近親相姦を起こすよりも、子の代は裾を広げて、そこから始めることで確実性が上がる。

互いの子どもの間に出来た子どもたちは隔世遺伝により遺伝子が覚醒し、血が濃くなる。この摂理に則って国作りを始めた事が推測される。



イザナミとイザナギを兄弟とするのであれば、その時点で親の血筋が覚醒することになるが、直系の近親相姦なのでリスクが高い。隔世遺伝によってリターンも低い。こういった背景から、それぞれに子どもをつくって一代跨ぎ、リスクを下げるのがセオリーだろう。

隔世遺伝とは...

隔世遺伝(かくせいいでん)とは、個体の持つ遺伝形質が、その親の世代では発現しておらず、祖父母やそれ以前の世代から世代を飛ばして遺伝しているように見える遺伝現象のこと。間歇遺伝(かんけついでん)や先祖がえりの一部も、この隔世遺伝によるものである。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9A%94%E4%B8%96%E9%81%BA%E4%BC%9D>

隔世遺伝と近親相姦の二つを取り入れた事は大筋当たっていると思われる。

織田信長の上に10代くらい遡ったら日本人はだいたい天皇と繋がると言われている。
これは共通見解として重要な様子で、日本は農民の子供より王様の子供の方が多いらしい。

■ 日本の秘密組織が、世界最強だった。CIAもモサドもKGBも怖れる『ヤタガラス』参照
(哲学者さとうみつろう)(11:55)

<https://www.youtube.com/watch?v=y9F3EvxXtyU>

ちなみに、後に登場する天照大御神(アマテラスオオミカミ)は兄弟である素戔嗚尊(スサノオノミコト)との間で近親相姦を行い、宗像三女神(むなかたさんじょしん)を授かっている。この近親相姦の事を、「誓約(うけい)」と呼ぶ。

近親相姦は生まれた子どもが障害を持つ可能性、3歳までに死ぬ可能性(33%)、妊婦さんが死ぬ可能性がある事と引き換えに、その出産に成功すると、血を濃くすることができる。

近親相姦は生まれた子どもが3歳までに亡くなる可能性が3割。生まれつき障害を持つ可能性、妊娠中に母体が亡くなる可能性もある。しかし、それとは引き換えにその出産に成功すると、血を濃くすることができる。

天照大御神と素戔嗚尊の間で誓約にも見受けられるように当時、神の儀式のような位置付けで近親相姦は常識的に行われていた。

このことから、イザナギ、イザナミの頃においても同じ常識があった事が想定される。

ちなみに日本は100年前くらいまで、一夫多妻の国だった。

こうすることで手元で広がった裾が同士が一つとなり、また一定周期で血が濃くなるという循環構造を意図して作り上げたのだろう。先代たちが血の循環までに眼を向けたからこそ、我々は集約、収束してヒトツナギでいられる。言い換えると、2024年2月24日現在、日本人は総じて、1億2000万人で構成された壮大な家族そのものということができる。

始まりのあり方が歴史として繰り返されているのだと思う。
予め血の循環までを取り入れた全体の構造と仕組みの構成に震える。

これらの見解を総合すると、イザナギ、イザナミの国づくりの基礎としては、

- ・隔世遺伝
- ・近親相姦

この2つが大きなキーワードになっているようだ。
これを元に整理すると下記となる。

- ① イザナギと地上の人との間で子供をつくった
(国政を整えるため(国民を増やすための試み))
- ② イザナギと地上の各地の要人との間で子供をつくった
(内政を整えるため)
- ③ イザナギと神(霊媒師・審神者能力保有者?)との間で子供をつくった
(種子の準備。外政を整えるため)
- ④ イザナミと地上の人との間で子供をつくった
(国政を整えるため(国民を増やすための試み))^{注)}
- ⑤ イザナミと地上の各地の要人との間で子供をつくった
(内政を整えるため)
- ⑥ イザナミと神(霊媒師・審神者の能力保有者?)との間で子供をつくった

(種子。外政を整えるため)

⑦ イザナギとイザナミの間で子供をつくった

(近親相姦→種子の生成)

注④に関しては、最初はイザナギ同様に自ら男性を誘っていたようだが、それがうまくいかず、イザナギが選んだ相手との間に子供をつくる or 廃止となったようだ。

⑤と⑥も同様、イザナギが選んだ相手との間に子供をつくっていったのだろう。こうする事で嫉妬を防ぐ。嫉妬は不協和をもたらす。アブラハムといえ、恋心はコントロールできないようだ。わかる。

これらが直結の1代目となる。

この次の2代目からが隔世遺伝の段階となる。

下記に天照大御神誕生までの遺伝子の流れを整理する。

☆⑦によって種子が形成される。

この種子を置いて一代跨ぐことで自分たちを始まりとした隔世遺伝に対してアプローチすることに繋がる。

☆③と⑦を交配させる

→⑧イザナギ側を主とした遺伝子の誕生

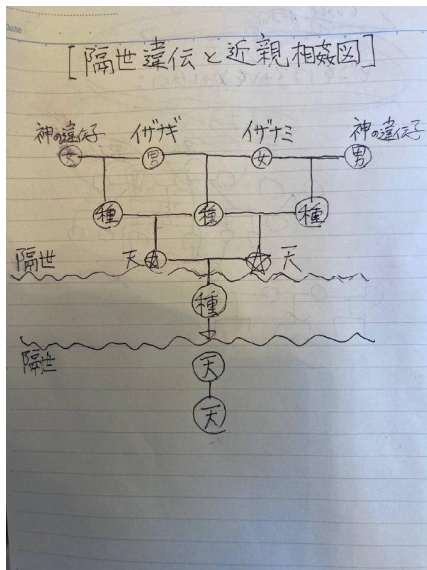
☆⑥と⑦を交配させる

→⑨イザナミ側を主とした遺伝子の誕生

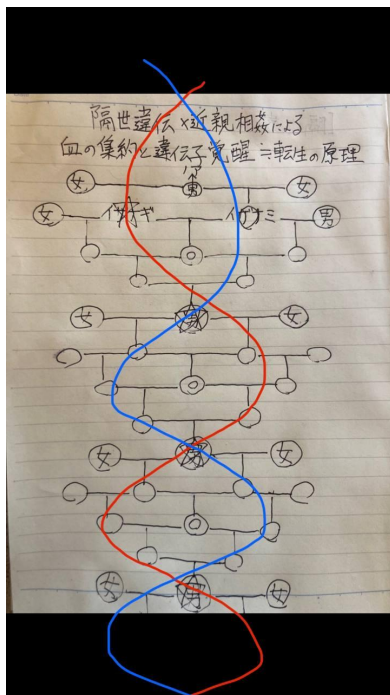
☆⑧と⑨を交配させる

→天照大御神、素戔嗚尊、月夜見尊の誕生

に繋がる。



これを連ねると下記のようになり、そこに螺旋(らせん)構造のようなものが見える。



この平面図の中庸に陰陽の印が重なって見えるのはボクだけか？



下記には、貴子(きし)以外に関して記載する。

☆国政:①と④を敷き詰めることによって国内で隔世遺伝×近親相姦の基盤が出来上がる。
国民が自由恋愛の中で気づかずのうちに隔世遺伝・近親相姦が繰り返される基盤形成。ある一定期間毎にその子孫同士が恋をして紐づき血が集約収束を繰り返していく。

→目に見えない集の意識が働く基盤づくりにつながる。

☆内政:②と⑤によって各地に点在する格なる存在との統合を図ることができる。
内政を整える部分。連携勢力と政略結婚を行うことで本質的に繋がる。
内部統制が図れるようになる事で、全体が手足のように動くようになる。

☆外政:③と⑥によって各地に点在する格なる存在との統合を図ることができる。
外政を整える部分。連携勢力と政略結婚を行うことで本質的に繋がる。
外部統制が図れるようになる事で、連携体制が取れるようになる。
世界平和を願い国づくりを始めたのであればこのあたりに目を向けるのは当然のことだと考えられる。

ちなみに、イザナギとイザナミのその名の「イザナ」とは、「誘う」の意味とされる。
また「ギ」は男性を表す語、「ミ」は女性を表す語と解説されている。

イザナギとイザナミを「夫婦」と単純に読み解くには前提が違う。

時間軸として立体的な解釈をもって納得が得られるところ、真実に迫りたいのであれば時の軸として、過去と現在と未来を行き来させて考える必要性も出てくる。

神話を読み解くためには、霊媒師(れいばいし)と審神者(さにわ)の存在と、それを真正面から受け入れる必要がある。

■ 霊媒師と審神者の存在が歴史を読み解く鍵



霊媒師(れいばいし)とは、超自然的存在(霊的存在)と人間を直接に媒介することが可能な人物のことであり、審神者(さにわ)とは、霊媒師に降臨している最中、霊媒師の言動と行動の真偽と真意を判断して書き留める役割を持つ人物のことである。

その上の事⇨生まれて以降の事に眼が向き、今世に捉われる事で魂の継承、継続した成長は断裂する。魂の洗練水準が一定水準以上の濃さを超えた時に、隔世遺伝的に蘇る。つまり、魂に当たる部分、磨ける感覚の部分は遺伝によって持ち越す事ができる。

魂の成長段階としてそれ相応になると、いわんとしている事はわかる(何か感じる)が、それがなんなのかわからない状態に至る。直接的には理解できないが感覚で理解している＝潜在した状態になる。

ここからブレイクスルーを繰り返し、その上での極点となる出来事が起こった時に、そのブレイクスルーによって己の内に立体が形成される。この立体こそが、アカシックレコードとこの世のレコードを紡ぐVISIONとなる。

霊媒師はこのVISIONを介してアカシックレコードにアクセスしているものとみられる。審神者は、同じくそのVISIONの形成に到達しているため理解することができる。なので、霊媒師の眼に映るものを、その言動と行動から読み取る事ができるものとみられる。

鳥肌が立つのは、これらに関連するブレイクスルーが起こる予兆であるように思う。

霊媒師、審神者として覚醒する過程として、その代を牽引する存在が、その子孫に対して、その代を、今を支える出会いと出来事を語り継いでいく事でまたそれが繰り返され、代を跨いで繋がっていく。

これを「魂の継承」と呼ぼう。

一族としてのその経験が世代を超えて繋がっていくことで、目に見えないけど眼に映るものを見極める眼を開かせていく。人類の営みが文化となり、やがて文明に繋がるように、その力はやがて神聖な領域に到達する。

こうして霊媒師は生まれ(一うむ二)、それに準じて審神者が生まれ(二うむに三)、そして周りへと伝わるようになった(三せい万物)と推測する。

沖縄では、霊媒師はユタ、、審神者はノロと呼ばれている。

海外ではシャーマン、神社では巫女、一般的には「イタコ」と呼ばれていたりする。

霊媒師と審神者の文化は世界共通の文化ともいえる。

沖縄のノロはかつて国家公務員だった事からも、その根差した歴史文化から、霊媒師と審神者の力≡預言によってかつての琉球大国は開かれたと考える事もできる。

根ざす歴史文化とはそういうものだ。

それと同時に、霊媒師や審神者に至った者の魂の階級はある水準を超えているといえる。

目に見えるものからしか判断できないレベルと、目に見えないけど眼に映るものから判断できるレベルの境界線は、「級」と「段」の違いで訳される。剣道の世界では、級位のは目に見えて振りかぶって面を打つのにに対して、段位のものは頭蓋骨の人中に対して衝撃を与える形で面を打つ。この際、振りかぶっているかどうかは評価の対象にならない。この両者の面は似て非なる。

血を継承する(歴史を継承する)観点から考えると、霊媒師や審神者の遺伝子は、未来に持ち込むべき、魂の階級の高い種子と捉えることもできる。

預言によって国づくりを進めていった事を前提に考えると、またその国づくりとして持ち込むべき種子は、また、偉大な預言者たち本人のものとなる。

霊媒師と審神者が日本を開闢(かいびやく、開かれること)したとすると、イザナギとイザナミはそれに当たる事になる。これを前提として、今は仮説としての有力候補となる人物を紹介しておこう。今後必要に応じて深掘りしていく。

■ イザナギとイザナミに対する見解 Part 2



イスラエルの祖と言われているアブラハムと妻のサラがその候補に挙げられる。

アブラム (ヘブライ語 אַבְרָם (古: 'Abrām, 現: 'Avram))、または アブラハム (英語 Abraham)、アブラハム (ギリシア語 Αβραάμ Avraám アブラハム) は、ヘブライ語で多数の父という意味。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教を信仰する「啓典の民」の始祖。ノアの洪水後、神による人類救済の出発点として選ばれ祝福された最初の預言者。「信仰の父」とも呼ばれる。

ユダヤ教の教義では全てのユダヤ人の、またイスラム教の教義では、ユダヤ人に加えて全てのアラブ人の系譜上の祖とされ、יהוה (ヤハウエ、ヤーウェなどと発音。日本語聖書では主に「主」と表記。ここでは最大公約数的に神と表記) の祝福も救いもアブラハム契約が前提になっている。

語源となった『創世記』に出てくる人物アブラハム (אַבְרָהָם, Abraham) は若い頃はアブラム (אַבְרָם, Abram) と名乗っていて (『創世記』第11-17章)、アブラムの意味は日本語にすると「父は高い」というようなニュアンスでこれ自体は生まれの良さを指し、アブラ「ハ」ムの様に「ハ」をつけて伸ばすのは中東のアラム語などで普通に見られる変化であるが、『創世記』の第17章では「多くの国民(たみ)の父」(多く=ハモン、父=アブ) という意味だとして、彼の子孫繁栄のために神が直々に改名されたものだとされている。

(アブラムとアブラハムの別の日本語訳の例「アブラム＝高められた父」と「アブラハム＝おおくのものの高められた父」)。

アブラハムの名は、ユダヤ教、キリスト教などを支持する人々の間では世界的に、非常によく男性の名として使われている。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%8F%E3%83%A0>



本当の名前はアブラムであり、高い父、と訳されている。

預言者である事から鑑みるに、生まれながらに高い階級の霊媒師か審神者(さにわ)だったのであろう。後天的にそれが発展していく事になるのだと思う。

アブラムは子孫繁栄のために「アブラハム」と改名している。
自分の名前は人生で最も繰り返される音の一つであり自身の最たる部分を育む音である。
この改名もまた、霊媒師によって降ろされたものだろう。

語源で読み解くと、魂水準の高い人(高めていく人)から、子孫繁栄の人(多くのものを高めていく人＝子孫繁栄と共にその魂を継承しその教えのもと高める人)へと発展した事になる。

国づくりの命は、血の繋がりはもちろんのことながら生まれてからの実績によって評価されたからこそ任命された偉大なミッションだったように感じる。

ちなみにアブラハムはその上を辿るとアダムに繋がっており、そこから辿るとイエスキリストに繋がる。ノア～アブラハムの歴史は主にルカによる福音書第3節34～38章に、アブラハム～イエスの歴史は主にマルコによる福音書第1章2～16節に記載されている。

・イエス・キリストの家系図

<https://convivia.co.jp/conviviacolor6/conviviacolor6.pdf>

福音書とは...

新約聖書のうち、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネによる四つの文書。イエス＝キリストの生涯およびその言行を内容とする。ゴスペル。

(goo辞書から引用)

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E7%A6%8F%E9%9F%B3%E6%9B%B8/>

そして、アブラハムの妻のサラは異母妹だったと言われている。



これを前提にすると、父親としての血の出所は同じである事、その後の人生を共にしている事、異母妹間の夫婦⇨意味合いがあって対になっているであろうことから、アブラハムとサラの関係は、霊媒師と審神者のそれと考えることもできる。

もう一つ。サラの母は、ノアの子孫にあたるアブラハムの父が子どもを作るほどの相手。そして、サラ本人は、異母妹でありながらアブラハムには妻に選ばれるほどの相手。

実はサラの母の血筋は日本からきているのではないのか？
その時代を鑑みると日本は縄文時代を含む以前の出来事。

縄文土器にみられる象形文字からは今を超える伝達技術が見受けられる。
そんな日本における霊媒師家系、審神者家系の者が母親だとしたら、これまた合点がつく。
ノアの子孫との間に子どもをつくるに値するのではないか？

そう考えると、サラの母親について、現代の誰もが触れない理由もわかる。

これが事実となると、日本人はアブラハムと同じ横の位置付けか、或いは、当時の女性優位の背景から考えると、下手すると立場がアブラハムより上になってしまう。そうすると歴史が変わってしまう。日本人が重要な存在になってしまう。そう考えると、この歴史は抹消されて当然の事になる。

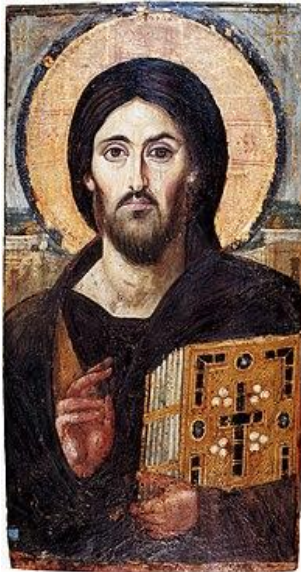
なので現段階では憶測の領域を超えないが、アブラハムとサラは二人ともが神から改名されているという事実がある時点で、その二人ともが神に受け入れられている証はとれる。「アブラハムと

サラ」が「イザナギとイザナミ」だとしたら、この二人が一つとして国づくりを命じられたのも納得がいくし、イスラエルと日本の共通点にも納得がいく。

時が流れてイエス・キリストが復活したという話はさておき、何かが転生して蘇ったのがイエス・キリストだと考えると、天照大御神(イザナギ≡アブラハム)の生まれ変わりだと捉えることもできる。

ちなみに天照大御神の生誕日はキシエの初日(1月1日)である。

※キシエとは、日本古代暦のキシエの年のこと



現在、世界共通で西暦が用いられているのは西洋側の力の証明、つまりカトリックの世界的な波及によるものだが、イエス・キリストの生まれた日(処刑された日にする説もある)を境界線にしていることがここでは重要で、「イザナギ=アブラハムなる預言者がイスラエルから生まれる」というような啓示のもと、天照大御神自身がこの世を去ってからも、世代を超えて、その時代の到来に向けて国を繁栄させてきた経緯があるのではないかな？

イエスはかつてからの五大預言者の一人。五大預言者としてノア、アブラハム、モーセ、イエス、ムハンマドが挙げられている。

故に、偉大な預言者が現れれば、自ずとアブラハム系列の生まれ変わりである事には誰でもピンとくる。イエス・キリストが偉大な預言者だっただけでなく、偉大な預言者を先祖にもつ末裔にその対象者が現れた、となれば、もはや言うことはないだろう。

君が代の歌詞は天照大御神(偉大な霊媒師)から降ろされた啓示が現実のものになったことを述べたもの、とするのであれば筋が通る。

君が代のヘブライ語での発音とその訳詞をを掲載する。

【日本語】 君が代は
【ヘブライ語】 クム・ガ・ヨフ

【訳】 立ち上がり神を讃えよ

千代に	チヨニ	シオン※の民
八千代に	ヤ・チヨニ	※イスラエルの歴史的地名・形容詞
さざれ石の	ササレー・イシノ	神の選民
巖となりて	イワオト・ナリタ	喜べ残された民よ 救われよ
苔のむすまで	コ(ル)カノ・ムーシュマツテ	神の印(預言)は成就した
		全地に語れ

ヘブライ語での発音はこちら→ <https://www.historyjp.com/audio/kimigayo.mp3>

そうすると、君が代は西暦の始まりの頃に述べられた意識改革に伴うメッセージだったといえる。

時を超えて現れたイエス・キリストが、まさしくその啓示に沿って現れた存在なのであれば、その存在が転生して現れる事が国づくりの目的が成就した証明なのであれば、その存在に葦原中国(あしはらのなかつくに)と高天原(たかまがはら)は歓喜の声を示すだろう。

これを以って、イザナギとイザナミが着手し始めた国づくりは時を超え、蘇った天照大御神のその眼に届けることをもって完結したと云える。

これが「神の印(預言)は成就した」の意識改革に伴うメッセージに繋がるのだろう。
「全地へ語れ」から、その預言の成就に向けて営んできた末裔たちがいるからこそその意識改革に伴うメッセージだろう。

空想にはなるが、この君が代に込められた声明をあげることもまた、当時から啓示とセットで残されていたのかもしれない。

■ 輪廻転生のメカニズムを科学的に解いてみる



完全に飛んだ話になるが、エクアドル、日本、イスラエルの三箇所は、集合山のマグマを通じてコアで繋がっているとすると、このいずれかで死んだ後に土に還り、またいずれかに転生する事は自然界の摂理に基づいて理解できる。

マグマを介して、別の場所から別の場所へとエネルギーは循環している。



集合山としてヒトツナギになっている以上、別の場所での噴火は、また繋がっている別の場所に影響を及ぼす。

エネルギーが入れ替わる現象が起こる。
リバランスされる。

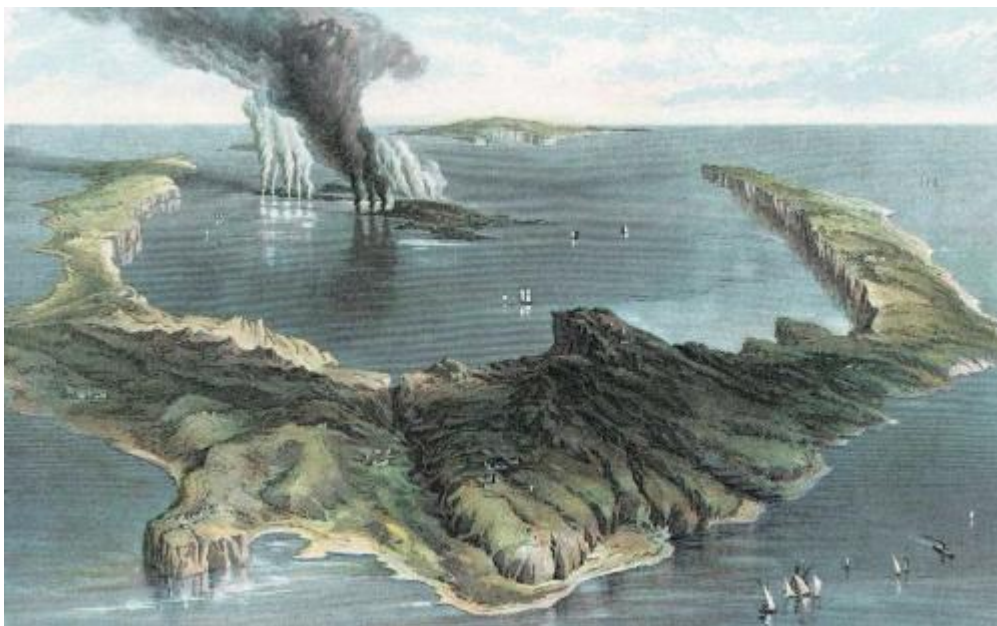
2023年5月にエクアドルを訪問した時、博物館を廻り、聞き込みをする中で、遡ること3600年前に、コトパクス山の大噴火があった事を知った。これをきっかけに文化が統合していった、ような

事が記載されていた。ボクが自分の足を使って確かめてきた事の中で、やはりこういった歴史を読み解く重要な文献は、表向きの世界には出てこない傾向があるように感じる。



※コトパクシ山≡天に最も近い活火山。

ちなみに今から3600年前頃、別の場所でも大噴火があった。エーゲ海のクレタ島北方に位置するテラ島のティラ火山(現在のサントリーニ島)噴火は、破壊的な津波を引き起こした。その規模は広島型原爆の数百万発分と言われている。そこにあった文明が崩壊したことで、この地震は「ミノア噴火」とも呼ばれている。



参考: 3600年前の超巨大「ミノア噴火」、津波の犠牲者をついに発見
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/22/010400005/>

これはマグマを介して集合山が繋がっている事を示しているだろう。
きっとこの時、世界同時多発的に自然災害が起こったものと思われる。

また、紀元前1万3000年前から栄えた縄文時代は、今から約2500年前の縄文時代の終わりに急激な人口減少があったという。



ここを境に人類の時代が変わっているのではないか？

それ以降生まれてくる人たちの起源となる地中のエネルギーが、集合山の見解から、この大噴火を通してリバランスしているのではないか？

そうだとしたら、本質的には日本で生まれるはずの人を形成する有機質がイスラエルのもので入れ替わっていたり、このリバランスを通して輪廻転生を起こした肉体が別の場所に移動して生まれ変わっていたりするはず。

時を超えて天照大御神をまた形成し、そこに本質的な蘇りを起こすに至るのも納得がいく。

五大預言者に数えられるイエス・キリストの存在は、その時代の誰の眼にも、天照大御神(≡アブラハム)が復活したように映ったことだろう。

そしてこの記念日が、天照大御神の生誕日である1月1日(日本古代暦ではあるが)に重なっていることも興味深い。

このことから、偉大なる預言者の誕生は、アブラハム再来を彷彿させるが、1月1日の決定根拠を鑑みると当時、アブラハムから始まったトップオブトップの存在づくり≡天皇家の創造は、世界的にみても大きな出来事だったのではないか？

それによって、当時の人々の眼には、天照大御神がイエス・キリストに生まれ変わったと映っても不思議ではないし、それが日本側、内側？からみたら尚更のことだ。

■ 世界的な大噴火から始まった国づくり

輪廻転生の解明で引用したエクアドルのコトパクス山の大噴火だが、それは、1万年以上前から栄えてきた縄文時代に終止符が打たれることに繋がっていく。

ちなみに本題から逸れるが、縄文土器に描かれている象形文字から鑑みるに、その高度な伝達技術からも、何か当時の世界中のテクノロジーが集結していたように思う。

この大噴火の以前と以後で、近代は二分しているように感じる。

縄文時代より前から地球上で築き上げられてきた文明は、この当時の世界的な自然災害によって、この世の中から姿を消したのかもしれない。

話を戻そう。

寒冷化により狩猟生活をしていた縄文人の食料が減ったことが原因らしいという。

約2500年前の縄文時代晩期から弥生時代初期にかけて、人口が大幅に急減していたことが明らかになった。男性の人口だけでなく女性を含めた全人口が急減したと推定できるという。この時期は、日本を含み世界的に気候が寒冷化しており、気温が下がったことで食料供給の減少が人口減につながったとみられる。

(科学技術の最新情報サイト「サイエンスポータル」より引用)

https://scienceportal.jst.go.jp/newsflash/20190625_01/index.html



マグマの存在を、生をもたらすエネルギーが地球内部から発散している状態だとして考えると、地球規模の噴火が起こった後、その噴火を司って繋がっている集合林の地帯はエネルギーを溜め込む時期に入る。

「全人口が減少したと推定できる」事からも、根源からくる目に見えないエネルギーの影響を感じる。土から生まれてくる我々としては、その根源のエネルギーが空になっていけばいきものの数はそれに合わせて縮小する。

その影響が日本にも連動して起こっていた様子が伺える。

またこの事実に関連性があるとする、原理原則に基づき、エクアドルと日本は地球のコアの部分でそこにある集合山を通じて繋がっている≡国土が繋がっている事になる。

これは超常的な考えになるが、エネルギーがバランスされる観点で考えると、集合山で繋がったもの同士、他に問題が起これば、問題が起これいない集合山が循環を起し、エネルギーを供給し合っているように感じる。

これをもとに考えると、大噴火を起こしたコトパクス山とクレタ島にはエネルギーの供給が必要になる。そうすると、地震の起これいない日本側としては、エネルギーを供給する側となる。気温が下がったり、人口が減少したりする現象については、このエネルギーの循環、エネルギーのリバランスに目を向けることで納得できる。

コトパクス山の大噴火が直接的に影響するかはともかく、人が稲作を始めた頃を「弥生時代」の始まりとしている。立てた仮説を前提にすると、縄文時代の終わりは、コトパクス山の大噴火をきっかけとした寒冷化がその節目になっている事になる。

Wikipediaによると、弥生時代は紀元前3世紀～5世紀と記載されているが、最近の研究で、それよりも以前から稲作が始まっていた事が見つかっており、弥生時代が始まった時期は、まだ共通の見解として一致していない。

研究グループによると、その後人口が増加したのは、気候が再び温暖化し、渡来系弥生人がもたらした水田稲作技術によって、安定した食料供給が可能になったためと考えられるという。
(科学技術の最新情報サイト「サイエンスポータル」より引用)

https://scienceportal.jst.go.jp/newsflash/20190625_01/index.html

そしてこの、気候が再び温暖化したタイミング＝自然環境を育むことのできる環境が整ったタイミングとなる。例えば、その環境が整うのに数百年かかろうとも数千年かかろうとも、霊媒師を通して受け取った明確な啓示内容に基づいてその時を図るのであれば造作も無いだろう。

縄文時代の人々は、瞬き一つで3000年。
これくらいの感覚で未来を見通していたという。

「待てるか待てないか」の話になるが、自分の人生の長さを遥かに超える物語が、明確、的確に理解できていたら、その時の到来に思いを馳せ、今世はそこに向かって押さえるべき事を押さえる事に周到できるだろう。

それが利己的なものなら不可能だが、万人共通の願いであれば、その目的達成に向けて、集の意識は働き続けることだろう。

「渡来系弥生人がもたらした水耕技術」とあるが、エクアドルではおよそ1億年前に米作りは始まっており、そこで耕起が発明されている。これを博物館で見つけた時は鳥肌が立った。

余談だが、エクアドルからお米が持ち込まれているとしたら、この弥生時代よりも遥か昔の話になるか？コトパクス山の大噴火はこれに関連するような気がする。

耕起(こうき、英語: Tillage)は、農業において、土を掘り返したり反転させたりして耕すことである。田畑に作物を植え付ける前段階として実施され、農機具や各種の農業機械などを使用して実施される。耕起や碎土などによって土壌を整地することを耕耘(こううん、耕運とも書く)という。(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%80%95%E8%B5%B7>



ここで該当する仮説の一部を改めてまとめる

- ・サラはアブラハムと父親は同じで母親が違う
- ・サラの母親は日本人の可能性
- ・サラはそれ相応の家系だった事が予想される
- ・サラは各方面からプロポーズされている(当時言い寄ってるのが最高位の面子たち)
- ・サラはアブラハムと一緒に神から改名を受けている(神と向かい合っている事実)

ちなみに日本には「北枕」という文化がある。

これは日本では死んだ人を北向きに寝かせることから「北枕」と言い、普段「北枕」で寝ることは良くない事、とされる。

南の定義は「太陽が最も高く上る方角」であり、エクアドルにいくとそれが真上になる。よってその反対側が北となり、エクアドルではそれは地中を示す。

人は死ぬと土に還る。

”北枕”は土に還る方向としてそのまま云わんとして表している。

自分ではコントロールできない自然界の摂理に則り、太陽に祈る事を通じて生死と向かい合ってきた我々農耕民族を前提とすると、「土に還る」ところにその起源があるところに共鳴するものがある。

これらを総合しても、かつてから、日本とエクアドルには何かしらの深い繋がりがあったと考えている。日本に水田稲作技術が持ち込まれるずっと前の時代に、日本とエクアドル間の交流があったのではないかな？

どちらにしても日本には、外側から稲作が伝わった事でここまで発展してこれた。ボク自身、幼い頃から今日に至るまで、お米を食べない週は無かった。

お米は日本人にとって密接な関係にある。

■ イザナミに対する見解～織姫と彦星の起源～



この度打ち立てている仮説がどこかの得ている場合、イザナミに関する事実を文献などで掴み取ることは難しいかもしれない。イザナミに関しては自分が無知であることも極まって憶測の領域を出ないが「織姫と彦星の起源」に繋がる要点を読み取ってもらいたいのので、無理やりまとめた上で、後に補正する可能性が大きい部分として残しておく。

ここからはイザナギとイザナミの国産みの神話を改めて読み解いていく。

※以下このチャプターは、「編纂1300年を迎える古事記の神話」を引用させていただきながら、解説していく。

<第一章>天地初発

この世界に、天と地が初めてあらわれた時、天にある高天原という場所に、アメノミナカヌシ神、タカミムスヒ神、カミムスヒ神の三柱の神々が生まれました。

この三柱の神々はひとり神でしたので、姿を隠してしまいました。
あらわれたばかりの大地は、まだ出来たばかりで、海を漂うクラゲのように、ゆらゆらと漂っていました。

その時、葦(あし)がピンと芽吹くような、新芽が萌える活き活きとした生命力によって、ウマシアシカビヒコジ神とアメノコタチ神が生まれましたが、この神々もまたひとり神でしたので身を隠してしまいました。

この五柱の神々は天地の源となる特別な神々です。
次にクニノコタチ神、トヨクモノ神が生まれましたが、この神々もまたひとり神でしたので、身を隠してしまいました。

(編纂1300年を迎える事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

これらは山の形成、生命の樹の形成、大気の形成を示しているものと思われる。
地球環境として動物のいないその手前で、まだ、酸素が生成される最中の段階と思われる。

次に男女対の神々が次々に生まれました。

ウヒヂニ神とスヒチニ神の二神、
次にツノグヒ神とイクグヒ神の二神、
次にオホトノヂ神とオホトノベ神の二神、
次にオモダル神とアヤカシコネ神の二神、
そして、ついに、イザナギ神とイザナミ神。

七代十神が、天の高天原(たかまがはら)に生まれました。

イザナギ神とイザナミ神は、クニトコタチ神から数えて七代目、
ウヒヂニ神とスヒチニ神の男女二神から数えて五代目に生まれた神です。
(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

ここで動物の誕生、そしてついに、人の誕生に繋がってくる。

<第二章> 国生み

そこで、天の高天原の神々が、イザナギ神とイザナミ神の男女二神に「この漂っている国をつくり固めよ」と命じて、天の沼矛(ぬほこ)を授けて、国づくりをお任せになりました。

イザナギ神とイザナミ神は、天の浮橋という空に浮かんだ橋に立って、その沼矛を指し下ろしてかきまわしました。潮をかき鳴らして、引き上げた時、その矛からしたたり落ちた潮が積もり重なって島になりました。この島をオノゴロ島と言います。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

先述した内容参照。

さきほど紹介した内容なので割愛するが、コトバクシ山の大噴火を節目として捉え、そこを起点として国づくりを始めたものと推測される。当時日本での噴火の有無は分からないが、コトバクシ山の大噴火以降、日本では縄文時代は終焉に向けて動き出している。

ある意味で地球が節目を迎えたタイミングで世界をヒトツナギにする動きに向けて舵を切るのはい理にかなっている。

このオノゴロ島にイザナギ神とイザナミ神が天の高天原より降って、そこに天の御柱(みはしら)と八尋殿(やひろどの)を見つけました。

そこで、イザナギ神はイザナミ神に問いかけました。
「イザナミよ。あなたの身体はどのようにできているのか」と。

イザナミ神は答えました。
「私の身体はよくできているけれど、よくできあがっていない部分が一カ所あります。」と。

それを聞いたイザナギ神は答えました。

「私の身体はよくできているけれど、一カ所だけ余っている部分があります。私の余っている所と、あなたのよくできあがっていない部分を刺し塞いで、国土を生み出そうと思いますが、いかがですか？」と。

イザナミ神は答えました。
「はい。それはよいお考えです。」

そこでイザナギ神は、「それでしたら、私とあなたで、この天の御柱で廻り逢ってから、寝所で交わりを行いましょう。あなたは右からお廻りください。私は左から廻ってあなたにお逢いしましょう。」と、イザナミ神と国を生むお約束をなさいました。

約束し終わって、天の御柱を廻った時、イザナミ神が先に言いました。
「まあ、なんと愛しい男神よ。」と。

その後にイザナギ神が言いました。
「まあ、なんと愛しい女神よ。」と。

言い終わった後に、イザナギ神は「女性が先に言うのは良くないだろう。」と言いましたが、二人は婚姻を行いました。

こうして生まれた子は水蛭子(ひるこ)だったので、葦(あし)の船に乗せて流しました。
次に淡島(あわしま)を生みましたが、これも子には数えません。

そこで、二神は相談しました。

「今私たちが生んだ子どもは良くありません。やはり天の神々のところへ参上して申し上げましょう。」と。すなわち、天の高天原に行って、天の神々の言葉をうかがうことにしました。

天の神々は占いをして「女性が先に言葉を話したのがよくないようだ。また帰って先に言う方を改めなさい」と。こうして、地のオノゴロ島に帰り降りて、再びその天の御柱を前にと同じように廻りました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)
<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

今でこそ性的描写は風俗にカテゴリされるが、本来神聖なものである。
特にそれが神同士のもを描いたものであれば尚更である。

また、二人の間にできた子は水蛭子(ひるこ)だったとある。

天照大御神は別の名前を
オオヒルメノムチ(大日靈貴)・オオヒルメ(大日女)という。

日女とは女性の太陽神のことであり、日子とは男性の太陽神のことをいう。
水蛭子、は当て字で、日子、が本当のところだったのではないか？
「蛭子」という描写から二人が近親相姦である事が読み取れる。

あまり出てこないがこの頃からイザナギとイザナミ間では
子どもをつくる試みをしていたことが表現されている。

隔世遺伝に向けた遺伝子の温存が目的と思われる。

また、ここで重要になるのは女性優位の文化の中、男性優位になっている所。

イザナギとイザナミのその名の「イザナ」とは、「誘う」の意味とされる。
また「ギ」は男性を表す語、「ミ」は女性を表す語と解説されている。

イザナギとイザナミを「夫婦」と単純に読み解くには前提が違う。

国づくりをする上で戦略的に子孫をつくる過程で
女性側が自らの興味と関心で男性を選んでいくと嫉妬心に火がついてうまくいかない。

文中、イザナギの言葉で「あなたは右から廻り、わたしは左から廻る」とあるが、
右は辺(手前)を左は奥(向こう)を表す。

イザナギは奥≡管轄外の外側から子孫繁栄していく
イザナミは辺≡管轄内の近くから子孫繁栄していく

このように捉えることもできる。

「廻ってから」とあるので、まずは日本国内に子孫をつくり、
その上で自分たちの子どもを作る流れだったような段階を示しているようにみえる。

神々からは、女が男を選ぶのは良くない、とアドバイスをもたらったのだろう。
このアドバイスによって一夫多妻の流れができた、と読み解くことが自然だろう。

この後の展開からも、
男性を立てる形にした所で子孫繁栄が円滑に進み出す。

女性側がリードする中で

男性側は嫉妬でタジタジだったのだろう。
普通に考えてつらいだろう。。

今度は、イザナギ神が先に言いました。
「まあ、なんと愛しい女神よ。」と。

言い終わった後に、イザナミ神が言いました。
「まあ、なんと愛しい男神よ。」と。

言い終わった後に生んだ子は、初めに生んだのが淡路島、次に生んだのが四国、三番目に生んだのが隠岐。そして九州、壱岐、対馬、佐渡と生み、ついに本州を生みました。
この八つの島を大八島国といいます。
(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)
<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

こうして女性側が控えて
男性側が牽引するようになったらうまく事が運ぶようになった。

ここで国内における子孫繁栄、隔世遺伝の基盤を固めている。

ここでは足元を固める流れとして、国内の影響力のある要人たちとの間に子どもをつくっていく流れと思われる。

霊媒師≡巫女さんのイメージがあるように、女性には神聖な力が宿るため、女性の存在が尊重されていたようだ。女性中心で考える上、一夫多妻の逆、多夫一妻の考えを元にするとしたら、それによって男が嫉妬して国が発展しない。

ちなみに日本ではおおよそ100年前くらいまでは一夫多妻制の国だった。
これは、今回立てている仮説を後押しする要素だ。

この頃のあり方が模倣されて継承されていく形になったのではないか？

ここで国内における子孫繁栄、隔世遺伝の基盤を固めている。
要は内政を整える段階である。

国を生み終えたイザナギとイザナミは、次に神々を生みました。
石の神、土の神、海の神、風の神、山の神、穀物の神。
ありとあらゆる神々を生みましたが、火の神を生んだことが原因で、ついにイザナミは命を落としました。
(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)
<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

ここでは周りを固める流れとして、国内の影響力のある要人たちとの間に子どもをつくっていく流れと思われる。これは国家を隆起していくための政略結婚的なものだったものと思われる。

要は、外政を整える段階にあたる。
連合国家的組織の形成に向けて。

“火の神を生んだことが原因で命を落とす、とあるが、
これはイザナギの意思に反する形での出産からの離婚を示しているように思う。
命を落とす≡存在しなくなる≡生涯の別れ。

連合国家的組織を形成する中で、どこかの国に取り込まれた形になったのだろう。

この後に黄泉(よみ)の国が出てくる。
黄泉の国をここでは欧州と読み替えて比喻する。

欧州には生贄(いけにえ)文化があり、また、欧州は狩猟民族である。
簡単に他の民族を殺害する。

当時の国政として、
仕方のない戦略結婚だったのではないかな？

イザナギすら欺かなければならないような、そんな空気感を感じる。

ちなみに、火の神が揃うことで五行が揃う準五行の構図になっていることから、連合国家的組織づくりを意図して行っていた事は間違いなさそうだ。
(火は揃っていないが、石が機能することで揃ってはいる状態)

石の神＝火(マグマが固まってできたもの。悟りを開いた”火”)
土の神＝土
海の神＝水
風の神＝水(水が気体に成ってできたもの。悟りを開いた”水”)
山の神＝木(木が腐葉土に成って蓄積してできたもの。悟りを開いた”木”)
穀物の神＝金(実りを指す)

政略結婚としては
火を揃えることで森羅万象の力を働かせるために
必要なものが揃った状態になっている

↓
最後、火を機能させる必要性

↓
リスクを伴う

↓
肉を切らせて骨を断つイザナミの政略ではないのだろうか？

イザナミを霊媒師、審神者とするなら、

啓示は受けていたはず。

イザナギの事を心の底から愛していたのではないか？
先の先までを考えた結果ミッションを優先したのではないか？

ここで火を司る神を取り込めないまま先に進んだ場合、
やがて火が対抗勢力として脅威になることが観えていたのではないか？

実際にその後から今に至るまで、
欧州人はその民族性から破壊と略奪を繰り返してきている史実がある。

エクアドルにいった時にも、
当時欧州人は、侵略する中で町に現れては女と子どもを要求したと口を揃えて言っていた。

極悪非道だと声を潜めて言っていたことから、
当時の恐怖は代を超えた今も末裔にそのトラウマを伝えている。

この後の展開をみるに、イザナミの決断が無ければ、
もしかしたら今の日本は無いのかもしれない。

生命としての命を捧げる事よりも、
愛する人と生き別れするのはどれだけ辛いことか想像できない。

この流れでフラれたイザナギはつらいが、
それを分かって作戦を実行しているイザナミはまたつらい。

この展開が織姫と彦星の物語に繋がっていくのではないか？

<第三章>イザナミの死

愛しい妻を亡くしたイザナギは嘆き悲しみ、
「愛しい私の妻よ。おまえは、子どもの一人に代わろうというのか。」といって、イザナミ神の枕もとで、腹ばいになって泣きに泣きました。その涙から女神が生まれました。

そして、イザナギ神はイザナミ神の亡骸を、出雲国(いずものくに)と伯伎国(ははきのくに)の堺にある比婆(ひば)の山に葬りました。

葬った後、イザナギ神は、腰につけた十拳剣(とつかのつるぎ)を抜いて、火の神であるカグツチ神を切ると、そこに、タケミカヅチ神などの神々が生まれました。
(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

血別を表現している模様。
火の神カグツチ神はイザナミの相手だろう。

この部分は非常に読み取りにくい、
沖縄に残る「ヒヌカン」の文化から紐解ける可能性が高い。

ヒヌカンとは、火の神様のことで、家や家庭を守ってくれる神様として、沖縄では古くから信仰されている。このヒヌカンは、イザナミが最後に子どもを産んだ相手の神様である火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）と言われている。

イザナミは、火之迦具土神との間に子どもを産み落とした時に亡くなったとされている。

ヒヌカン≡家や家庭を守ってくれる≡子どもがいるから免れる事のできる大事もある

空耳だがボクにはこう聴こえた。

ボクが幼い頃、両親離婚の危機があったのだがその時は悲しくて泣き叫んだ。
それをみて両親は仲直りをした、という出来事を経験した事がある。

さきほどの空耳はこの経験から描かされているものだろう。

火の神に当たる部分は、
実際に沖縄に行って口伝を頼りに紐解いていくのが良いだろう。

<第四章> 黄泉国(よみのくに) 訪問

イザナギ神は、亡き妻に会いたい気持ちが募り、とうとう死者の国である黄泉国までイザナミ神を追って行きました。そして、黄泉の国の御殿の内側にいる妻のイザナミ神に向かって、言いました。

「いとしい私の妻よ。私とあなたで作っている国は、まだできあがっていない。どうか、帰ってきておくれ。」

しかし、イザナミ神は、「残念です。あなたが早くいらっしゃらないので、私は、黄泉の国で作った食べ物を食べてしまいましたので、もう帰れません。でも、いとしい夫のあなたが来てくださったので帰ろうと思います。黄泉の国の神と相談しましょう。その間、けっして私を見ないでください。」

と言って、御殿の奥に入っていってしまいました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

黄泉の国を欧州≡生贄文化である事を前提にするのであれば、
イザナミの立ち位置で嫁入りしたのであれば当然その儀式は日常茶飯事のはず。

よって、黄泉の国で作った食べ物を食べてしまった、とはそういう事だろう。

どのくらい時間が過ぎたでしょうか。
たいへん長く待ちましたが、イザナミ神は現れません。

待っていられなくなったイザナギ神は、ついに髪の左のみづらにさしていた、くしの齒を一本折って火をともし、御殿の中に入りました。

そこで見たイザナミ神の姿には、なんと、イザナミの体にはうじ虫がたかり、頭、胸、腹などには雷神がいました。

それを見たイザナギ神は恐れおののき、黄泉の国から逃げ帰ろうとしました。

すると、イザナミ神は、「よくも私に恥をかかせましたね。」と言ってヨモツシコメに、イザナギ神の後を追わせました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話」より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

うじ虫≡相手側の兵隊
頭、胸、腹の雷神≡相手側の将軍

上記から、イザナギは状況を理解して逃げ出した。

「よくも私に恥をかかせましたね」

イザナミ神のこの発言から、見た目と裏腹に、
本当はイザナギの事を思ってうまく話をまとめようとしていたのではないか？

黄泉の国の神に相談した所、長く時間がかかっている。
それに対して軍隊が準備されている様子。

普通に状況を鑑みたら恋敵の領域に足を踏み入れている。
相手の文化を考えたら非道な事はわかっているはず。

そんな中で呑気に交渉を待っているとは思えない。

イザナミを最後の最後まで信じきれなかったのは
もしかしたらイザナギの方なのかもしれない。

イザナギが逃げながら黒つる草でできた髪かざりを投げると、地面に落ちて山ぶどうの木が生えました。シコメたちが山ぶどうの実をむさぼり食べている間に、イザナギは逃げました。

しかし、まだ追いかけてくるので、イザナギ神は、今度は右のみづらにさしていた竹のくしの歯を折って投げると、今度はたけのこが生え、シコメがそれを抜いて食べている間にイザナギはまた逃げました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話」より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

ヨモツシコメは黄泉醜女(予母都志許売、豫母都志許賣、泉津醜女)と書く。

『古事記』では豫母都志許賣、『日本書紀』では泉津醜女、別名を泉津日狭女(よもつひさめ)とする。これらは当て字とみられる。

ヨモツシコメをWikipediaで調べると下記の通り。

シコ(志許、醜)の語句について、ヨモツシコメの場合は黄泉国の醜い女の意とされる一方、同じくシコを名に持つアシハラシコヲ(葦原色許男、葦原醜男)は、葦原中国の醜い男の他に強い男の意とされることがある。「シコ」の本義の解釈については、黄泉国が死と深く関わっている点と、葦原色許男の根国での試練が儀礼的な死と見なされる点から、シコメ・シコヲを他界・死と密接な関係を持つ存在であるとする説、黄泉国は葦原中国、葦原中国は根国を基準にして外部であることから、それらの世界に住むシコメ・シコヲを規範から逸脱しているよそ者とする説などがある。

また、ヨモツシコメは鬼女と解釈されることがあるが、記紀にはシコメを鬼とする記述はない。性別が明記される鬼は仏典に見られる特徴であることから、醜女を仏教説話や現代の鬼とは切り離して考えるべきとする説もある。

(Wikipediaより)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%BB%84%E6%B3%89%E9%86%9C%E5%A5%B3>

ヨモ＝黄泉

ツ＝の

シコ＝志許、醜

メ＝女

志を許す女≡賢者へと導く女≡性的行為を請け負う女性

「醜」は、その行為を側から見た時に、性行為に誘っているようにみえるからか？

華麗で魅力的かつ華麗で美しい魅惑の女性

総合するとこのようなニュアンスになる。

イザナミが火の神に対して行った政略結婚と同じく、
欧州側の政略結婚を狙った手先だと思われる。

それに対してイザナギは最後まで対応し交わす様子が見受けられる。
しっかりやる事やっているようにもみえるが。

そこで、イザナミ神は、自分の体にいた八種類の雷神達に千五百の軍勢をつけて追いかけさせました。そこでイザナギは、剣を抜いて体の後で振りながら逃げました。

しかし、まだ追いかけてきます。

ようやくイザナギ神が黄泉比良坂のふもとに来た時に、そこに生えていた桃の木から実を三つ取り、待ちかまえて投げつけたところ、雷神達は黄泉の国に帰ってゆきました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

欧州側は8人の将軍たちと共に1500人の兵を引き連れて日本に攻め込んできた様子か？
(ここでも性的描写も重ねてみえるのは如何なのか)

桃の木から実を3つ取って待ち構えて投げつける、はおそらく、
桃に関わる一族が3部隊待ち構えて応戦する様子を描いているのだろう。

その後、相手側の将軍たちは母国に帰還している。

とうとう、イザナミ神自身が追いかけてきました。

イザナギ神は、千人で引くほどの重い大きな岩で、黄泉比良坂を塞ぎ、イザナミ神と、その岩を間に置いて向かい合って立ちました。

イザナミ神は、言いました。

「いとしい私の夫よ。あなたがこんなことをするのなら、あなたの国の人を一日千人、殺しましょう。」

イザナギ神が応えました。

「いとしい妻よ。あなたが千人殺すなら、私は、一日に千五百の産屋を建てよう。」

こういうわけで、一日に必ず千人死に、千五百人が生まれるのです。

こうしてイザナミ神は、黄泉津大神(よもつおおかみ)という名になりました。

この話に出てくる黄泉比良坂(よもつひらさか)は、出雲国の「伊賦夜坂(いふやざか)」のことであるとされています。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

イザナミ側勢力の「殺す」に対して、イザナギ側の「生む」がそれぞれの方向性を示している。殺す文化は狩猟民族による文化であり、生み出す文化は農耕民族による文化の置き換えとも云える。

方針が真逆の国家間における揉め事を暗に示している。

ここでイザナギとイザナミの間に”岩”が入っている。
これは仲裁人を置き換えたレトリックだと思う。

「イザナミ神自身が追いかけてきた」という表現は、
議論による国家間協議、話し合いの場に至る経緯を示しているのだろう。

互いの伝達役的なものをこの「仲裁人」が買ったともとれる

また、最後のイザナギとイザナミの言い合いからは、
夫婦喧嘩を彷彿とさせるものがある。

最後の最後までその可能性を信じてたのだろう。
それが無理である事を悟った時の血別のシーンのように思う。

二人が最後、それぞれの方向性を示す形で物語は終結している。

感情的になりながらも
己が基づく国家の方針に従う姿勢を示す事をもってお別れを告げている。

ここには天照大御神が生まれる前、
イザナギとイザナミの間に仲裁に入った
ククリヒメ≡白山比咩(しらやまひめ)大神の存在が見え隠れする

ククリヒメが日本側と欧州側との仲裁に入った事で
本質的に決裂する事なく、大惨事になる事を免れたのではないか？

イザナギとイザナミは最後の最後まで、
本当は雨降って地固まるのを互いに求めていたのだと思う。

国づくりのミッションを遂行する上で、
最たる目的が果たされるという互いの見解が一致したのだろう。

火の国にイザナミがいれば、
連合国家的組織の一部になっていなくても機能する。

この内容は在命中における決定的な決別を意味するのだろう。

イザナギもイザナミも、
仲裁人がいる上でそれぞれの方向性を打ち立てている。

これによってある意味で欧州側は丸く収まったとも言える。
イザナミの戦略は、自分の気持ちを殺す事で功をなしたと云える。

肉を切らせて骨を断つとはこのことか？

当時のイザナミが完璧であるほどに、
その胸に秘めた思いや本音の部分を汲み取る余地が無い。

深読みするのであれば、
殺す人数よりも生まれる人数の方が多し事に対する確信は、
日本国が繁栄していく証としてとる事ができる。

こういった高い視座をもってイザナミはそれ以降も
遠くからイザナギの活躍をそばですっと支援していたのではないだろうか？

近くにいても遠くにいてもそばにいる。

これをもって生涯における血別が確定的になる。
織姫様と彦星様の物語はここから始まったものと思われる。

そしてこの後、天照大御神が生まれることになる。
その前にククリヒメをここで紹介しておく。

(白山比咩大神(はくさんひめおおかみ)＝ククリヒメ)

ククリヒメは、実は、古事記・日本書紀の本文に登場せず、日本書紀の一書にわずかに登場する非常に無名の女神となる。しかし、その存在感は非常に大きく、実は、日本書紀には、古事記とは別のストーリーが存在する。それは、伊邪那岐命(イザナギ)が、その妻、伊弉冉命(イザナミ)の死に面し、悲嘆のあまり、黄泉の国までイザナミに会いに行った時のこと、通常の話では、イザナミの腐乱化した姿を見て、イザナミの元を逃れ、両者は、最終的に物別れに終わってしまうのだが、日本書紀の一節には、この時、ククリヒメが仲裁役として、両者の仲をとりもち、仲直りさせるという話がある。これを一説には、巫女やシャーマンの元祖と呼ばれ、口利き、交渉、仲裁の女神とも言われる(聞き入れるという語源が変化したものとも言われる)。また、中には、ククリヒメは、両者が発言する時の唾から生まれ出た女神とも言われる。

ただし、ククリヒメが主祭神として、登場したのは、近世に習合化された結果であり、元々は、白山妙理大権現(シラヤマミヨウリダイゴンゲン)という白山の神格化された神が祀られており、その後も仏教的な意味合いの方が強かった。そのため、どのタイミングから、ククリヒメが習合化されたのか、また、その理由は何なのかという点は不明であり、謎も非常に多いが、一説には、このククリヒメという名称も元は、高句麗媛(高句麗の姫)で、秦澄が山頂に祀ったのが、この高句麗媛であるという説も存在する。

(神社人-JINJAJINから引用)

https://jinjajin.jp/modules/contents/index.php?content_id=106



高句麗媛≡国外勢力だとしたら、二カ国間の仲裁に他国が入っていた絵図になる。

イザナギとイザナミの仲裁にククリヒメが入ったから「天照大御神が生まれた」とある。
ここから紐解くに、ククリヒメが仲裁に入ったその問題は丸く収まった様子が伺える。

岩≡マグマが固まったもの≡神聖なもの

ククリヒメ＝霊媒師はほぼ確定的。

また、ククリヒメは、白山比咩神社(シラヤマヒメジンジャ)に2100年前から鎮座している。2100年前になると、イエス・キリスト≡イザナギ≡アブラハム≡天照大御神が復活したあたりになる。時を経て啓示に基づいた内容が成就したタイミングで鎮座されたのではないか？

2100年前に鎮座したきっかけを想像してみる。

そのあたりで何らかの自然災害があった可能性がある。ククリヒメは啓示を受け、白山の高いところに社を建て、人々にそこに朝晩お参りにくるように伝えた。それによって大災害を免れた。

こういった背景があったのではないか？
(後述するが、ノアの大洪水の物語の真髄はこれと共通しているものと思われる)

ここで余談だが、神話時代の物語に目を向けると、そのトップに、霊媒師、審神者(さにわ)の存在を感じなくはいられない。霊媒師、審神者としての覚醒≡魂レベルがある水準を超えた証として捉え、特別な立ち位置におかれることによって人の上に立つ事を認識として

避ける事ができると考え、その者たちが国を統治していたのではないだろうか？

神話時代は、霊媒師と審神者による啓示、肉体を失っても継承される魂、時を超えての転生と、現代の科学でははかれないものを当たり前として展開している。過去、現在、未来を行き来するような感覚に陥る展開も多々ある。また、その展開に触れていると現在にとどまらず、過去と未来も、現在同様としてそれ相応に扱えるようになってくるから不思議。

話を戻す。

<第五章>三貴子の誕生

黄泉国から帰ったイザナギ神は「なんときたない国へ行ったのだろう。」と言って、
笠紫(つくし)の橘の小門(おど)の阿波伎原(あはぎはら)に行って、体を清めることにしました。

この時にイザナギ神が脱いだ衣服などから神々が生まれました。

イザナギが体を洗い清めた時に禍の神々が生まれ、また禍を直そうとして神々が生まれました。
水に潜ると、また港の神々が生まれ、航海を司る海の神々が生まれました。

そして最後に顔を洗うと、左目からアマテラス大神が、右目からツクヨミ神が、鼻からはスサノオ神が生まれました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

イザナギはここでは、
イザナミと構築してきた国づくりの基盤を用いて
実際に国を起こしていく段階に入る。

始めたばかりの頃と違うのは前提基盤があること。

これによって事実上イザナミがいなくても
国を立ち上げていくことができる。

※先に修正した内容がOKになれば、ここにコピペします

前に整理した内容をここに転記する。

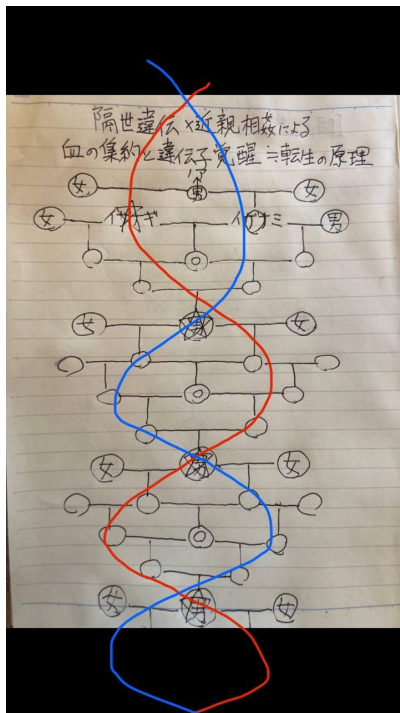
- ① イザナギと地上の人との間で子供をつくった
(国政を整えるため(国民を増やすための試み))
- ② イザナギと地上の各地の要人との間で子供をつくった
(内政を整えるため)
- ③ イザナギと神(霊媒師・審神者能力保有者?)との間で子供をつくった
(種子の準備。外政を整えるため)
- ④ イザナミと地上の人との間で子供をつくった
(国政を整えるため(国民を増やすための試み))^{注)}
- ⑤ イザナミと地上の各地の要人との間で子供をつくった
(内政を整えるため)
- ⑥ イザナミと神(霊媒師・審神者の能力保有者?)との間で子供をつくった
(種子。外政を整えるため)
- ⑦ イザナギとイザナミの間で子供をつくった
(近親相姦→種子の生成)

仕込んできた遺伝子基盤を改めて発動させていく。

隔世遺伝×近親相姦によって遺伝子を覚醒させながら、
国を隆起させていく姿が描き出されている。

- ・脱いだ衣服などから神々が生まれた
→国政の部分。①④に関わる
- ・イザナギが体を洗い清め時に禍の神々が生まれた
→内政の部分。②⑤に関わる
- ・禍を直そうとして神々が生まれ、港の神々が生まれ航海を司る海の神々が生まれた
→外政の部分。③⑥に関わる
- ・最後に顔を洗うと、左目からアマテラス大神が、右目からツクヨミ神が、鼻からはスサノオ神が
生まれた
→核の部分。⑦に関わる

核ができてからも遺伝子形成の流れを守る事で、螺旋(らせん)を描くように遺伝子は継承されていく。「☆」にて神の遺伝子は完成。陰陽が螺旋を循環し、巡り合う地点、のようなイメージ。そしてまた広がり、また集約する。



こうして、イザナギとイザナミそれぞれが作った子ども同士での誓約を経て、貴子(きし)3人が誕生することになった。

イザナギは三貴子の誕生を大変喜んで、「わたしは、子を生み続けたけれど、ついに三柱の貴き子を得た。」と言い、アマテラス大神に高天原の統治を、ツクヨミ神に夜の統治を、スサノオ神に海原の統治を任せました。

ところがスサノオ神は委任された国を治めることなく、ヒゲが長く生えるほどの大人になっても泣きわめきました。

青々とした山を枯れ山にするかのように川や海はすっかり泣き乾すように泣くため、悪い神々の声が騒がしく世の中に満ち、いろいろな物事にあらゆる禍が起きました。

(編纂1300年を迎える古事記の神話)より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

日本を任された素戔嗚尊(スサノオノミコト)は思い通りにいかない苛立ちで暴力的だったため、周囲の人々から反抗が相次ぎ、方々で問題が起こるようになった。

素戔嗚尊は森林を作りながら国を反映させる方針を打ち立てたのに対して、地上の人たちが森林を伐採して土地を切り開くため、暴力的になっていたようだ。

素戔鳴尊は、優れた森林形成術をもっていたと言われている。

その森林生成術を用いて作られた森林は強く根を張り、その森林を取り巻く形で、末広がりに辺りの木々と繋がっていくのだろう。

のちに地表上では伐採されても元に戻る。

素戔鳴尊が生成した森林は他と似て非なるはず。
これについては情報を集め、それらしき場所へ直接行って確かめるのが良いだろう。

※素戔鳴尊に関する詳細は、哲理学作家さとうみつろうさんのyoutubeチャンネルに出演されていた山陰神道の表博耀先生が話されているのを聞いて初めて知った。

https://youtu.be/y9F3EvxXtyU?si=XEQI_prSUsT39CUW

イザナギ神はスサノオ神に問いただした。
「どんな理由があって、おまえは任された国を治めないで、
泣きわめいているのだ。」

スサノオ神が答えて言うには「私は、母の国である根の堅州国に参りたいと思って泣いているのです。」と。

それを聞いたイザナギは大変怒って「それならば、おまえはこの国に住むべきではない」と、スサノオ神を神やらいに追い払ってしまいました。
(編纂1300年を迎える古事記の神話」より引用)

<https://www.kankou-shimane.com/shinwa/shinwa/1-1/index.html>

神やらい(神逐／かんやらい)とは、日本神話において、神を追放すること。
素戔鳴尊は、統治している国の人々が言うことを聞かないから暴れたとされている。

課題を解決する方向に持ち込むのではなく、
課題を問題化させる素戔鳴尊をみて、
統治する才能にかけていると判断したのでは無いだろうか？

このまま統治できるようになる未来はないと判断したのだろう。

またそれ以前に神は直接手を下してはいけないというルールがあり、
それを破ると裁きにかけられる。苦しくても真正面から見続けなければならない。
それが例え正しい判断の元、下した手だとしても絶対的にこのルールが適用される。

ここからは、天照大御神から天皇家誕生までの流れと、
その天皇家を全国各地で守ったとされる宗像三女神に至るまでの事について記載するが、その前に素戔鳴尊に対する見解を通じて、「転生」にも触れておきたい。

■ 素戔鳴尊に対する見解

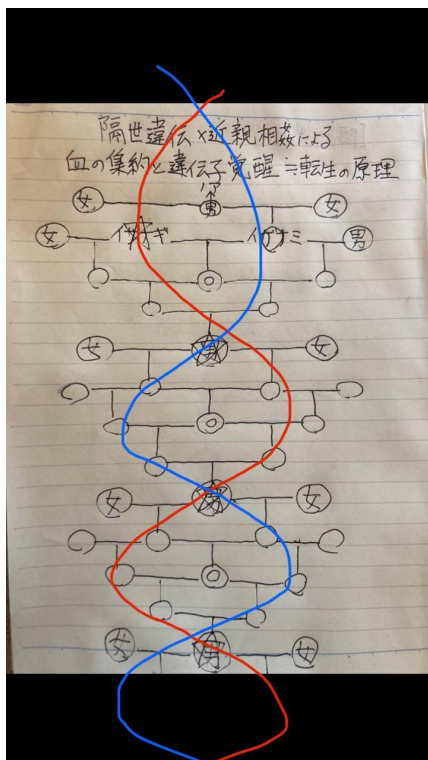
※以下、素戔鳴尊(スサノオノミコト)=スサノオ、と表記する



イザナギとイザナミによる国づくりは要するに、世界に人類を派生させるための、事実上、それまでの歴史の集大成として、改めて血を集約収束し、その最たるともいえる神の遺伝子づくりにあったように思う。

隔世遺伝×近親相姦による遺伝子覚醒図を単純に連ねると下記のようになる。

【隔世遺伝×近親相姦による遺伝子覚醒≡転生の原理】



☆をつけた所が覚醒遺伝子に当たるところ。その先の遺伝子継承までを視野に入れるのであれば、覚醒遺伝子のそれは男性である必要があるものと思われる。女性はその遺伝子を受け取って形にし、代を跨いで覚醒させるための受け皿となる。

イザナギとイザナミが覚醒遺伝子を作る事を主の目的としていたと考えると、そこには転生が起こることになる。イザナギの祖先の転生、となるので、そこにあるのはノアか？（アダムとイブに始まりノアが覚醒遺伝子の見解）

ノアの方舟、と云うのはおそらく、神社のこと。
高い山の上に建てた神社のことだろう。

これはまた別の話だが、世界でコロナウイルスが流行った当時、ククリヒメを祀る白山比咩神社（しらやまひめじんじや）に「ヨゲンノトリ」が張り出された。



ここにはこう記載されている。

「来年の8月・9月のころ、世の中の人が9割方死ぬという難が起こる。
それについて、我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであらう」

これは、江戸時代に、コレラの流行を予言したとされるヨゲンノカラスに啓示が添えられたものであり、ボクは、2023年3月に白山比咩神社をお参りにいった時にそれが張り出されているのを知った。

これは江戸時代のコレラ流行当時に張り出されたものが再度張り出される形となったものであり、これに関する詳しい情報は記載されておらず「加賀國白山」と記載されているのみ。

これはおそらく、白山の霊媒師と審神者（さにわ）によって打ち出された啓示、だろう。

コレラとは...

法定伝染病の一つ。コレラ菌が小腸を冒し、下痢と嘔吐(おうと)が激しいと極度の脱水症状になる。明治時代には数年ごとに大流行を繰り返し、明治時代の45年間の死者は全国で約37万人に上った。

余談だが、コレラは、オランダの商人がつけた名称で当時、まだ西洋医学が定着していない日本では、怪しい僧侶ともう一人が営業して回っていたらしい。これに関しては「サギにご注意！ 怪しい僧侶あらわる」という古文書も見つかっている。コレラにかかる人を狙って金儲けをするヨーロッパ人の姿が見受けられる。

※「山梨県立博物館かいじあむ」疫病退散！ヨゲンノトリコーナー参照

http://www.museum.pref.yamanashi.jp/3rd_news/3rd_news_news200410.html#ayashii

「我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであろう」



白山(はくさん)標高2,702m (Wikipediaより)

これを実践するには毎日2回通う必要性が出るため、必然的にそれが啓示されている場所の近くにいないといけない。白山比咩神社(はくさんひめじんじゃ)の近くにいるとなれば、大津波がやってきたとしても、その災害を結果的に免れることができる。

地震や津波がくるのを伝えて事前に避難させるのではなく、結果的に助かる方法を合理的に編み出したのだろう。おそらくこれは、ノアの時代の大洪水の時から採用されている方法ではないだろうか？

地球規模の大洪水がやってくる事を啓示した。

コロナに対する白山での啓示同様、場所を指定して朝晩お参りに訪れてもらう事でその場所に移動させ、大災害を免れたのではないか？このように考えると筋が通る。

今一度、その白山比咩神社に張り出された啓示内容を転記する。

「来年の8月・9月のころ、世の中の人が9割方死ぬという難が起こる。
それについて、我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであらう」

信じてノアの方舟に乗ったものは救われた
＝信じて言われた社に毎日祈りに訪れたものは救われた



このように読み解くと筋が通る。

生き残った人々が生きながらえているのは共通して預言者ノアのお陰、とするのであれば、その遺伝子を神の遺伝子とし、遺伝子を覚醒させて転生させる方向に動くのは当然の考えか。

また、イザナギ≡アブラハムからの転生なので、アブラハムの先祖を辿ると、そこにはノア、そこから辿るとアダムとイブになる。

よって当書の見解を前提にするとスサノオ≡ノアの構図が成り立つ。

■ 天照大御神に関する見解 Part 1

実家の座敷には、ボクが物心ついた時から、天照大御神の掛け軸がしてあったので、昔から身近に感じてきた。むしろ、自分は天照大御神の末裔、位に思い込んでいた。



その影響か、幼い頃から天照大御神に関心があったようだ。

これまで生きてきた中で自然と見解がまとまり、天照大御神は天皇家の起源だが、取り分け別の特別な存在、という認識をもっていた。

天皇家の起源として、今の天皇家から天照大御神まで一直線かというそうではなく、天照大御神を「神の遺伝子」の大元として別格扱いし(天照大御神は絶対唯一神ではなく、最も尊い、と表現されるのは、遺伝子を鑑みた表現だろう)、そこからの隔世遺伝の地点でできた子どもを天皇家として排出して線引きしたような、そんなニュアンスだ。

初代天皇である神武天皇は、天照大御神からみてひ孫(4代目)に当たる。これもイザナギとイザナミの章で述べた、神の遺伝子を形成する流れをとった表れだろう。

自分が伊勢志摩の生まれということもあって、天照大御神のことに関しては身近で調べることができるのが強み。

—————
天照大神(あまてらすおおみかみ/あまてらすおかみ)または天照大御神(あまてらすおおみかみ)は、日本神話に主神として登場する神。女神と解釈され、高天原を統べる主宰神で、皇祖神である。『記紀』においては、太陽神の性格と巫女の性格を併せ持つ存在として描かれている。神武天皇は来孫。

太陽神、農耕神、機織神など多様な神格を持つ。天岩戸の神隠れで有名な神で、神社としては三重県伊勢市にある伊勢神宮内宮が特に有名。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A9%E7%85%A7%E5%A7%E7%A5%9E>



イザナギとイザナミの国づくりの末、天照大御神が誕生した。
天照大御神は高天原(たかまがはら)を統治するよう命を受ける。

イザナギとイザナミが高天原から日本に降り立って国を隆起させ、その遺伝子を覚醒させて、高天原に戻したのだろう。このようにする事で日本に縁もできる。

また、その後、ひ孫を初代天皇としていることから鑑みても、天照大御神は天皇とは違った扱いになっている。象徴的な立ち位置を別の位置付けを定義して確立させることは重要なこと。同じ領域にいと人は足元をみてしまう。違う領域にいるだけでそうはならないから不思議なものだ。

また、天皇の誕生日は総称して、「天長節(てんちょうせつ)」と呼ぶ。
天、長、節。天から長く続く節≡血の繋がり。

直線的に読み解くと、「最も長く続く血筋」と受け取る事もでき、高天原をルーツとするのであれば、そこを治めた天照大御神から始まって今に至る血筋が日本の天皇家、と仮定して物語を読み解くと一本芯が通る。文献にそのまま記載されている上、日本の天皇家は一本で辿ることができるになっているので、ほぼそのまま遡ることができるだろう。書き換えられていたとしても、書き換えられた事実が世の中のどこかにはあるはず。それによって、前後関係を確認かめてその見解をあるべき元の形に戻すことができる。

ある意味でこれは、血を証明する仕組みそのものであり、ブロックチェーンであるといえる。

あえて記載するが、天皇を一人にする、という方法は、過去に向けて1本の血の繋がりを辿ることができる。当時から2000年以上経った今、他の歴史や血の繋がりが改ざんされて元を辿れないものも多く存在する中、それを見越してか、人という存在を使ってその歴史を辿れる形にしてブロックチェーンを構築した事からも、計り知れない聡明さが伝わる。

この現代に至るまでを守り育んできた日本の国づくりにおける基礎は、今世における人の知識と経験からだけではなく、啓示を元にして叡智の知識と経験を元にして構築されたものでは無いだろうか？

■天照大御神に関する見解 Part 2

天照大御神を、神の遺伝子として継いでいくのであれば、男性である必要があるものと思われる。

それならば、天照大御神と素戔嗚尊(スサノオノミコト)の誓約(≡SEX)が成立しない、となるが遺伝子覚醒の原理に基づき、その子孫間によるもの、と解釈すれば成立する。

神や王においてその名前を子孫が代々受け継ぐ文化が存在している。
2代目天照大御神、3代目天照大御神、といった具合だ。

何かしらの文献で「天照大御神」が出てくる際、それが当の本人である場合(現在)と、子孫である場合(未来)と、転生元である場合(過去)である場合があるように感じる。

余談だが、今回その対象とは違うが、女性だったと云われる神が実は男性だったとする説は、女性が重んじられる時代に男性が生まれたのであれば、男性しか生まれなかった場合、生涯その性別を隠し通す形で筋を通すことはあり得る話。

■天照大御神に関する見解 Part 3

卑弥呼は天照大御神の末裔ではないか？ 卑弥呼は中国の当て字で、本当は「日巫女」という。
(ここからは日巫女と表現する)

卑弥呼(ひみこ/ひめこ、建寧3年(170年)頃 - 正始9年(248年))は、『魏志倭人伝』等の古代中国の史書に記されている「倭国の女王」と称された人物。魏志倭人伝によると、倭人の国は多くの男王が統治していた小国に分かれていたが、2世紀後半に小国同士が抗争したために倭人の国は大いに乱れた。そのため、卑弥呼を擁立した連合国家的組織をつくり安定した。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%91%E5%BC%A5%E5%91%BC>



日巫女による「連合国家的組織づくり」は、イザナギ・イザナミに対する見解で示した国づくりの外政構築に共通する。シャーマン＝霊媒師であった可能性が高いとされている。

「日巫女(ひみこ)」は「太陽に仕える巫女」の意で、「日御子(ひおし)」は太陽神の御子の意。日御子＝天皇として解釈すると、日巫女は天皇に仕える巫女、となる。

イザナギに対するイザナミの役割が、天皇に対する日巫女の役割に重なってみえる。

また、日巫女の文献はほとんど残されておらず、突然やってきたかのような登場をすることから、その偉大な功績を残すに至る黎明期は人に知られていない事になる。

このことから高天原(たかまがはら)から命を受けて出向したのではないか？

そのきっかけは違えど、これまた、イザナギとイザナミが国づくりの命を受けた流れと似たものを感じる。

■ 天照大御神に対する見解 Part 4

ボクは小さい時に「カップルで神宮(内宮)をお参りする時は外宮も行かないといけない、そうしないと天照大御神様が嫉妬して恋人と別れることになる」と聞いたことがある。

天照大御神を男性だったとするなら、伊勢神宮における内宮＝女性(奥さん側)、外宮＝男性(旦那さん側)という解釈は間違いとなる。

公の事実だが、天照大御神の御魂は「伊雑宮」という、今の伊勢神宮とは別の場所に祀られている。

伊雑宮とは...

伊雑宮(いざわのみや、正式名:伊雑宮)は、三重県志摩市磯部町上之郷にある神社。式内社(大社)論社で、志摩国一宮。皇大神宮(伊勢神宮内宮)の別宮の一社。度会郡大紀町の瀧原宮とともに、「天照大神の遙宮(とおのみや)」と呼ばれる。2013年(平成25年)の年間参拝者数は93,267人。

804年(延暦23年)の『皇太神宮儀式帳』では天照大神御魂とされる。中世から近世の祭神には諸説あり、中世末以降は伊雑宮神職の磯部氏の祖先とされる伊佐波登美命と玉柱命(または玉柱屋姫命)の2座を祀ると考えられた。伊雑宮御師である西岡家に伝わる文書において、祭神「玉柱屋姫命」は「玉柱屋姫神天照大神分身在郷」と書かれる。同じ箇所「瀬織津姫神天照大神分身在河」とある。両神はつまるところ同じ神であると記されている。明治以降、伊雑宮の祭神は天照大神御魂一柱とされる(神宮要綱)。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BC%8A%E9%9B%91%E5%AE%AE>



ハッキリと記載されているが、天照大御神及びその末裔(伊佐波登美命と玉柱命)が祀られている。

伊雑宮は、伊勢神宮のある伊勢市の隣、志摩市磯部町に位置し、その近くには神話にも出てくる天の岩戸があり、その天の岩戸のあるダムを「神路ダム」と呼ぶ。

天岩戸口



- 神路ダム



「天岩戸の神隠し」という神話が残されており、そこには難産となった天照大御神の出産に関わる記録が刻まれているように思う。ここで天照大御神と素戔鳴尊(スサノオノミコト)が行った誓約により子どもが産まれたと睨んでいる。



ここでは読み解きはしないが、上記を元に読み解いてみて欲しい。

※Wikipedia「天岩戸」解説記事内「神話での記述」参照

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E5%B2%A9%E6%88%B8>

■ 伊勢神宮に対する見解 Part 1

初代天皇である神武天皇の親、瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)の妻である巫女木花開耶姫(コノハナサクヤヒメ)と、ヒメの父・オオヤマツミノカミは、伊勢神宮の内宮の敷地内にある「子安神社」に祀られており、この神社は内宮所轄社となっている。

伊勢神宮の内宮の敷地内にある「子安神社」には、初代天皇である神武天皇の親、瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)の妻であり巫女の木花開耶姫(コノハナサクヤヒメ)とその父、オオヤマツミノカミが祀られており、この神社は内宮所轄社となっている。



この子安神社は、「神明造(しんめいづくり)」という昔からの神社建築様式の宮であり、伊勢神宮はこの「神明造」では無い様式でつくられている。この伊勢神宮のある場所は本来、子安神社のある場所か？

伊勢神宮に行き、最初の宇治橋を渡った後、多くの人はそのまま天照大御神が祀られているといわれている所に向かうが、その流れを無視して真っ直ぐ進むとその先に子安神社はひっそりと建っている。

宇治橋を渡って正面を見ると、「正宮」と書かれた小さな看板が見当たる。
(初めてこれに気づいた時は、ここが正宮かよ！！とその発見に胸が熱くなった)

更に子安神社に行くためには細い橋を渡る必要があり、そこには見張部屋が建てられ、人が常駐している。

2023年3月に伊勢神宮を訪れた時、この方と色々とお話をする中で、

「我々のご縁でここにいます。神社に向かう人をこのような形で人が常駐して監視しているという事は、それなりの理由がここにあるという事です」

と教えてもらった。

当時そこでボクの見解を伝えと、その線もあるか、面白い、と、何か知っている様子だった。エクアドルに向かう前の出来事だったので、また真実を確かめてきてから戻ってくると伝えた。

ちなみに瓊瓊杵尊(ニニギノミコト)は「天孫降臨」といわれており、高天原(たかまがはら)を統治するために戻った天照大御神の子孫としてこの世に生を受け、遺伝子が覚醒する時を見据えて、日本に降臨したのでは無いか？
「天孫降臨」この四文字に込められているように思う。



こうして日本に降臨した瓊瓊杵尊から神武天皇が誕生し、日本に天皇家が置かれ現代まで繋がっていく。



余談

子、孫、ひ孫をそのまま「一代」と読み解くこともできるが、何かしらの目標を達成した期間の区分で「子の時代」「孫の時代」「ひ孫の時代」と比喻している可能性もある。その場合、時系列と照らし合わせて辻褄が合わない場合、この考えを用いる事で読み解けたりする。

霊媒師に降臨したものを本人として記述していたり、隔世遺伝による転生者をそれに例えていたりするものもある。なので思考が停止して直線的に読み解こうとすると浮いた話になる事が多い。っていうか、ほぼほぼそうなる。

■ 伊勢神宮に対する見解 Part 2



伊勢神宮には素戔嗚尊(スサノオノミコト)が祀られている可能性。

神社は集合林(≡集合山)のある場所、という事を前提に、そこに祀られる神は、その集合林(≡集合山)に縁がある神が祀られるはず。

神社に祀られている神様を本質的に移転することは可能なのだろうか？
可能だとしても、それが人間の手によってできるとは思えない。

伊勢神宮には以前から少し違和感を感じていた。

『日本書紀』に従えば、神宮創建は第11代垂仁天皇の時代にまでさかのぼり、西暦でいうと、紀元前69年から西暦70年のことで、それから時を経て、692年3月6日に行幸(天皇のお出ましのこと)を行い、その頃から式年遷宮が始まっている。

初代天皇が即位した時には既にその神社なるものか、その構想はあったはず。

建築文化財の観点から伊勢神宮の起源と歴史をまとめて下さっている方がいるが、そのホームページを参考にとすると、弥生時代(天照大御神の意向が直接的に届いていたころ)には現在の神宮にみられる掘立柱や棟持柱の遺構が無かったり、伊勢神宮鎮座から685年頃までの神宮に関する資料が無かったりと他にも、建築的な観点からその違和感を指摘している。

※寺社建築文化財の探訪<TIAS>参考

<http://masa4534.blog.fc2.com/blog-entry-264.html>

ピンとくるヤフーニュースの記事を見つけたのでここで紹介する

<https://news.yahoo.co.jp/articles/a558183aaf208d07acb7d3d69996f4ccb2d92c28>

文中、引用させてもらいながら解説していくが、元々は、今移転した神宮の元は、奈良県の三輪にあった。

ここで歴史背景を紐解くと、伊勢に神宮が移転する692年、それに先駆けて持統天皇は、「3月3日に伊勢に行幸(すること、その準備をするように)」と命じている。つまり、事実上の伊勢神宮開きの事だろう。

この時、太宰府(役所)の中納言(大納言≡トップに次ぐ地位)であった中納言の三輪朝臣高市麻呂(みわのあそみたけちまろ)は、行幸は農事の妨げになると、その職を賭して訴えかけたがそ

れは通らず、天皇はそれを無視し、692年3月6日に行幸(天皇のお出ましのこと)が行われている。

ちなみに三輪氏は、大物主神(おおものぬしのかみ)の末裔で、崇る大物主神を大神神社(おおみわじんじや)で祀ってきた家系である。

そして大物主神はスサノオの子孫。

これを踏まえて、伊勢外宮で語られ、三輪にもたらされている「伊勢と三輪は一体分身」の伝承を読み解くと下記となる。

伊勢≡天照大御神

三輪≡素戔鳴尊

一体分身≡誓約により生まれた子ども

神の遺伝子からその子どもが出来ている事を鑑みると、この伝承はそのまま読み取れる。

つまり、この構図でいくと、伊勢と三輪は同じ神、なのではなく、伊勢と三輪には別の神が祀られており(そこにいる)、それらが一体となったもの=その末裔、即ち、伊勢と三輪はそういう意味で心ひとつ、という意味に読み取れる。

こうなると、地表上とも言える表面的な部分だけ伊勢の地に移転させた事になる。

692年のそれ以降の歴代天皇は、明治天皇の代までの1000年間以上伊勢神宮を訪れていない。これまでの見解を前提にすると、霊媒師・審神者(さにわ)の存在を当たり前とする天皇家が、バチ当たりな事をしていると分かって、真正面からその神の元を訪れることができるはずがない。

また、伊勢神宮を内宮として、対としてあると言われている外宮には、本当のところは唯一神といわれるヤーウェ(YHWH)がいると聞いたことがあるが、その時に鳥肌が止まらなくなった。(生後の記録か生前の記憶かははっきりしない)

ヤハウエ(ヘブライ語: יהוה、フェニキア語: 𐤔𐤏𐤅𐤇、古アラム語(英語版): 𐤕𐤕𐤕𐤕、英語: Yahweh)は、モーセに啓示された神の名である。旧約聖書や新約聖書等における唯一神、万物の創造者の名でもある。この名はヘブライ語の4つの子音文字で構成され、テトラグラマトン(古代ギリシア語で「4つの文字」の意)または聖四文字と呼ばれる。この名前の正確な発音は分かっていない。日本語ではヤーウェ、ヤーヴェ、エホバ等とも表記されるが、エホバについて現在ではしばしば非歴史的な読み、誤りないし不適切な読み等と位置付けられる。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A4%E3%83%8F%E3%82%A6%E3%82%A7>

外宮にヤーウェが祀られているのではなく、伊勢の地にヤーウェが根差している、ということなのかもしれない。本来神宮があった場所(本質的には今もその場所、ということになる)は、伊勢市の隣、志摩市の磯部にある。

(これに関しては、「天照大御神に関する見解」で言及)

ヤーウェは、実在の有無はともかく、霊媒師たちが異口同音で立ち返る法的な存在なのだと思う。我々、地球生命体は、通常であれば土に還って他の何かになりまた転生を繰り返すが、基本的にはそれを繰り返さない存在なのではないだろうか？

転生が本当に必要になった時、世の中を相対として、その大局で人に転生する存在。五大預言者がそれに当たるのではないかと思われる。

通常はワンネス^注のど真ん中に存在し続ける存在。
あちらの世界にアクセスすると誰もが通るそんな存在。

その存在の事を伝え合う証として”YHWH”と示すのだろう。
この四文字も、複数の祈祷師が直接確かめて一致したものではないのだろうか？

注)ワンネス...宇宙のすべての存在が一体であり、全てが互いに繋がっているという認識のこと

スサノオノミコトがノアの転生とするのであれば、唯一神のお膝元に移転させれば喜ぶ、というような、自己都合による解釈でそのようにした、とも言える。
(当てずっぽうな考えではあるが筋は通る。)

伊勢の地がヤーウェが根ざす地域とするのであれば、その近くの町に天照大御神が祀られている理由にも納得がいくし、ヤーウェとノア≡外宮と内宮で対にするのにも筋が通る。
この解釈はともかく、本文としては、伊勢の地を選んだ事よりも(選択的選択の原理)、三輪からなんらかの理由で追い出したかった(排他的選択の原理)によるもの、と考える方が自然だろう。

692年に伊勢神宮が開かれた時、三輪氏が猛反発している事からもその様子が伺える。

伊勢志摩にはヤーウェ、スサノオ、天照大御神、そして後述する宗像三女神(むなかたさんじょしん)がいる。

なんだかんだ神様が集まる場所だ。

(余談)
大神神社は日本最古の神社と言われているが、闇が深いようにみえる。

大神神社(おおみわじんじや)は、奈良県桜井市三輪にある神社。式内社(名神大社)、大和国一宮、二十二社(中七社)。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。
旧来は美和乃御諸宮、大神大物主神社と呼ばれた。中世以降は三輪明神と呼ばれ、両部神道の一つ三輪神道の本拠地であった。明治時代になり「大神神社」と改名された。
三輪山を神体山とする。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%A5%9E%E7%A5%9E%E7%A4%BE>

大神神社の拝殿



大神神社は鳥居から三輪山(神体山)を直接拝する

大神神社にはうさぎが祀られている



大神神社はそこにある「三輪山」を御神体としており、兎を祀っている。兎を有難い存在と感ずるのは狩猟民族。狩りを行う時の餌として使うので食を司る。端的に読み取ると、狩猟民族が崇拝する神社、となる。

これだと、ウサギ＝神様、の韻を踏むことで、
「狩猟民族は我々よりも上」の暗示にかかってしまう恐れがあるのではないか？

もしかしたら、その歴史の中で、時の支配者たちに占拠されてしまっているのではないか？

エクアドルの首都キトでは、その近くで一番高いところの丘のてっぺんに、新約聖書の偶像が建てられている。(パネシージョの丘)



(パネシージョの丘に建つマリア様像)



このように、その領域を支配した証に、偶像を立てるのは、欧州人(カトリック勢力)の特徴だ。

大神神社がスサノオを祀っており、また古くからあった神社なのであれば尚更目立つ。
大神神社はこれまでの歴史の中で占拠されてしまっているのではないだろうか？

また、なぜその名前を大神大物主神社から大神神社に変更したのだろうか？
時を経てその名称を具体的なものから抽象的なものへ、わざわざ変更した理由はどこにあるのか。

明治天皇は山口県熊毛郡田布施出身の大室虎之助にすり替えられた説が浮上している。
(本編から激しく脱線するので割愛するが、山口県田布施市は別名、「田布施システム」と呼ばれている。マジでこの本編には不要な話。)

また、伊勢神宮が建てられてから、1000年以上の時を超えて神宮訪問したのが明治天皇というのも何か感じざるを得ない。

大室虎之助の心の声
「スサノオの神社の名前を変えてリニューアルすれば、神宮参拝も関係なくね？」
みたいなノリだったのだろうか？

これに関しても、直近では明治時代の名称変更に関わらずヒントがあるはずなので、現地で人を
辿って聞き込みをしていく事はそう難しくないはず。必要なタイミングで真実に迫りたい。

■ 宗像三女神(むなかたさんじょしん)に対する見解

天照大御神は弟の素戔鳴尊(すさのおのみこと)に邪心が無い事を、誓約(うけい)を通して確かめ、問題が無かったため、宗像三女神を授かった、とされている。



誓約はおみくじのようなもの、という表記があるが、近親相姦による障害の事を示しているのだろう。ここまでの見解を元にするるとそれを直接行った可能性もあるが、一代跨いで隔世遺伝させた可能性もある。

この宗像三女神に関して下記の記述がある。

宗像三女神

アマテラスが国つくりの前(天孫降臨より以前)、「うけい」により生まれたこの三女神に対し「九州から半島、大陸へつながる海の道(海北道中)へ降りて、歴代の天皇を助けると共に歴代の天皇から篤い祭祀を受けよ」と神勅を示した。

(Wikipediaより引用)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%97%E5%83%8F%E4%B8%89%E5%A5%B3%E7%A5%9E>



※神勅(しんちよく、旧字体: 神敕)とは神の与えた命令、またその文書をさす言葉

(天皇家 陽)

天照大御神→子→孫→瓊瓊杵尊→神武天皇

(天皇家 陰)

天照大御神系列の血×素戔鳴尊系列の血→宗像三女神

三重県志摩市志摩町で800年以上続く奇祭「潮かけ祭り」があるが、これは宗像三女神のひとり、女神・市岐島姫命（いちきしまひめ）の里帰りの祭りである。

天下の奇祭 800年の歴史

潮かけ祭り

17日 前夜祭
18日 本祭

潮かけ夏夜まつり2023
17:00 商店・各種イベント
おしょうじ
18:30 ながぶり・無病息災祈願

潮かけ・夜店・花火大会
志摩小・ランラン・舞いの奉納・まんどら・女神舞
YAHAGI「大連雲（投げ銭）」他
18:00 サッカー体験コーナー
18:00 STAGESHIMA
18:00 ステージイベント
20:45 花火大会

令和5年7月17日・18日
【場所】和具漁港魚市場周辺
伊勢志摩観光公団・志摩町「海の安全と大漁を祈願し船員と、人財とが
三重県・志摩市・志摩町」海を駆け抜け、海に投げ入れる大子と鬼の物語を
夜店出店者募集！ 出店担当 管内（お問い合わせ）090-2062-3927

主催 潮かけ祭り実行委員会 TEL・FAX 0599-85-6551 / 三重県漁業協同組合 志摩支部
後援 志摩市・志摩市商工会 / 一社 志摩市観光協会 / 各青年部・青年団 / 婦人・女性部
特別協賛 源吉丸 / 第一丸 / 安市丸 / 船員近海船主組合 ほか

当時、市岐島姫命が暮らしていたのか？
深く関わりのある島なのだろう。

イチキシマヒメ

イチキシマヒメ（イツキシマヒメとも）は、日本神話に登場する女神で、宗像三女神の一柱。水の神である。『古事記』では市寸島比売命、『日本書紀』では市杵嶋姫命と表記する。別名、狭依毘売命（さよりひめのみこと）

『古事記』では2番目に生まれた神である。『日本書紀』においては、本文では3番目に、第二の一書では最初に生まれたとしており、第三の一書では、最初に生まれた瀛津嶋姫（おきつしまびめ）の別名が市杵嶋姫であるとしている。

イチキシマヒメを祭神として祀る市杵島神社では、「市杵島姫命は天照大神の子で、皇孫邇邇芸命が降臨に際し、養育係として付き添い、邇邇芸命を立派に生育させたことから、子守の神さま、子供の守護神として、崇敬されている」という説明板がある。

（Wikipediaより引用）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%81%E3%82%AD%E3%82%B7%E3%83%9E%E3%83%92%E3%83%A1>

当時、市岐島姫命が亡くなった時、皆悲し嘆いた。
みんなに囲まれる中で市岐島姫命は土に還り大島を通して地球と一つになった。

その時浄化する魂を人々の想いと共につづらに封印して地元志摩町にある八雲神社に保管した。それを御神体とも云える大島に持ち帰って開放することで心体一致して市岐島姫命が降臨する。そこで海女さんたちが海の幸を摂り奉納する。こうして海上安全と豊漁を願う。

市岐島姫命の魂はここにあって本人は動けない。
市岐島姫命が亡くなって800年経った今もなお、町の人たちによってその魂は消えることなく、我々と共に生き続けている。

ここまではボクの妄想だが、本質的にはずれていないだろう。

また、その舞台になっている「大島」を取り巻く海は戦前、神域指定されていた歴史があり、神域とは、天皇が口にする海産物を収穫する指定地域である。

現在のように配送インフラが整っていなかった為、どこかに向けて海産物を運ぶ事は考えづらく、神域指定される海≡他と取り訳違う≡エネルギーが循環している場所≡空間に風穴が空いている場所≡エネルギーの噴き出す場所≡霊水的海水

神社の場所にしても、祠をたてる場所にしても、何かを通して"エネルギーの循環する場所≡空間に穴の空いた場所"を探している以上、神域指定するほど価値のある場所に、位のある対象が鎮座するのはごく自然な話だし、それが霊媒師&審神者となれば尚更そうすべき。

こういった事からも志摩という町とその海域が、天皇家と何かしら深い繋がりがあった事は間違いない。

ちなみに志摩市と、隣接する鳥羽市には、全国の約半数に及ぶ海女さんがいる。
伊勢志摩の海女漁は約2000年の歴史を持つ海洋文化である。



鳥羽市と志摩市の海女操業人数は1949年の6,109人から2014年には761人と8分の1に減少している。海女の主要漁獲物であるあわびを始めとした水産資源全体が減っていて、生活が成り立ちにくくなったのが大きな要因である。

こうした海洋問題もまた足元に眼を向けてこそ始めて解決の扉が開かれる類のものであって、その延長線上にコタエは無い。

我々地球人は武器を置いて、足元に目を向け、そこにある問題を共に議論するべき時がやってきている。

大島と宗像三女神の一人である市岐島姫命(いちきしまひめ)が密接に関わっているのは知っていたが、2023年の潮かけ祭りに参加した際、ある漁師から、

「宗像三女神はみんな昔は志摩にいたらしい。和具と、間崎と、ともやま(3つとも志摩市にある地名)にそれぞれがおった(いた)らしいぞ。」

と聞いた。

これが本当なら衝撃の事実で、日本の空白の歴史を明るみに出すきっかけになりうる。

潮かけ祭りは800年以上の時を跨いで日本の”血”を巡る物語を今に残す、日本人全員に関連のある祭りだ。今は地元の人たちですら、「伊勢神宮に関わりのある地元の祭り」という認識の元、たちの有志(ボランティア)がその開催を支えている。

しかし近年、海洋環境の変化で地元の漁師は悩まされている。
そんな中で潮かけ祭り開催に対しても腰が重く、その協力者は年々減少しているという。

このまま衰退していくとまた一つ、かつての歴史が分からなくなってしまう。

当書を通じて、この潮かけ祭りが日本人全員に関係のあるお祭りである事を伝え、潮かけ祭りに対するクラウドファンディングを実施、それによる今後の継続した潮かけ祭りの開催を通じて、日本の古き歴史を守り育まれていく、に繋げていきたい。

10.最後に

最後までご覧頂き、誠にありがとうございました。

この書に記載された物語は、その後現実世界に繋がり、今もその延長線を辿っていけば、この活動の背中に辿り着ける事かと思えます。

この書は”幹”です。

ここから始まる物語に興味があれば、ぜひその足取りを追ってみてください。
その道のりの中で、きっとあなたなりの”コタエ”が見つかるはずです。

この書の波及を通して、代を超えた子孫たちが、心身財共に豊かな暮らしを営んでいけるように願ってます。